

# 魔法少女靖子~暁の水平 線に平和と友情の絆を~

ラフィーネ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

艦これにはまった靖子は、ある日突然、艦これの世界に迷い込んでしまいます。そこで、艦娘として戦うことになります。この作品には、ストライクウィッチーズ、リリカルなのは、まどかマギカのキャラクターも登場します。ドタバタあり、ほのぼのあり、アクションありの作品です。（タグの追加の可能性あり）あと、時間があれば文章追加・改良も行います。（重複を防ぐため、主人公の軽巡の名称を変更いたします。なお、

編集中のお話の場合は（編集集中）の文字を入れておきます。）

# 目次

靖子、艦これの世界に迷い込む	1
靖子、艦娘たちと出会う	8
靖子、鎮守府で吹雪とご対面	16
靖子の鎮守府探検	23
靖子、艦娘デビュー!	30
靖子(島雪)の初授業、初演習	37
島雪(靖子)、芳佳と再会	45
島雪、初出撃、そして正体がばれる	52
島雪、初めての遠征	60
島雪、お友達と再会、鎮守府を去る	67

みんなと再会、ゆうきたちも艦娘デビュー!	76
艦娘島雪の鎮守府	83
艦娘鈴鹿(ゆうき)の鎮守府	91
艦娘木津(ふきの)の鎮守府	98
艦娘薄野(まどか)の鎮守府	105
艦娘笛吹(ひみか)の鎮守府(編集中)	112
艦娘奈半利(妙子)の鎮守府	117
長門さんがやってきた!	124
島雪とはみだし者の伊達一提督(編集中)	133
島雪と鳳翔さんのお料理	139

蒼龍さんと鳳翔さんの出撃 ————— 146

扶桑さんと山城さんのお花見 ————— 155

漣（さざなみ）がやってきた（再掲載）

164

青葉、鎮守府新聞作ります！ ————— 173

島雪と潜水艦の伊58と伊168

185

島雪と女装子提督 ————— 194

島雪と久々のウィッチーズ基地（編集集中）

206

ともかと軽巡大井さん、そして魔女出現

（編集集中）

215

# 靖子、艦これの世界に迷い込む

ある夜中、午後7時を回っていただろうか、靖子は、最近始めた艦隊これくしょんに夢中になっていた。

「だいぶ改造は進んだなあ。いつか艦これのコスしたいなあ。誰がいいかなあ。榛名さんかなあ、朝潮ちゃんかなあ？」

彼女は高校生・靖子。1月末から艦これをはじめている。これまで集めたもう艦娘は100を超える。

「ちよつとその辺を散歩するか」しかし、散歩と言っても空を飛行するのだが。靖子は魔法少女である。・・・といっても、変身後は背中の機械で飛行機のように空をとぶのだが。サイボーグになるとでも言おうか。そして、魔法少女に変身した靖子は、窓にカギがかかっていることを確認して、空中散歩に向かった。靖子は空間ディスプレイを展開、ラジオの選曲をしていた。変身している間は空間ディスプレイの展開は可能なのだ。それに燃料は自分の食べた食べ物なのだ。もちろんインターネットだって見れるし、艦これだってできるのだ！おまけに動画もみれたり、テレビもみれるのだ。

「最初のコスなにしようかな？霧島さんしたいし、霰（あられ）ちゃんでもいいし。いや

いや天龍さんもかつこいいし、まよっちやうなあ」

・ ・ ・ かし、靖子の周辺は突然濃霧に包まれた。

「え?!今日は霧にならないはずじゃ?ちよ、何よこれは。何にも見えないじゃん!!」

そう、天気予報では濃霧の予報はなかった。しかし、霧は深くなるばかりだった。靖子は飛行機にぶつからないようにレーダーを頼りに慎重にとんでいた。 ・ ・ ・ ・ ・ ・ そして、どれくらいとんだんだろうか。しばらくすると霧を抜けた。

「よかつた、早くおうちに帰ろう ・ ・ ・ あれ?」

靖子はあたりをを見回したが、何かおかしい。ほかの世界に行ってしまったようだ。下には街が見えず、あたり一面は海だった。海面を見たが、何か人みたいなのが6人いた。

「人?でもなんか浮いてる!?なにかボートみたいなのが浮いてる!」

靖子は戸惑った。やっぱりここは自分の住んでる世界とは別の世界じゃないかと靖子は感じた。靖子が空間ディスプレイのモニターで拡大すると、見たことがない女の子が6人もいた。それは、靖子が最近夢中になっている艦これのゲームでみたことがある女の子たちだった。駆逐艦の白雪、初雪、電(いなづま)、軽巡洋艦の木曾、戦艦の金剛、軽空母の飛鷹(ひょう)が航行していた。

「おい、だいぶ遅くなったな榛名。はやく鎮守府へかえろうぜ」

「そうね、もうこんなに暗くなっちゃったし。」

「早く帰ってごはんたべましよう。」

ちょうど6人は鎮守府へ戻るところだった。鎮守府？ 榛名？ ここは艦これの世界なのか？ 疑問に思った靖子はそれを確かめるべく、6人に声をかけようとしたが、そこへ謎の飛行物体が接近していた。

「え？ 何あれは？」

靖子は飛行物体のデータを調べたが、データにはなかった。それは、軽空母又級に搭載されている艦載機だった。ほかに戦艦ル級や、軽巡へ級、駆逐口級2つもいた。もちろん、これもあの艦これに出てくる深海棲艦である。

「何だあの小娘は？ 見たこともないやつだな。鎮守府の新しい艦娘か？ いや、空なんぞとべるはずがない。まあいい、叩き落せ！」

下に戦艦ル級がいることに気づいた靖子は戦艦ル級に、謎の艦載機のことについて尋ねた。

「あのー、あの飛行機ラジコンですか？」

しかし、戦艦ル級たちは、何のことかわからなかった。

「はあ!? 何言ってるんだこいつは。ラジコンなわけないだろ！ とにかくあの小娘を撃ち落とせ！」

それにこたえるかのように謎の飛行物体は靖子に向かって攻撃を開始した。

「まずい！とにかく通信を」

それをみたのか、戦艦ル級は

「助けを呼ぼうったってそうはいかないよ。」

謎の飛行物体の攻撃で、装置の一部に損傷を受け、通信不可能になった。

「あかん、仕方ない、信号弾発射！」

靖子は信号弾を撃ったあと

「誰か！助けに来て！お願い！」

と泣き叫んだ。しかし、攻撃はやまない。

「誰も助けにきやしないよ。かわいいお嬢ちゃんだけど、死んでもらうよ。」

「くそ！応戦しかないのか。」

靖子は自動小銃で謎の飛行物体へ攻撃を開始し、3機全部撃墜した。しかし靖子への攻撃は止まなかった。

「しつこいわよー！」

引き続き自動小銃で戦艦ル級たちと交戦したが、弾切れになった。

「まだまだあ!!」

さらにサブマシンガン、ハンドガンなど使用できるすべての武器で戦闘を続行した。



一方そのころ、戦艦・榛名たち艦娘一行はその海域に向かっていた。ほかに駆逐艦・叢雲（むらくも）、軽空母・隼鷹（じゅんよう）、軽巡洋艦・天龍と神通、重巡洋艦・那智もいた。そのとき、天龍が信号弾に気づいた。

「おい、今のなんだ？ 那智」

「ああ、私も見えたぞ隼鷹」

神通も靖子の助けを求める声に気づいた。

「女の子の声がしましたけど」

「どっちの方角だ？」

榛名が靖子が戦艦ル級たちと交戦しているのに気付いた。

「あ、あれです！ 急ぎましょう」

榛名たちは急いで靖子のところにいった。しかし

「まずいなあ、あの戦艦ル級もいるぞー！」

と、隼鷹は戦艦ル級もいることに気づいた。

「だったら提督に応援を呼びましょう」

「了解！」

叢雲の提案で応援をよぶことになった。急いで、鎮守府に戦艦ル級たちがいることを報告し、応援を要請した。そのころ鎮守府では、駆逐艦・吹雪が、初雪と深雪と一緒に

曇り空を眺めていた。

「おかしいなあ。天気予報では晴れるっていつてたのに。」

「初雪、天気予報あまり見ない。」

「一雨きそうかな？ だったら傘がいるなあ。初雪、吹雪、傘わすれんなよ！」

3人は傘を持って校舎へと向かった。同じころ、ウィッチーズ基地でも、曇り空だった。エイラが芳香とリネットがタロット占いをしていた。

「ん？ なんか、久しぶりにあう人と出会うとでてるぞ？」

「久しぶりに？ 誰だろ？」

「私たちが知ってる人？」

それはエイラにもわからなかった。しかし、ひよつとしたら靖子のことなのではないのか？ 3人はそう考えたが、わからなかった。この基地では、最近ネウロイが出現したという連絡はなかったが、そのかわり深海棲艦が出現しているので、鎮守府と連携して事態に備えよと命令を受けていた。

「もし靖子ちゃんだったら、久しぶりにストライカーパックで空飛ばうか？」

「ああ、あれか。まだあるしな。ちゃんと整備もしてるけど、いまは予備になってるからな。」

「でも靖子ちゃんだったら会いたいな。」

3人は、靖子がここへく来るのを楽しみにしていた。その頃、靖子は深海棲艦たちと戦っていた。

「信号弾撃ったけど、来てくれるかな。ん？救援かな？早くして、もうあたし限界なの、もう弾もなくなりそうだし、早く、お願い！」

果たして、榛名たちは靖子を救うことができるのか？

## 靖子、艦娘たちと出会う

榛名たちがいる鎮守府では、着任してから2か月たらずの二十歳代の女性提督がいた。

「今日も鎮守府海域は平穏だね。平和が一番！つてか。仕事終わったら一杯やつか！隼鷹と那智誘つて。あはは」

彼女の名は郡津（こおづ）玉代（たまよ）、優秀な提督ではあったが、司令部からは小娘扱いされているが、彼女は気にしていない。新しい艦を考えたりのが好きな提督で、すきな言葉は規格外、度外視である。お酒も好きで、時々那智と隼鷹と酒を飲むことがある。彼女は何気なく、紅茶のペットボトルに手を伸ばし、一口飲んだ。しかし、それは金剛の紅茶だった。そこへ金剛がきた。

「ハイ提督、大変よ。．．．あー！それ私のイチゴ味の紅茶！」

提督は思わず金剛の顔に紅茶を吹いてしまった。

「何するのよ提督、私の顔に吹きかけないで」

と、金剛はハンカチで顔を拭いた。

「ごめんなさい、あとでコンビニ行って買ってくるわよ」

とわびた。

「絶対よ！約束は守ってくださいーい！」

「約束は守るから。それでどうしたの、大変って。」

「あ、そうだ、忘れるところでした！榛名たちから応援要請来ました。戦艦ル級が現れたって連絡が！それに女の子も助けてほしいって！」

「な、なんですって！すぐに陸奥たちを向かわせなさい！」

「ok！」

鎮守府はあわただしくなった。教室では駆逐艦・吹雪たちが理論の授業を受けていた。先生は重巡洋艦の愛宕（あたご）である。そこには響（ひびき）、電（いなづま）、雷（いかづち）、暁、皐月（さつき）、長月（ながつき）、深雪、初雪ともいた。深雪は吹雪に

「なあなあ、吹雪、あんた後輩ほしいんじゃないのそろそろ？」

と声をかけた。吹雪は

「そんなこと考えてないよ。」

と否定した。と、そこへ出動の要請が。

「榛名たちから応援要請がきました。陸奥、日向、龍驤（りゅうじょう）、利根、吹雪、皐月はただちに出撃の準備をしてください」

「おーし、いくぞ吹雪」

「はい！皐月ちゃん」

そして、港では、戦艦陸奥、日向、軽空母龍驤、重巡洋艦利根が待機していた。

「おい早くせぬか！早くせぬと手遅れになるぞ二人とも！」

「はい」

「よーし、行くぜ」

こうして、6人は、榛名たちのいる海域へ向かった。吹雪が利根に尋ねた。

「あの、どういう要請ですか？」

「なんでも戦艦ル級から女の子を助けてほしいという応援要請があつたのでな」

「女の子？」

「詳しい話は後にしろ、急ぐぞー！」

と、日向は注意した。そのころ靖子は、善戦したものの、満身創痍だった。もう戦う力は残っていないかった。体中傷だらけだった。

「……………」

「もうここまでだな、お前のその戦いぶりに敬意を表して、散っていった艦娘たちがいる天国へ送ってやろう」

と、連装砲で靖子を攻撃した。

「うわあ！」

軽巡へ級も靖子に対し攻撃をした。

「食らえ！」

「いやあ！助けてえ！」

攻撃を受けた靖子は海面に落下した。それをみた榛名たちは

「まずいわ！早く助けないと手遅れになるわ！急いで！」

「もうすぐ陸奥たちが来るって」

「わかったわ、まずはあの子を助けないと」

「ok」

榛名たちは急いだ。そのころ靖子は海面に浮いていた。

「・・・もうここまでね。お兄ちゃん、お姉ちゃん、みんな、今までありがとう。あたしの分も幸せに・・・」

もうここまでかと、靖子は死を覚悟した。そして戦艦ル級は靖子に向かって大砲を向けた。

「かわいそうだけど、ここまでね。さあ、天国でお友達がまつてるわよ」

そのとき榛名の連装砲が火をふき、一撃で軽巡へ級を撃沈させた。続いて隼鷹の飛行機が戦艦ル級を攻撃した。

「おのれ！誰だ邪魔しおって！」

「この子を殺すのは、この榛名が許しません！」

榛名たちが靖子を助けに来た。

「あ、あなたたちは……」

そこへ天龍が来て靖子を抱きあげた。

「もう大丈夫だ、ひどくやられたな」

「ありがとう」

そして、叢雲、那智の連装砲、神通の単装砲の攻撃により、駆逐口級2隻は撃沈した。さらに隼鷹、そこへかけつけた龍驤の飛行機の攻撃、日向の連装砲の攻撃により軽空母又級も沈められた。

「おのれえ！こうなったら皆殺しだ！」

残った戦艦ル級は攻撃をするが、

「お前は往生際が悪い！」

「ぐわあ！」

日向の一撃で片方の大砲を破壊され、さらに陸奥の連装砲による攻撃で沈められた。

「どうやら、倒せたわね。早くこの子を鎮守府の病院に運ばないと。」

「皐月、吹雪、この子を鎮守府まで運ぶぞ」



「はー！」

靖子は鎮守府の病院に急いで搬送されることになった。

酸素呼吸器をつけた靖子は夜空を見上げた。

「ここはどこなんだろう？ひよつとしたら艦これの・・・？」

そこへ天龍がよつてきて、靖子に話しかけてきた。

「安心しな、もう鎮守府がみえてきたよ、すぐ手当てしてやるからな」

それを聞いて靖子の疑問は確信に変わりつつあった。やはりここは艦これの世界だと。同時に、自分が助かったことに安心した。鎮守府では、靖子を収容すべく、すでに救護班がスタンバイしていた。衣笠、青葉が心配そうに彼女たちの帰りを待っていた。そして、ようやく到着、急いで靖子はストレッチャーに乗せられ、病院に運ばれた。

「あの子が助け出された・・・。」

「そうみたいね。助かるといいけど。無事を祈りましょう。」

「うん。」

そして、治療を終えたあと、集中治療室に運ばれた。靖子は、戦艦ル級たちに散々いたぶられ、全身に負傷していた。一方提督室では、靖子の治療が無事終わったと、金剛によつて連絡が入った。

「今、あの子、集中治療室で寝ています。」

「そう、ドクターの診断は？」

「全身に傷を負っています、命に別状はないとのこと。ただ、今日一晩は万一のため集中治療室で一夜を明かすとのこと。です。」

「それはよかったわ。できたら、あの例の物を使うときが来るかもしれないわね。」

「例の？あの設計図の軽巡洋艦ですか？」

「そうよ。で、あの子の所持品は？」

金剛が靖子の所持品を調べたら、自分とは異世界の人間であることがわかった。一方、天龍と龍田、川内（せんだい）は、靖子のが気になっていた。

「あいつ、助かるといいな。」

「きつと助かるわよ。ちゃんと意識もあつたし。」

「そうよ大丈夫よ。」

そして翌日、一般病室に移された靖子は、呼吸器をつけたまま目覚めた。ちようどそこへナースがやってきて、意識があるのを確認、靖子の呼吸器を外して、医療の機材を片づけた。靖子はナースにここはどこかと尋ねた。

「ここは、どこですか？」

「ここは鎮守府よ。」

「鎮守府？鎮守府って、あの・・・!?」

その言葉通り、ここは鎮守府だった。やはりここは艦これの世界だったんだと、確証をもった。

## 靖子、鎮守府で吹雪とご対面

夜、提督の執務室では、提督である郡津少将と金剛が会話をしていた。救出した靖子のことについてであった。

「あの子は？」

「大丈夫です、もうお目覚めです」

「そう、よかった。一時はどうなるかと思ったわ。ところで、例の天龍型3番艦のことなんだけど。」

「適任者このとですね？」

「そのことなんだけど、あの子ならできると思うの。」

「What？」

「報告書読んだけど、ひよつとしたらと思って・・・」

彼女は、靖子を艦娘として鎮守府に迎えるつもりだ。

「そんなの前例がありません！あの子にできるのですか」

「やってみる価値はありそうだわ。もし無理なら、ここの身の回りのお仕事もあるし。お洗濯とか、お掃除とか。」

それを聞いて、金剛は納得した。確かに普通の人間に艦娘をやらせるというのは、この世界では前代未聞のことだった。

「わかりました、提督がそうおっしゃるのなら・・・あのー、紅茶のことですが」

「ごめんなさい、今日はもう門限だから。明日買っておくわ、レモンティーね。」

「イチゴ味の紅茶でーす！間違えないでくださいーい！」

「ごめんなさい、ミルクティーね。」

「ノー！ イ、チ、ゴ、あ、じ、デーーース!!」

「いなご味ね」

「どんな味ですか!!まったく!!」

翌日、病室で靖子は最初の朝を迎え、カーテンを開けて、まどからあたりを見回した。

「・・・ん、ここは?」

夕べのことはなかなか思い出せなかった。しかし、ここはどこかは一応の見当はついている。ベッドが並んでいる、ご飯を食べるためのテーブル、テレビもおいてある。少なくとも病室であることは間違いない。考え事をしながらベッドに腰かけた。

「・・・なんか知ってる病院と違う。それにしてもひどくやられたなあ、傷だらけだよ。いきなり攻撃してくるなんて。なんで攻撃してきたんだろう? 誰!? 女の子4人? あとの2人は帽子かぶってるけど?」

そこに誰かいるか靖子は気づいた。窓からのぞいていたのは響（ひびき）たちであった。

「あの人がですか？運ばれた女の子ってのは。」

「そうみたいね。」

「仲良くなれるかな？あの子と。」

「それは会ってみないとわからない」

そこへ利根が来て、

「おいおぬしたち！その子にあうならあとにしろ！まずは朝食だぞ。」

と、4人を食堂へいくよう促した。靖子は、どこかで、いや、ゲームで見たことがある女の子だと思ったが、思い出せなかった。確かに見覚えはあるのだが……。そのころ、鎮守府の食堂では、艦娘たちが朝ご飯をたべていた。間宮さんは吹雪におかゆを渡し、靖子の病室に持っていくよう指示した。それを見つけた赤城は

「あら、それ私にくれるの？」

「だめです！これは病室の人にもっていくぶんです！」

「冗談よ、冗談」

吹雪は、ここの鎮守府では新人であった。食堂でも、靖子のことでは噂はもちきりだった。

「ねえ、赤城さん」

「なあに、加賀さん」

「なんか女の子が保護されたそうね。なんでも戦艦ル級に襲われたとかで。」

「ああ、知ってるわ。どんな子か、あとで見にいつてくるわ。」

「それより・・・赤城さん。朝ご飯まで大盛りですか!？」

「だめ？」

朝ご飯まで大盛りで食べる赤城さんでした！

病室で寝ていた靖子は、あの4人の女の子のうち、一人だけ見覚えがあるような気がしたが、思い出せなかった。その時、吹雪がドアを叩くノックの音に気が付いた。コン

コン！

「はい、どうぞ」

「朝食を持ってきました。おかゆです。」

靖子は、ちよつと警戒していた。

「そこへおいといてください。」

「食べないんですか？」

吹雪は、ひよつとしたら食欲がないのではないかと思つた。

「食欲がないんですか？大丈夫、ちゃんとたべられますよ。」

吹雪はおかゆを一口味見した。

「ね、問題ないでしょ、私だつてたべられますよ。」

それを見て、靖子は謝った。

「ごめんなさい、ちよつと警戒してました。疑つてごめんなさい」

「いいんですよ、間宮さんはいい人ですから。それに金剛さんや利根さんたちだつて、提督も、ここはいい人ばかりですよ」

利根？金剛？やはりここは艦これの世界だったのか！靖子は思った通りここはあの艦これの鎮守府だとますます確信した。靖子は、おかゆに手を伸ばし、すっかり平らげた。

「おいしかった、ごちそうさま」

と、靖子はお皿を吹雪に返した。吹雪は靖子の食べっぷりを見て笑った。

「まあ、まるで赤城さんみたい。おなかすいてたのね。うふふ。」

「赤城さん？」

「ええ、ここの人よ」

赤城さんといえば、あの正規空母の赤城さんだ。ということとは加賀さんもいてることになる。靖子はそう考えた。しかし、着ている服について聞いてみた。

「なんであたしこんな服着てるの？」



「ああ、ずぶ濡れだったし、そのまま治療するのはあれだから服ははさみで切つて処分しちゃつたわ」

靖子はワンピースタイプの病衣の裾をまくりあげ言った。

「しかもなんでパンツこんなのはいてるのあたし。これ子供がはくやつっぽいよ」

それを見た吹雪はあわてて病衣の裾をおろさせた。

「だめ！女の子でしょ。」

「……ごめんなさい」

と、靖子は謝った。

「まあ、ちゃんと着るものはこうして用意できたんだし」

「そうね、助けてくれてありがとう。あのままだったら、あたし本当に死んでいたかもしれないし……。」

靖子は涙を流した。

「いいのよ。あたしたちだってあなたを放つておくわけにもいかなかったし。」

そのとき、ドアをノックする音がした。響たちだ。

「はーい。どうぞ。」

暁たち4人が病室に入ってきた。

「あ、あなたたちはあの時の！」

4人は自己紹介した。

「私は響、よろしく」

「私は暁よ」

「私は雷（いかづち）です。」

「私は電（いなづま）です、よろしくお願いします。」

靖子も自己紹介しようとしたが、吹雪にとめられた。なぜ自分が自己紹介をとめられたのか、靖子にはわからなかった。

「あとで提督からお名前教えてあげるって。」

4人は納得して出て行った。

「あ、提督からここを案内するようにいわれたの。歩けるかな？」

「歩けるけど。メガネがないと・・・。」

吹雪はわかっていたかのようにメガネを靖子に渡した。

「ありがとう。あとシユシユとかない？ ツインテールにしたいんだけど。」

「あ、やったげる」

髪を結ってもらった靖子は上着を羽織って吹雪の案内で中を歩くことにした。どんなところなのか、靖子は興味津々だった。

## 靖子の鎮守府探検

靖子の住んでいる街では、ゆうきたちが上空から靖子をさがしていた。

「どう？ 見つかったまどかちゃん」

「ううん、 いないわ」

「連絡もないし、 どうしよう」

そこへふきのが飛んできた。

「やっぱりいないぜ。 困ったな」

そこへなのはも来た。

「ひよつとしたら靖子ちゃん、 異世界へ飛ばされたかも。 リンデイさんをお願いして協力してもらおうよ」

3人はしばらく考え込んだが、 最終的に頼むことにした。 ゆうきたちも靖子同様魔法少女である。 もちろん飛行可能である。

「よっしゃー！ そうと決まれば連絡だ！」

さっそくふきのはリンデイ提督に連絡した。 デイスプレイに映っていたリンデイ提督はお茶をのんでいた。

「リンディさん！」

と、ふきのが叫んだら、デイスプレイを超えて茶しぶきがふきの顔にかかった。

「何だよもう！」

「ごめんなさい。どうかしたの？」

「靖子がいなくなっただけ。もしかしたら異世界に飛ばされたのかと思ってな。」

「わかったわ、こつちでも探してみる。」

通信を終え、ふきのがハンカチで顔を拭いてると、フェイトもそこへかけつけた。

「あ、フェイトちゃん、リンディさんに連絡とったぜ。協力してくれるって。」

フェイトは靖子が日ごろはまっているゲームのことについて話した。

「靖子さんもしかしたら、艦これの世界にいったのかも。」

それを聞いて、なのはもうなづいた。

「そういえば！なんかその艦これのコスしたいって、いつもいってた！」

それを聞いたまどかは

「そういえば、なんとなくそんな気が……」

しかし、ゆうきは半信半疑だった。

「そんな世界あるはずが……ありえるかも」

みんなはとにかく、リンディ提督の連絡待ちということになった。一方、鎮守府では、

靖子は吹雪の案内で中を見て回っていた。

「あれ？ここは？」

「ドックよ。修理するときを使うの」

「つまり修理工場ってわけだね。」

「そういうことになるかな。」

「ドックって、犬？」

「それはドッグ！」

靖子はおふざけで言ったが、すぐに吹雪はツツコミをいれた。続いて案内されたのは間宮さんの食堂だった。吹雪は靖子を紹介した。靖子も間宮さんに礼を言った。

「あの、おかげおいしかったです。ありがとうございます。こんな見ず知らずな私に優しくしてくれて……。」

「いいのよ、別に。食べてくれれば。」

そのとき、大盛りで食べる艦娘を靖子は見つけた。

「あ、吹雪ちゃん、もしかしたら、あの人が吹雪ちゃんの言ってた……。」

「ええ、赤城さんよ。赤城さん、まだ食べてたの？」

「もうすぐ食べ終わるとこよ」

しかし、こんなに食べて赤城さんは大丈夫なのかと、靖子は不安げだった。そのとき、

靖子と赤城の目が合った。

「ん？あなたなの？助け出された女の子ってのは。名前は？」

「え、名前ですか？」

そこへ吹雪がフォローに入った。

「あ、この子の名前はあとで提督が教えるって。」

「そう、私は赤城、正空母艦だ。よろしく。」

「よろしくお願ひします！」

続いては教室。ここで吹雪たちは授業を受けている。

「へえ、駆逐艦クラスとかに分かれてるんだ。」

「そうよ。」

靖子は壁に貼られている時間割に注目した。

「この時間割かわってるね。演習に、点検？」

「私たちの授業には普通のことと違う時間割があるの」

靖子はここでも自分の学校とは一味ちがうなああと、関心していた。そこへ連装砲ちやんがやってきた。

「あ、かわいいね。」

すると連装砲ちやんが靖子の頭上に乗った。

「あは、おもしろーい！」

さらにそこへ島風がローラーシューズでやってきた。張り紙にはローラーシューズ禁止と書いてあるにも関わらず。靖子は注意しようとしたが島風は……。 「やつほー、おもしろいなあ！」 吹雪も注意しようとしたが島風は……。

「これほしかつたんだあ！」

調子に乗りすぎた島風は止まららずに

「たすけてえー！」

と叫んだあと、壁に激突した。

「あーあ、大丈夫？」

「この子は島風ちゃんよ」

島風は靖子の頭上に連装砲ちゃんがいることに気づいた。

「こら、だめじゃない離れちゃ……って、あなたは？この鎮守府じゃ見ない顔ね。新顔？」

「夕べここの病院に運ばれて……」

「あなたなの？噂の女の子ってのは。私は島風、この子は連装砲ちゃん。よろしくね。」

「よろしく」

靖子は一通り挨拶すると、吹雪と一緒にグラウンドに向かった。靖子はふと思った。

あの連装砲ちゃんもラジコンか何かで動いてるのではないかと。あとで聞いてみることにした。続いてグラウンド。そこでは仮設のステージで4人が踊っていた。そこにはあの榛名の姿があつた。

「賑やかそうですね」

靖子がステージに近寄つたら、踊っていた榛名が

「あ、あなたは！」

とステージから降りてきた。靖子は榛名に助けてくれた礼を言った。榛名は靖子だけがはまだ完治してないものの、元気な姿に一安心だつた。

「よかつた、元気になつて。心配したんだから。あ、紹介するね。私は榛名、よろしく。」

「私は比叡。」

「へーいい私は、金剛です！」

「私は霧島ともうします。あなた目が悪いの？」

「ええ、近眼ですが。」

「そう、ほかにもこの鎮守府にはメガネを使用してる人がいるわ。あとで教えてあげるわね。」

4人は靖子に挨拶した。もちろん、ここでも靖子の名前は後日ということになった。なぜ秘密かは、金剛と提督のみが知っていた。続いては酒場。なぜこんなところに酒場



があるかは靖子もわからない。しかしそこへ行くと、隼鷹と那智、日向、そして郡津提督もそこにいた。

「あの、助けていただいてありがとうございます。」

「構わないぞ。遠慮することはない。私は重巡洋艦の那智だ。よろしく。」

「私は軽空母の隼鷹だよ。今夜一杯やるか？」

しかし、靖子は未成年なので飲めるはずがない。もちろん断った。

「冗談だよ、あはは」

「私は戦艦の日向だ、よろしく」

3人に挨拶した靖子は、白い上着の女性に気が付いた。

「あの、助けていただいて、ありがとうございます」

「いえいえ、私はここの提督、郡津よ。以後よろしくね。」

「提督？艦これでも提督ってのがありますか？」

「ああ、知ってるよ。あのゲームのことはね。」

靖子はまだこのとき、郡津提督が靖子を艦娘として正式に迎えようとしていることを、知る由（よし）もなかった。

## 靖子、艦娘デビュー!

最後に案内されたのは、プールのようなところだった。

「ここはね、練習コースになってるの。初めての人はここで練習するの」

「おもしろそうなどこだね。今度ラジコンボート浮かべてあそぶっかなあ。それと暑かったらここで水遊びしよっかなあ」

靖子は少々不真面目であった。しかし、吹雪は笑った。

「やっぱりおもしろい人だねあなた。お友達になれそう。」

靖子はちよつと照れ笑いした。そこへ天龍と龍田、神通が帰ってきた。

「お!元気になってよかったな。そういや自己紹介まだだったな。俺様は天龍ってんだ、よろしく」

「あ、よかった。もうお目覚めだったんですね。私は神通です。宜しくお願い致します。

お体のほうは?」

「もう大丈夫です。傷のほうはまだですが。」

「私は龍田です、よろしくね」

「あの、この度は助けていただいてありがとうございます。」

「おいおい、やめろよ。照れるじゃないか。」

3人はコンビニとディスカウトショップの帰りだった。一回りし終わった靖子は、吹雪に礼を言い、病室に帰っていった。夜の執務室、提督と明石、金剛が話し合っていた。

「どんな名前にしたんですか？」

「もう決まってたんだけど、あの子の前で話すのはちよつとあれだったから」

「もう艦装の設計図は完成してますよ」

「よし！あとはあの子との話し合いだけね。」

名前も決まったし、艦装の設計図も完成していた。あとは服装、靖子の承諾だけであつた。金剛は先日のイチゴティーの話を持ち出した。

「ハイ提督、イチゴティー、買ってくれましたか？」

「ええ、約束したもののね、はい！」

「サンキュー！」

「ついでにこれも！お詫びよ。」

金剛が包みを開けると……なんとイナゴの佃煮であつた！

「オーマイガット!!」

金剛は大きな声でそう叫んだ。

「・・・引つ張りますね」

明石は少々苦笑いだった。2日後、靖子の傷はすっかり治った。目覚めた靖子は、診断の結果、普通の食事が食べられるようになった。朝食をたべたかったが、どこでたべたらいいかわからなかった。そこへ吹雪と大淀が入ってきた。

「おはようございます。」

「おはようございます。」

「紹介するね、こちらは軽巡の大淀さん。」

「初めまして大淀です。」

靖子は、大淀に挨拶した。大淀がなぜここに来たかというのと、一緒に朝食を食べるためであった。もちろん、彼女も靖子同様、眼鏡をかけていた。そして、大淀といっしょにご飯をたべる靖子と大淀の姿が、食堂にあった。もちろん、朝食を食べていたほかの艦娘たちの注目の的だった。

「あの子ね。助けられた女の子は。ツインテールかあ、なんだか龍驤さんっぽい!」

「あたしもツインテールよ。」

「うちがどうかしたん?夕立、村雨。」

「なんでもない、あの子が助け出された女の子だって。ちようど大淀さんの隣にいるっぽい。」

「そうよ、あたしたちその子のことでお話ししてたのよ。」

「そうなんか、あの子が噂の女の子か。」

夕立と村雨と龍驤が靖子のことでお話していた。そして、靖子と大淀は朝食を食べ終えた。

「どう、おいしかった?」

「ええ、ごはんと味噌汁、そしてししやもにたくあんおいしかった。」

ちようどそこへ金剛が現れた。

「グツドモーニング!」

「おはよう金剛さん、おかげさまですっかりよくなりました。」

「それはよかったです!提督があなたにお話がありまーす。一緒に執務室に来てください。」

言われるままに靖子は寝巻のまま執務室に向かった。そして金剛と一緒に執務室に入った。パジャマのままは失礼ではないかと不安げだったが、郡津提督はそのままいいと許した。そして、靖子に艦娘にならないかと話した。

「え?あたしが艦娘に!?!」

「そうよ。報告書はよんだわ。あなたはあの戦艦ル級たちと善戦した。ならばあの艦装もつかえるかと思って。」

「・・・あれ、本物だったんですか?着ぐるみじゃなくて。」

「ええ、あのル級は本物よ。特撮じゃないわよ。あなたなら絶対戦えるとおもってるの。どう?このまま出て行っても戻るところないでしょ?断って、ここで身の回りの仕事してもいいのよ。間宮さんには私から言うておくし。」

靖子は迷った。今は通信機が壊れてる以上連絡が取れない、それに助けてもらった礼もしたい、考えた末、靖子は決断した。

「ご迷惑でなければお願ひします、やってみます!」

「艦娘になってもいいのね」

「はい!」

「ごめんなさいね、私のわがままなのに、話を聞いてくれて。」

郡津提督を涙を流しながらは靖子を抱きしめた。

「絶対あなたを死なせたりしないからね。」

「へい提督!そうと決まったら早速服のデザインきめましょう!」

早速、服のデザインの設計に入った。

「そうねえ、服は・・・、あ、こんな感じで!」

靖子はスケッチブックに、着る服のデザインを描いた。もちろん、色も塗った。そして、諸々の準備ができると・・・。

「へーい！霧島！この子とお買い物よ！着るもの用意してあげて！」  
「はい、お姉さま」

服、艤装、武器など作る所要時間は重巡洋艦波だという。もちろん妖精さんがつくつてくださるつてことで、その間靖子は霧島と一緒に、車でお買い物にいった。艦娘にも免許を持つてる人がいるんだなあと、靖子は思わずうなずいた。

「このブラとショーツ、あなたにはいいかもね。」  
「んもう霧島さんつたら。」

下着を選んだり

「これいいかな？お姉ちゃん！」

「あら猫ちゃん？かわいいわね。」

上着を選んだり

「このスカートと靴下、似合ってるわね」

「あ、ほんとだ！あたしかわいいー！」

スカートや靴下を選んだりとお買い物を楽しんだ。この世界へ来て初めて充実した1日を過ごした。靖子は霧島にお礼を言った。そして、鎮守府に帰ってくると、もう服と艤装、武器は完成していた。翌日の朝礼で公開するということで決まり、靖子は初雪に案内されて部屋に向かった。

「わたしは初雪、と申します、よろしくお願いします。」

「あ、よろしく」

「あなたのお部屋、ここ、です。」

部屋は1人部屋で、テレビ、ブルーレイデッキ、パソコン、エアコン、オーディオとかがあつて充実していた。靖子は初雪に礼を言い、部屋に入った。

「今日から新生活スタートか。けどあの初雪つて子、ツインテールにしたらかわいいかも。」

靖子はワクワクしていた。そして翌日、朝礼で提督が靖子を紹介した。

「今日から新しい艦娘さんがデビューします。名前は軽巡洋艦、島雪です!」

「天龍型3番艦、島雪です!よろしくお願いします。」

こうして、靖子の艦娘、軽巡洋艦・島雪としての生活がスタートした。



## 靖子（島雪）の初授業、初演習

朝礼が終わり、この日から靖子は軽巡洋艦・島雪として鎮守府で生活することになった。（ここからは靖子から島雪へ変更となります。）島雪は翌日から授業に出ることになった。

「よお！、天龍から聞いたんだが、お前島雪って名前だったんだな！」

「あ、あなたは？」

「俺は木曾（きそ）てんだ、よろしくな！」

彼女もまた、天龍と同じく眼帯をしている。そういえばあの2人の眼帯はファツションなのかと、島雪にはわからなかった。しかし、艦娘にも自分のことを「おれ」という人がいることを知った。さらに、時雨（しぐれ）、白露（しらつゆ）もやってきた。

「こんにちは、きみ島雪っていう名前だったんだね。ぼくは時雨、よろしく」

「あたし白露、よろしくね」

あの2人にも自分のことが噂になっていたようだ。しかし、自分のことをぼくという人もいることも知った。もしできたら、ゆうきやふきのにも紹介したいなあと島雪は考えた。そのとき、球磨（くま）がきた。

「あら？あなたは？」

「球磨っていうクマ、よろしくだクマ、島雪、提督がお呼びだクマ」

島雪は執務室にいった。そこで翌日の授業について説明を受けた。

「え？あたしが駆逐艦クラスに!？」

「そうなの、いきなり基礎もおそわずにいきなり出撃はどうかと思うの。だからあなたには、しばらく駆逐艦クラスで授業を受けてもらうわ。」

実は、島雪に駆逐艦のクラスで授業を受けてもらうのにはもう一つ理由があった。

「新型駆逐艦の開発なんだけど、あなたにも協力してもらうわ。名前は潮風よ。睦月型駆逐艦21番艦の。もちろん、21番つてのは重複を防ぐためよ。ただ、」

「潮風？ひよつとして、これ!？」

なんと島雪は島風のコスプレをした。

「それは島風よ。」

郡津提督は苦笑いした。

「いい、新しいタイプの駆逐艦、軽巡洋艦はほかにもあるの。できたらあなたのお友達にも協力してほしいの。それにどんな服装にするかは、あなたに任せるわ。できあがったら、明石さんに渡してね。」

「わかりました。」

「話は以上よ。ありがとう。」

「はっ」

島雪が島風の服装のまま部屋を出ようとすると、

「その前に着替えていきなさい。それにしてもよくその服用意できたわね。」

「はい、着替えます。パンツも普通のやつに履き替えます」

「あたりまえです。」

それを見ていた金剛と明石もクスクスと笑った。部屋に帰った島雪は、駆逐艦のときの衣装をあれこれ考えた。

「うーん、衣装どうしようかなあ。．．あ、一番コスしたい艦娘にしようつと！それをベースにしてつと。」

島雪は、完成した衣装のデザイン画を明石に手渡した。明石は快諾した。翌日、島雪は羽黒とともに時雨たちの教室に向かっていた。担任は重巡洋艦の羽黒だ。

「あなた、確か榛名たちに助けられたんですってね？名前は？」

「島雪つていいいます。」

「島雪さんね。いいわよ。でも珍しいわね。軽巡洋艦のあなたが駆逐艦のところで授業受けるなんて。」

「ええ、決定事項ですから。」

二人は会話がちよっぴり弾んでいた。教室では島雪のことで持ち切りだった。

「あの新入生、うちのクラスにくることが決まったってよ。」

「軽巡らしいよ。どんな子かなあ。」

「なんでもあの例の女の子なんですって。」

臯月と菊月と三日月が噂話をしていた。そこへ羽黒と島雪がきた。

「はい、授業を始めます。」

挨拶がおわると羽黒は島雪を紹介した。

「今日からこの鎮守府に新しいお友達が皆さんと一緒に授業を受けます。島雪さんです。」

「天龍型軽巡3番艦の島雪です。よろしくお願いします。」

そして島雪は若葉の後ろの席になった。手工や理論、礼法などの授業があり、島雪にとってはおちよつと未知の世界の授業つぼかった。とくに敬礼は、みんなは海軍式なのに、島雪だけは陸軍式だったので、すぐに直された。しかし、羽黒から内容をきかれると、若干わかったようなきがした。多少はついていけるような気がした。休憩時間、島雪はイラストを描いていた。そこへ秋雲がやってきた。

「あらあー、なかなかかわいいイラストじゃない。」

「あ、あなたは？」

「あたしは秋雲っていうの。よろしくね。」

「よろしくー!」

島雪は、この秋雲という女の子とお友達になれるような気がした。この日は演習の授業があった。しかし、島雪は羽黒から駆逐艦の服に着替えると言われた。着替えが終わり、羽黒に案内され、演習場にやってきた。島雪の駆逐艦のかっこうは、裾に白いラインが入った青い吊りスカート、ピンクのネクタイをしていた。それをみた三日月、菊月、皐月はなんかちよつとスカートが短すぎないかと感じた。しかも睦月型にしては服装が全然違っていた。それも、提督の判断である。さらに名札には潮風の文字が。

「潮風?」

島雪は、この時ばかりは駆逐艦潮風として演習を行うことになった。いよいよ演習開始、島雪（潮風）は長月、菊月、三日月、若葉と班、演習相手は秋雲、望月、黒潮、時雨、皐月となった。

「なお、今回の演習は提督と明石さん、比叡がきてます。よろしくね。」

島雪（潮風）は、なぜ金剛がないのか聞いてみた。

「金剛お姉さまは入渠（にゆうきよ）中です」

「にゆうきよ?どこのマンションに入居?」

「そのにゆうきよじゃないわよ。ドック入りかな。」

島雪（潮風）にとつては入渠という言葉は初耳である。もちろん、島雪（潮風）本人も最初はわからなかった。いよいよ演習開始！時雨は連装砲で攻撃、さらに秋雲もお返しにと連装砲を発射、白熱した演習になっていた。島雪（潮風）はぼーとみていた。

「すごい……。自衛隊のイベントなら展示訓練つてやつみたことあるけど、こつちもすごい。」

そのとき

「どうした島雪、もらつたぜ！」

望月の放つた砲弾が島雪に向けて放たれた。

「え？うわあ！」

島雪（潮風）は思わず連装砲を撃つた。望月の弾はそれ、島雪（潮風）の弾は望月に命中！望月は「中破」した。続いて時雨の攻撃で若葉も「中破」、島雪（潮風）も黒潮の攻撃でかすり傷はしたものの、まだまだと言わんばかりに奮戦、黒潮を「大破」させた。それを見ていた3人。

「すごいですね提督」

「あの黒潮は規格外の性能よ。最初から12.7cm連装砲を積んで、全自動で転ばないように体中を支えるシステム、自動姿勢制御システムが搭載されてるの。さらには12.7mm機銃、4連装魚雷も装備しているのよ。オプションとして、サブマシンガン、

刀剣、自動小銃の装備も可能よ」

「なんかよくばり装備ですね。」

「もちろん、私の好きな言葉は、規格外、破格よ！」

それを聞いて、比叡も

「私も規格外のをつくってみたい」

と言い出した。それを聞いた2人は後ずさりした。そのとき、秋雲と長月の一声で、

「一齐にこれできめるよ！」

「よっしゃー！これで決めるぜ！」

10人の一斉砲撃の音がした。雷撃戦である。この攻撃で時雨、三日月、長月は「小破」ついに島雪（潮風）と秋雲も「中破」した。島雪（潮風）は中破した秋雲をみて笑った。

「あはは、秋雲ちゃんパンツ丸出し！」

スカートが破けてパンツ丸出しの島雪（潮風）の姿を見て秋雲も言った。

「・・・その言葉あんたにお返しするわ」

「え？あつ！あたしもだ」

菊月たちも見て笑った。

「ほんとだ、島雪今日のパンツの色ピンクだ」

春日は照れ笑いし、そしてみんな大笑いしたが……。なんと、どういふことか、見ていた提督、明石、比叡は巻き添えを食らい「大破」していた。それに気づいた10人はなぜこうなったかわからなかった。実は、雷撃戦で偶然一発の魚雷が提督たちのほうに向かい、爆発したのだった。3人は手当をうけるためそのまま担架で運ばれた。

「これも……、規格外だったわ。」

「いや、予想外でしょ……。」

「お姉さま……。」

10人は、あとで謝ることにした。



## 島雪（靖子）、芳佳と再会

10人は、演習で爆発に巻き込み迷惑をかけてしまつて申し訳なかつた。病室へ行き、提督に謝つた。

「もう済んだことは仕方ないから。それに、演習用の魚雷食らつたからといって、心配しないで。あの演習用魚雷は艦娘用で人間にあたつても大丈夫なようにできてゐるから。本物はそうはいかないけどね。」

続いて、明石に謝りに行く前に、中破・大破した人は着替えるように言われ、着替えてから行くことにした。ドックに向かい、明石に謝りにいった。そこには金剛と比叡もいた。

「ごめんなさい。」

しかし

「もういいわよ。あれくらいは大丈夫だつて」

と許してくれた。もちろん、比叡も金剛も同じ気持ちだつた。だが島雪は、艦娘用といえど、誤つてすむことではないと感じていた。すべての授業がおわつたあと、もとの服に着替えた。自分の部屋に戻り塞ぎこんでいた。コンコン！誰かがノックした。

「あいてますよ。」

入ってきたのは陽炎（かげろう）だった。

「あなたは？」

「陽炎よ。よろしくね。って、元気ないね。なんかへマしたの？」

その問いに島雪はうなづいた。

「元気だして。失敗はだれにだってあるから。あ、提督があなたに来てほしいって」

島雪は何度か提督に呼び出されたことはあつたが、まさか重い罰があるのではと不安だった。覚悟するしかなかった。しかし、呼んだ理由はまったくちがっていた。

「え？あたしがウイチーズ基地に？」

「そう、そこに坂本少佐にごあいさつにいくから。あなたもいらつしやい」

島雪は演習のことでまだ気にしていた。

「もういいのよ。ああいうことはほかの鎮守府でもよくあることだから。まあ、死なない程度の威力だから。対艦娘用の演習用だし。元気だして！」

「はいー！」

「よろしく。」

出発は午前9時に決まった。ほかに吹雪、電、朧（おぼろ）、夕張、青葉が同行することになった。グラウンドで一人たたずむ島雪。なんかいったことあるようなないよう

な。戦艦ル級たちに襲われたシヨックからなのか、襲われたときの記憶はなかなか戻らなかった。ウィチーズ基地、かすかに聞き覚えがあるが、なかなか思い出せない。ならば行けばなんとかなるかもしれない。島雪は行くことにした。

「ウィッチーズ基地、なんか聞き覚えが……。ひよつとしたら坂本さんがいるところ？ 芳佳ちゃんたちもいるところなの？ いや、やっぱりとにかく行ってみないと。」

翌日、島雪は海上にいた。

「あの、お名前は？」

「私は青葉です。宜しくお願いします。」

ほかにもまだ挨拶していない艦娘も多く、島雪はいったいどれくらい名前を覚えられるか不安だった。提督はミサイル艇で同行していた。

「ねえ、島雪、見えてきたわよ！」

「あ……。なんか懐かしい気がする。」

少しは思い出して来てはいたがまだ完全には思いだせなかった。そして、基地に到着し、6人は坂本少佐たちがお出迎えだった。そして、挨拶をかわしたあと、食事会に移った。島雪は、豪華な食事に舌鼓をうっていた。

「ねえ、赤城さんも呼べばよかったね。」

しかし臆は

「赤城さんがきたらごちそう全部食べちゃうからだめだよ」

と反対した。鎮守府の間宮食堂では、赤城が大きなくしゃみをした。

「だれよ！わたしの噂してるのは！」

ウィッチーズ基地で島雪がデザートを食べっていると、そこへ芳佳が島雪のほうにやってきた。

「あなたは新人？どこかで見たことあると思うけど誰？」

「軽巡洋艦、天龍型3番艦の島雪です。よろしく。」

「あたしは宮藤芳佳（よしか）よ。よろしく。」

「あらあ、あなたが新人さんなの？なんか見覚えがあると思うけど？私はペリーヌ・クロステルマンですわ。以後お見知りおきを。」

「あ、はい。天龍型3番艦、島雪です。よろしくお願いたしますー！」

ペリーヌからも挨拶され、続いては坂本少佐からだった。

「私は坂本美緒（みお）少佐だ。よろしく」

「宜しくお願致します。」

そのとき、坂本少佐は悟った。

（ん？この声、どこかで聞いたような。ひよつとしたら靖子か？それになんて艦娘に？まさかこの世界に？）

島雪は少々不安になった。

「いかがなされました？」

「いや、何でもない」

それを見た島雪は少しづつ思い出した。

（ちよつと思ひ出した。みたことあると思つたらやつぱりここは知つてる場所、つまり鎮守府とここは一緒の世界だつたんだ。芳佳ちゃんやペリーヌさん、坂本さんもあたしのことを知っている。でもここで正体をしられるわけにはいかない。）

そこへエイラもやってきた。

「あ……」

「なんだい？」

「……い、いえ、失礼しました。私は天龍型3番艦、島雪です。よろしくお願いします。」  
「ああ、よろしく。私はエイラ・イルマタル・ユートイライネンだ。」

島雪は、エイラとも再会できた。しかし、今は自分が靖子であることを隠し通すしかなかった。今しられたら大変なことになるかもしれないと思っていた。一方、芳香もあれは島雪ではなく、靖子ではないかと薄々気づきはじめていた。そして、食事会も終わり、中を案内してもらえなくなった。まずはドックに案内された一行は、中を見学した。しかし、そのドックの天井ではルッキニーが相変わらず昼寝していた。下にいる

坂本少佐にみつきり、下におりて挨拶するよう命じた。

「おい！フランチェスカ少尉、下りて挨拶しろ！」

下に降りたルツキーニはみんなに挨拶した。

「フランチェスカ・ルツキーニです！よろしく」

「よろしくね」

しかし、ルツキーニは島雪が靖子に似ていると感じた。

「あなた、靖子？人違いだったらごめんね」

「いえ、私は軽巡洋艦、天龍型3番艦の島雪です」

「なあんだ。人違いか。」

坂本少佐はルツキーニにリビングに戻るよう言った。そして、ドック内を案内された後は指令室へと向かった。しばらく歩くとサーニヤとシャーリーにも会った。

「初めまして！軽巡の天龍型3番艦の島雪です。」

「ああ、あたしはシャーロット・E・イエーガーだ。よろしくな！」

「私はサーニヤ・V・リトヴァクよ。よろしく」

（間違いない、あの子たちだ。）

島雪はばれてないことにほっとしたが……。2人にはわかっていた。

「なあ、今の靖子じゃなかった？」

「・・・そうかも。何か隠さなきやいけない事情があったのかしら？」

そして、一通り見学も無事終わり、最後は記念撮影を済ませ、全員鎮守府への帰路についた。島雪は基地で再会した芳佳たちには会えたものの、自分が靖子であると打ち明けることはできなかつた。

(シャーリーさんやサーニヤちゃんまで。やつぱりここは思った通りの世界だつたんだ。)

その頃、ウィッチーズ基地では、芳香とりネットは、あれは以前エイラがタロット占いで言っていた久しぶりに会う人、つまり靖子ではないかと感じた。このあと、島雪が靖子であることがばれるのは時間の問題だつた。

## 島雪、初出撃、そして正体がばれる

鎮守府に戻った島雪は自分が靖子であることを隠し通すしかなかった。みんなに迷惑がかかるのを恐れていた。しかし、どこまでできるかはわからなかった。それが島雪にはつらかった。提督や金剛に相談することもできなかった。そのことは提督にもわかっていった。基地のメンバーや坂本少佐が彼女の正体に気づいていたのではないかと……。同行していた隴（おぼろ）たちも島雪の様子がおかしいと勘づき始めていた。翌日、島雪はついに初陣デビューの時が来た。島雪は初めての本格的な戦闘に緊張していた。カタパルトデッキでは、島雪が出撃の準備をしていた。腰には刀、拳銃、艀装には連装砲、足には4連発の魚雷が装備されていた。

「よっしや！張り切っていくぞ!!」

そこへ天龍や龍田もきた。

「島雪ちやあーん、がんばってね。」

「無理するなよ。」

そして、吹雪、綾波、長月（ながつき）も来た。天龍の一声で

「よおーし！抜錨（ばつびょう）だ！」



すると島雪は

「発表？」

と言った。

「ばつびようだよ、ばつびよう！間違えるな！」

しかし島雪はさらにふざけた。

「画鋏（がびよう）？」

「ば、つ、び、よ、う、だよ！」

そして、6人は海へ出港していった。その様子を提督たちは見ていた。

「へイ提督、大丈夫ですかあの子」

「大丈夫よ、あの島雪も規格外の強さ、装備だからね。」

「それもそうですが、いずれあの子のことばれます。」

「ええ、いざとなったら、みんなに本当のことを打ち明けないといけないわね。それに、

坂本少佐たちにも」

「提督……。じゃあ、この前提督が私から借りたお金は？」

「あ、わすれてた。千円だったわね。あした返すから」

そのころ、島雪たちは海上にいた。

「恐いか」

「いえ、いいえといえれば怖くなくなると思います」

そこへ龍田が来て

「油断しちゃだめよ、油断したら轟沈だからねえ。」

「轟沈・・・？死ぬってことですか？」

「そうなるわねえ。」

島雪はちよつと怖くなった。すると吹雪は

「脅かさないでくださいよ。提督からは大破したら帰ってこいという命令なんですか」

そう、郡津の担当する鎮守府では、大破したらかえってこいという決まりになっている。轟沈という最悪の事態を防ぐためだ。時々艦娘たちに休養をあたえたり、休日をおたえたり、時には厳しく、時には優しく、ここの艦娘たちにとっては母親以上の存在なのだ。郡津提督も、彼女たちを実の娘のようにかわいがっているのだ。一方、ウィツチーズ基地では、できあがった記念写真を見て、坂本少佐は島雪が靖子であることをつきとめたのだ。

「やっぱり島雪は靖子だったのか！」

「どうしますか？郡津提督に連絡しますか？」

しかし、すぐには迫及する気はなかった。彼女には彼女なりの理由があるのだろうと

思い、そつとすることにした。

「いや、折を見て、私から彼女に直接話そう。そう急ぐこともないだろう。誰だつて自分のことは話したくないことはある。今は不問にしておこう。みんなにもそう伝えてくれ。」

「わかりました。」

島雪のことは後日ということになった。鎮守府の海域付近、島雪はどんな敵に遭遇するのか予想はつかなかった。そのとき、天龍が全員にとまるように指示した。じつとしていると、水の音が……。やがてそれは駆逐口級のものであることがわかった。口級はすぐに襲いかかったが、天龍は龍田とともに接近戦で倒した。

「すごいですね先輩」

「これくらいは朝飯前よ。」

次の進路は羅針盤を回すことにした。羅針盤を回すと、軽巡洋艦のいる方角をさした。その方向には、軽巡へ級、駆逐艦3隻がまつていたのであった。ルートは羅針盤によつて決まるものだが、ここでも例外ではなさそうだ。そして、進路をボスの方へいくと、合計4隻の敵が待ち構えていた。

「よおーし、気を引き締めていくぞー！」

綾波と長月、吹雪は力を合わせて1隻目の駆逐艦を倒した。島雪も連装砲で2隻目の

駆逐艦に攻撃を加え、魚雷1発を発射して倒した。そして天龍や龍田も3隻目の駆逐艦を連装砲で倒した。郡津提督の鎮守府では、本来単装砲装備のところ、連装砲を装備しているのである。島雪は、軽巡で連装砲を装備しているのは自分だけじゃないんだと実感した。そのとき、長月が軽巡へ級に攻撃を加えた。

「くらえ！」

しかし、かすただけだった。長月は軽巡へ級の攻撃により中破してしまった。綾波も攻撃をくわえたが、やはりかすただけだった。

「そ、そんな。攻撃がきかないなんて。うわあ！」

綾波も軽巡へ級の攻撃により中破してしまった。島雪と吹雪はへ級の強さに戦慄した。とくに島雪はこの軽巡へ級との対戦は初めてであった。ゲームでは何度も戦ってはいるが、実際戦うとなると勝手がちがう。しかし、引き下がるわけにはいかない。吹雪は島雪の後ろに隠れた。島雪は刀を持って構えた。

「島雪さん……」

「じつとしてるのよ。吹雪ちゃん」

龍田は軽巡へ級に連装砲で攻撃を加えた。が、あたりはしたが小破だった。攻撃した龍田も小破した。

「龍田さん！」

「大丈夫よ。これくらい。」

無傷なのは島雪、吹雪、天龍の3人になった。島雪は、こんなとき、強力な武器があったら、みんなをたすけてあげられるのと思った。そのとき、突然、島雪の目の前で空間ディスプレイが現れた。妖精さんたちが、島雪に合わせて修復してくれていたのだ。

「な、なに？機械が直っていたの!?!」

それを見た天龍と吹雪は驚いた。

「し、島雪、これは一体!?!」

「私も初めて見るわ。」

ここうしちゃいられない、島雪はもしかしたら、いけると思い、何か武器はないかと調べてみた。

「えーと、4連装魚雷、連装砲、ハンドガン、刀、自動小銃にミサイルランチャー!?!ようし、いくしかないか。」

島雪は軽巡へ級に向かって攻撃を開始した。へ級も島雪に攻撃を開始した。へ級は単装砲を撃って攻撃するが、なかなか当たらない。

「やるわね、あの子」

「よし、おれたちもあいつをサポートするぞ、吹雪。」

「わたしたちも手伝うわ。私たちの仲間ですもの。」

龍田たちも手伝うことになった。へ級は攻撃を続けるも、なかなか当たらなかつた。そして、ついに弾切れを起こした。

「今だ！」

天龍たちが砲撃を開始、へ級は単装砲を破壊され、大破した。

「ようし！とどめだ！」

島雪は、持っていた刀で、軽巡へ級を撃破した。初めて深海棲艦を倒したのだ。しかし、それは、みんなの協力があってこそ、倒せたのだ。

「ありがとう、みんな、ありがとうございます……。」

「お礼と泣くのは、鎮守府に帰ってからだ。」

「ようし、帰るぞ。私たちは傷の手当てをしないとだめだからな。」

「うん！」

島雪たちは、鎮守府への帰路に就いた。その上空にサーニヤがいた。

「島雪、あなたはやはり靖子さん……なの？」

サーニヤは上空をパトロール中に偶然島雪たちを見かけたのだ。サーニヤも帰路に就いた。鎮守府では、島雪たちをみんなが出迎えていた。

「やったじゃん、島雪！」

「初めてにしては、やるわね！これからも頑張つてね！」

深雪と曙は島雪に言った。

「うん、あたし、頑張る！」

その様子を大淀と金剛と郡津提督が見ていた。

「あの子、やりましたね。はじめての出撃で深海棲艦を倒すなんて。」

「ええ、あの島雪は大成功ね。」

「これで、提督も鼻高々でーす！」

そこへ島雪がやってきた。

「取れ高？」

「no!鼻高々でーす！」

周りは大爆笑だった。島雪は、お風呂に入ったあと、自室から外を眺めていた。

「お姉ちゃん、必ず帰るからね、それまで待っててね。」

そう言うのと、「お姉ちゃん、おやすみなさい」と、ぐっすりと明日に備えて寝ることにした。

## 島雪、初めての遠征

鎮守府の海域から無事戻ってきた島雪たち。中破した艦娘はいたが、轟沈したものはなかった。島雪も小破はしたが、無事帰ってきた。

「はあー、無事帰ってこれた」

「お前の活躍があつてのことだ、風呂入って休むか」

「はいー」

それを見ていた提督と金剛は、初めてにしては上出来だった軽巡洋艦島雪の活躍に喜んでいた。執務室で提督は金剛に後日の島雪の遠征に同行することを命じた。

「へーい提督、私が島雪と一緒に？」

「そう、あの子、あのままじゃ心配だし、だから、あなたが同行して島雪の話を聞いてくれない？」

「わかりました。私もあの子のこと心配デース、同行します。」

「それと、もしあの子が元の世界に帰れなかったときのことだけど、あの子を養子にしようと思ってるの。艦娘とはいえ人間だし……。」

「わかりました。そのことも伝えておきます。」



「お願いね。」

そして、遠征のメンバーは神通、曙、子曰（ねのひ）、初春、島雪、金剛に決定した。出発は午後7時となった。自室で島雪は閉じこもっていた。学校のこと、友達のこと、姉や兄、親戚、両親のことで頭がいっぱいだった。このまま帰れなくなったらどうしようかと、そればかり考えていた。不安で、心配だった。結局就寝時間が過ぎてしまい、寝たのは午前1時を回っていた。そして、午前の授業が終わると、羽黒から、夜の遠征に行くように命じられた。遠征といっても、どれくらいかかるか、どのルートをいくかは知らされていなかった。しかもゆうべ、試してみたが、元の世界への通信はできなかった。空間ディスプレイ機能、データ照合などの機能はある程度備わってはいたが、さすがの妖精さんもそこまでは無理だったらしい。いくら島雪本人にあわせて作つてあるとはいえ、無理なところもあるようだ。連絡がとれたら、状況は少しでもかわるはず……。そして、すべての授業がおわり、島雪はドックに足を運んだ。ここでは妖精さんが艤装の修理をおこなっていた。その様子をみて島雪は、

涙を流しながら、

「ありがとう、見ず知らずのあたしのために艤装や武器、服をつくってくれて。」

と、お礼をいった。それを見ていた青葉は声をかけようとしたが、そんな気にはなれなかった。なぜなら島雪は、あまり元気がなかったし、泣いていたからだ。さすがに青

葉も、声をかけるのをあきらめたのだった。そして、晩御飯がおわり、5人は約束の時間に集まった。島雪も遅れることなく時間通りにきた。神通たちが出発しようとしたら、待ったがかかった。

「みなさーん、今日の遠征は、私も同行します。提督の命令ですー！」

「はい、わかっています。提督からも連絡がありましたし。みなさん、それでは、20分の遠征にまいりますよ。」

こうして、6人は遠征に向かった。一方、遠くのほうではふきのと妙子は駆逐イ級型と戦っていた。

「これはなんて化け物なんだ？」

「見たこともないわ。もうすでに1つは倒せたけど。」

この駆逐イ級型は未知の敵であったが、1隻は倒していた。そこへシグナムとヴィータも現れた。ヴィータのグラーフアイゼンで打った球、レヴァンティンの刀でもう一隻も沈められた。妙子は礼を言った。

「ありがとうございます。」

「かまわないさ。ん？どうしたヴィータ。」

「これは・・・。まさか、こんな世界に!?こんなものが?みんな、見てみるよ!」

「これは!?!リンディ提督に連絡だ!」

ふきのたちは、リンディ提督に連絡をした。まさか、艦これの世界であの物が発見されるとは……。彼女たちは予想外であった。

一方、鎮守府海域の小島にある出張所で島雪たちは休憩していた。この島は公園にもなっており、憩いの場にもなっているのだ。もちろん、主張所にはトイレだってあるし、いざとなれば飯の指令室にもなるのだ。自販機だってある、入れたりつくせりなのだ。みんなが休んでいるとき、島雪だけは夜空を見上げていた。

「……みんなどうしているかなあ」

そこへ金剛がやってきた。

「へーい島雪、どうしましたか？」

「あ、金剛さん。」

「心配なので私もきました。なにか悩み事でも？ためこんじゃいけませーん！ここではなんですから、遠征が終わってお風呂にはいったあと、私のお部屋へきてくださーい！お話聞いてあげます！」

島雪は、金剛さんが相談に乗ってくれるのでは？やっぱり話した方がいい！入浴の後、部屋へ行くことにした。そして、時間が来て、神通は集合を告げた。

「みんな、鎮守府へ帰りますよ！」

鎮守府へ戻る島雪たち。島雪の眺めた夜空はとてもきれいだった。鎮守府に戻った

島雪たちは、お風呂場へいった。気持ちいい入浴タイム。何度入ったけど、この世界のお風呂も悪くないと島雪は感じた。入浴後、島雪はワンピースタイプのパジャマを着て、金剛の部屋へ向かった。

「こんばんは。金剛さん」

「へーい！待ってました。島雪。今夜は金剛お姉さんが相談にのりまーす！」

島雪は、悩みを打ち明けることにした。このまま帰ることができなかつたらどうしたらいいのか、不安はいっぱいだった。金剛は、そんな島雪の不安にこういった。

「この鎮守府の子たちは、みんな姉妹、いえ、それ以上の絆で結ばれています。もしあなたが元の世界にかえれなかつたら、提督はあなたを養子として迎えると言っていました。」

「本当に？」

「そうです。だから安心してくださーい！」

「あ、ありがとうございます。」

島雪は、提督が養子に向かえてくれることには異論はなかったが、この世界で生きていくのにはまだ不安があつたし、複雑な気持ちはぬぐえなかつた。

「大丈夫でーす！わたしたちもいまーす！もうあなたも私たちの仲間デース！これからもよろしくお願いまーす！悩み事とかあつたらいつでも相談にいらしてくださいーい

！」

「・・・ありがとう、金剛さ、いえ、お姉ちゃん。」

「んもう、お姉ちゃんだなんて、恥ずかしいです！」

金剛は、島雪からお姉ちゃんと呼ばれ、照れていた。しかし、島雪が元の世界では姉と仲良しだということがわかった。この夜ばかりは、姉として接することにした。そして、夜11時くらいをすぎたころには2人はもう寝ていた。その様子を見ていた榛名、霧島、比叡は、

「まるで本当の姉妹ね。」

「2人とも寝顔がかわいい。」

「私たちも3人で仲良く寝ようか。姉妹だし。」

榛名は、島雪が寝相が悪くなっていることにきがついた。

「まあ、島雪ったらパンツ丸出しになってる。」

榛名は、島雪を起こさないようにパジャマの乱れをなおし、ふとんをかけなおして部屋を後にした。そして、比叡のお部屋では

「比叡おねえちゃん」

「んもう榛名ったら。」

「お、ね、え、さ、ま」

「霧島まで。まあいいわ。たっぷりあまえなさい。  
その夜は比叡たちも姉妹なかよく一緒に寝た。」

## 島雪、お友達と再会、鎮守府を去る

翌朝、金剛と島雪は朝7時半になってもまだ寝ていた。そこへ比叡が起こしにきた。「お姉さま、島雪、起きてください！もう朝ご飯ですよ！真つ昼間までねるおつもりですか！それに島雪も、遅刻しますよ！」

比叡の大きな声で起こされた島雪と金剛は着替えて食堂へ向かった。島雪は以前姉と一緒に寝た感じが似ていて、まだ金剛と一緒に寝たことが脳裏に離れなかった。提督にはお礼を言いたいと思った。ウィチーズ基地では、坂本少佐が鎮守府に向かう準備をしていた。

「これから鎮守府に行ってくる。あの島雪のことだな。」

「やっぱりあの子は靖子ちゃんだったのですね。」

「ああ、だから行くのだ。飛行機の用意はできてるな。」

「はい！」

そして、坂本少佐は飛行機で鎮守府に向かつていった。鎮守府では、島雪が授業を受けていた。一部の人の周りの目が気になっていた。もしばれたらなんて言ったらいいのか、悩んでいたが、今悩んでも仕方がないと、今は授業に集中していた。靖子の家

では、まだ靖子が帰ってないことを心配した姉は、すでに警察には搜索願もでていた。心当たりを電話したが、どこにもいない。万が一のことがあつたら大阪に住んでいる靖子の両親や妹になんて詫びたらいいのか頭がいっぱいだった。一方、靖子を探しにいつていたまどかたちは、その日も艦これの世界にいた。しばらく飛行していたら、ゆうきがウイチーズ基地を見つけた。

「ねえ、以前いつたことがある芳佳ちゃんところがあるよ。ここへ寄つて聞いてみようか？」

「わかった。連絡いれてみる。」

妙子はウイチーズ基地に連絡を入れ、着陸許可をもらつて基地を訪れた。妙子たちはリビングに通された。そして、芳佳たちに靖子は来なかつたか聞いてみた。

「ええ、来たわよ。しかも提督さんたちと。しかも島雪つて名前です。」

なんと、基地に靖子がきていたことが判明した。

「よかつた、ここにいたんだ。とにかく見つかつてよかつた。」

「芳佳ちゃん、その靖子ちゃんどこに？」

妙子たちは靖子がどこにいるか芳佳に聞き、靖子が鎮守府にすることも判明した。ふきのはリンディ提督に連絡をいれることにした。そして、芳佳の案内で妙子たちは鎮守府に向かうことにした。鎮守府の教室では島雪が授業をうけていた。すると金剛の



声で放送が……。

「へーい！島雪さん、島雪さん、応接室へきてください。お客様がおまちです。」

呼び出された島雪は応接室へ行くことにした。なんとそこには坂本少佐がいた。

「ひさしぶりだな、靖子。安心しろ、ここはお前と私だけの2人だけだ。」

「さ、坂本さん……。」

思わぬ来客に、島雪は驚きを隠せなかった。坂本少佐は、なぜ靖子がこの世界にいるのか、そして、なぜ島雪として艦娘になったのか、いろいろ聞いた。島雪は終始黙っていた。

「心配するな、私はお前が異世界の人間だからって差別するつもりはない。」

「……はい。あたし、空を飛んでたら、いつの間にかこの世界に飛ばされたんです。」

「飛ばされた!?この世界にか!?!」

「ええ、そして、空を飛んでたら、両手に大砲をもったお姉さんたちが襲ってきたんです。」

「両手に大砲?」

「ええ、これがその写真です。」

島雪は写真を坂本少佐に見せた。

「これは……、戦艦ル級じゃないか?」

「何ですか？それは。」

そう、坂本少佐は深海棲艦のことを郡津提督から聞いていたのだった。初めて聞く敵の名前に、島雪には皆目わからなかった。坂本少佐はさらに深海棲艦について聞いた。

「ほかにはどんなやつがいた？」

「これもいてました。」

島雪は軽母又級の写真も見せた。

「これは軽母又級だな。飛行機を飛ばすやつだ。」

「軽母？」

「軽空母のことだ。これもいてたのか。」

「あたしその、又級とかいうの、ラジコン飛行機飛ばしてるのかなあって、思いました……。」

「お前はそういうの好きだな。相変わらず。艦娘になっても変わらん。」

坂本少佐は少々あきれ顔だった。

「あとは、これもいてました。」

「これは軽巡へ級に駆逐口級だな。」

「それも深海棲艦ですか？」

「もちろんだ。ちゃんと郡津提督からは話は聞いているし、データもある。」

島雪は少々驚いた。ウィッチーズ基地にもその情報が届いていたとは知らなかったのである。

「あと、あのネウロイとかのことも？」

「それはまだこの鎮守府には伝えていない。頼むからゆつくり写真を見せてくれ」

質問攻めされた坂本少佐は少々迷惑そうだった。一方、妙子たちは芳佳に佐伯湾泊地にある鎮守府に案内された。

「ここだよ。あの子がいてる場所は。」

「ありがとう。リンディ提督に連絡しなきゃ。」

妙子はリンディ提督に回線を開いた。そのときリンディ提督は羊かんを食べようとしていた。

「リンディ提督！」

リンディ提督は大きな口をあけたままだった。

「あ、あら、どうしたの？」

「靖子ちゃんみつかつたよ！場所は艦これの……。」

「知ってるわよ。シグナムから連絡は受けてるわよ。詳しいことはあとで言うけど。あの子その世界にいてたのね。」

「そうです。私たちはそこに向かいます。あの、それとですね。」

「わかったわ。なのはちゃんたちにも連絡入れるから。待つててね。」

リンディ提督はなのはたちも呼んで、靖子を迎えに行くことにした。一方、鎮守府では、島雪と坂本少佐との会話が續いていた。

「お前が正体を隠さないといけないわけがわかった。だが、別に隠す必要はなかったのに。」

「ごめんなさい。」

「もういい、顔を上げろ。お前が無事で本当によかった。で、これからどうするんだ？」

「ここで、お世話になります。もう決めましたから。覚悟もできてますし。」

通信室では、戦艦アースラからの通信を受信した。大淀が対応した。

「はい、どなたですか？」

「私はリンディ・ハラオウン提督、時空管理局のものです。」

「時空管理局？で、どういったご用件ですか？」

「できたら提督さんに代わってもらいますか？」

「わかりました、お呼びします。」

大淀は、郡津提督と代わった。リンディ提督は、これまでの経緯と、靖子を引き取りに来たことを告げた。そして、すぐに来ることになった。郡津提督はさつそく、応接間に向かった。

「島雪、よかったわね。お友達が迎えに来てくれたわ。」

「え!? 本当なの?」

「よかったわね、これで元の世界に帰れるわよ。お友達と、リンデイさんに感謝しなくちゃね。」

「はい!」

靖子は嬉しかった。これで友達と再会できるのだから。そして、郡津提督は別れの挨拶のためにみんなを呼んだ。島雪は、これまでなぜ正体を言えなかったのか話した。

「みなさん、ごめんなさい。あたしは、靖子といます。違う世界からこの世界にきました。最初はもうしたらいいかわからなかったので本当の名前をいえませんでした。」

「え? あの子人間だったの?」

「ウィッチーズ基地の皆さんにも迷惑かけたくなくて、本当のことを言えませんでした。でも、皆さんに助けてもらった恩は忘れません。仲良くしてくれてありがとうごさいます。私は元の世界に帰ります。姉とか両親とかこれ以上心配かけたくないのです。本当に今までありがとうごさいます。」

島雪は泣きながら話した。

「そんなこと言うなよ島雪! 俺は楽しかったぞ!」

「そうよ、あなたの絵、かわいかったわよ。また新しいイラスト見せてよ。」

「もしできたならまたこの鎮守府に戻ってきてよ！できたなら3日に一度、ひと月に1度でもいいから。」

みんな島雪が戻ってくることを待っている。しかし、島雪は学校もあるし、両親もある。一度戻らないといけない。

「ありがとう、もしできたら、またみんなに会いに行くから。」

「約束だよ！」

島雪は、友達とリンディ提督に連れられて、アースラに乗り込み、元の世界に向かって帰って行った。姉が住んでる初音市、ようやく自宅に帰ってきた靖子（島雪）は、姉の知恵美とメイドのまりかたちと再会を果たした。

「靖子！どこ行ってたの？みんな心配したんだから。」

「ごめんなさい、お姉ちゃん。」

島雪から戻った靖子は、再会を喜んだ。そして翌日、城戸市にある学校に久しぶりの登校を果たした。クラスメートも担任の先生、校長先生も喜んだ。久しぶりの街の空、都会の景色。何もかもが久しぶりだった。1か月も、4週間もたつてはいないかもしれない。しかし、靖子にとっては久しぶりだった。一か月後、鎮守府の教室では、新しく来た駆逐艦弥生の紹介が行われていた。

「弥生と申します、よろしく。」

そして、放課後、電（いなずま）、雷、暁、響、そして秋雲がボール遊びをしていた。  
「ちよつと秋雲！早いわよ！」

「こつちこつち！あ！ボール!!」

「やったあ、雷とつたわ！」

しかし、雷は誰かとぶつかつた。

「いたあい、誰よ！もう。あ！あなたたちは？」

「ウソ？」

なんと、靖子達が鎮守府に戻ってきたのだ。親戚のおじいさんが大富豪で、政界、財界などの各方面に顔がきくのだ。その人の計らいで、再び鎮守府に來れたのだ。

「嘘じゃないよ。しばらくここに厄介になることになつたよ。まあ、定期的に元の世界に戻らないといけないけどね。」

「靖子お！会いたかつたよお！」

暁たちと秋雲は、靖子達との再会に涙を流した。

## みんなと再会、ゆうきたちも艦娘デビュー!

鎮守府にきた6人。それぞれが鎮守府は初めてである。早速全員応接室へ呼び出された。郡津提督と金剛は彼女たちを大歓迎した。そして、鎮守府あげての歓迎会を催すことも決定した。島雪は、天龍たちはいい提督をもったなあと思った。そして、郡津提督はあの話の切り出した。

「艦娘?」

「そうよ!あなたたちも艦娘にならない?それがあなたたちをよんだ理由よ。」

5人はキツネにつままれたような感じだった。まどかは尋ねた。

「なんでまた?」

「私から説明するわ。」

なんと、この鎮守府にリンディ提督が来ていた。すべて提督に話は通していたのだ。倒した駆逐イ級と似ていたものの調査結果について結果がでていたのだった。

「あの生き物みたいなものに、ジュエルシードがあつたの。」

「ジュエルシード?もしかや・・・」

「そうよ靖子さん、ロストログアよ。そこで、この郡津提督と話し合つて、あなたたちに



艦娘として戦ってもらおうと思って。」

「ええ、もう設計図はできてるわよ！あとは服装ね！」

「・・・ふーちゃん、ぼくやるよ！靖子ちゃんを助けてくれたこの人たちに恩返ししたい。」

「あたしも！艦これの世界を体験するのもいいかも」

「わたしもやるよ」

「よし、みんなそういうなら俺も！」

「やらないわけにはいかないわね、いいわ。」

「ありがとう、みんな。」

郡津提督はうれしかった。5人全員が引き受けてくれたからだ。そこへ明石が現れた。設計図とスケッチブック、筆記用具をもって。

「さあ、好きな服装を決めてね。」

5人はよっしゃと言わんばかりに服装を描いた。そして、全員が軽巡洋艦として、艦娘デビューとなった。

「どうだ！俺のは。」

ふきのは球磨型6番艦木津としてデビューした。セーラー服で帽子付きだ。

「どう？おしゃれでしょ」

まどかは夕張型2番艦薄野(すすきの)としてデビューした。こちらもセーラー服だ。「ぼくだって、お似合いでしょ?」

ゆうきは長良型7番艦鈴鹿としてデビュー。基本的な服のつくりは阿武隈と同じだ。「うわあー、かわいい。」

ひみかは川内型5番艦笛吹(ふえふき)としてデビュー。こちらは川内と基本的な服のつくりはかわらない。

「これ、すてきじゃん!」

妙子は阿賀野型5番艦奈半利(なはり)としてデビューした。ただ、服は異なるようだが。この鎮守府には阿賀野型はまだないからだ。みんなそれぞれ、仕様とかは異なるが、郡津提督いわく、特別仕様だという。一気に艦娘が5人も増えたとあって、さらに戦力が増強されたことになる。リンデイ提督の説明には続きがあった。

「みんな、何かあったら、私に連絡してね。場合によっては、なのはさんたちにも協力してもらおうし、時空管理局にも協力を仰ぐから。わかったわね。あと、ウィッチーズ基地の坂本少佐からも連絡があつて、必要なら協力するつて連絡があつたわ。」

島雪は、なのはがいないことが気になって質問をした。

「なのはちゃんは?この世界に来ないの?」

「場合によっては来てもらうことになると思うわ。もちろん、できたらみんなと楽しく

やれるかもよ。でも、原則お仕事であることを自覚するように！いいわね。」

5人ははいとはつきり返事した。

「はい！」

そして、そこへ間宮さんがやってきた。この日のためになんとパーティーの準備をしていたのだ。

「そうと決まったら、パーティーよね！リンディさんもどうぞ！」

「ごめんなさい、今日はまだ仕事が残ってるし。じゃあみんな、わからないことがあったら、連絡いれてね。」

リンディ提督は、帰って行った。残念そうな顔をした島雪たちであった。そして、間宮食堂では、盛大なパーティーが行われていた。ゆうき（以降は鈴鹿表記）は長月に挨拶していた。

「ぼく鈴鹿、よろしくね！」

それを聞いて、時雨がよってきた。

「へえー、きみも自分のことぼくっていうのか。ぼくは時雨、よろしくね。なんかぼくたち、気が合いそうだね。」

2人はすぐに仲良くなった。ふきの（以降は木津表記）は加古と挨拶していた。

「おれは木津っていうんだ、よろしくな。」

そこへ天龍がやってきた。

「なんだ、お前か、島雪が以前言っていた友達っていうのは。俺は天龍だ、よろしくな。」  
「へえー、俺以外にもじぶんのこと俺っていう子はいたのか。」

木津と鈴鹿は、ここにも自分と似たような艦娘がいることを知った。それは島雪とて同じだった。

「なあ、荒潮から聞いたんやけどあんた大阪弁つかうんやて?」

「え? まあ、関西出身やけど? あなたは?」

「うちは黒潮や。よろしくな。」

「あたし島雪言うねんよろしく!!」

「うち軽空母の龍驤(りゅうじょう)言うねん、よろしくね。」

島雪もハイテンションノリノリだった。ひみか(以降は笛吹表記)も似たような服を着ている那珂とすぐに仲良くなった。まどか(以降は薄野)は夕張と、妙子(以降は奈半利)は如月(きさらぎ)と仲良くなった。そこへ隼鷹もきた。

「なあなあ、せっかく6人そろったんだし、あたしと一杯のもうか?」

そこへ日向が止めに入った。

「何を言っている、この子たちは未成年だぞ! 酒をすすめるな!」

「冗談だよ冗談!」

隼鷹は那智のところへ行った。楽しいパーティーが終わり、5人はそれぞれ自室に案内された。木津は多摩に自分の部屋を案内された。

「ここが木津のお部屋にや。」

「サンキュー、なかなかいい部屋だな。」

薄野は綾波の案内で部屋に入った。

「ここがあなたが今日から使うお部屋よ。」

「家電が充実してるわね。」

鈴鹿は曙に案内されて部屋に向かっていった。

「はい、ここがあなたのお部屋。」

「ありがとう。」

「でもあなた皐月と時雨、最上と同じ自分のことぼくっていうのね。」

「うん、まあね。」

笛吹は龍田に案内されて使う部屋にはいった。

「はい、あなたのお部屋はここよ。すてきなお部屋よ。お暇だったらいつでも私に会いにきてね。」

「あ、はい、ありがとうございます。」

奈半利は筑摩の案内により部屋をおしえてもらった。

「教えてくださってありがとうございます。」

「これくらいいいのよ、明日は朝礼でみんなとごあいさつよ。緊張してる？」

「あ、はあ。」

「きにするこたないのよ。リラックスしてね。」

そう、5人は緊張していた。あすの朝礼でみんなとごあいさつしなければならぬからだ。そして翌日。

「みなさん知ってると思います、今日から皆様と一緒に戦うことになった艦娘さんたちをご紹介します」。

5人は緊張気味だったが、前にいる全員に挨拶をした。こうして、5人の艦娘としての生活がはじまったのである。

## 艦娘島雪の鎮守府

こんにちは！あたし島雪だよ！島風じゃないからね！間違えないでよ。今回は、あたしのお話するけんね！あれ？違う方言になっちゃった……。あたしは、本当の名前は靖子だよ。この世界に迷い込み、戦艦ル級にやられそうなところを榛名さんたちにたすけられたの。そしてここで春日として艦娘デビューしたってわけや。んで、この子たちと仲良しになったってわけ。ようやく元の世界に戻れてうれしかった。けどみんなと別れるのは淋しかった。でも行かなきゃいけなかった。あたしには帰るところもあつたから。そして、各方面で顔がともきくおじいちゃんのとりにしで、しばらくここにいることになったの。

島風「呼んだ!?!」

〔中庭〕

那智「今日の遠征は、那珂、島雪、秋雲、時雨、黒潮にいつてもらおう。なお、

島雪は 駆逐艦潮風としていく。すぐに着替えるように。」

島雪「遠征ならまかせといてください！」

那智「お！やる気満々だな。」

島雪「はい、同人誌即売会で名古屋や静岡に足を運んだことありますから。」

秋雲「お！いいねえ、今度一緒にいかない？コミケ」

島雪「おう！いこうぜ、皐月ちゃんも誘ってね。」

秋雲ちゃんは、イラストが好きで、あたしもイラストを描くのが好き。それがこうじて、仲良くなったの。

那珂「那珂ちゃんも誘ってね。コスプレ大好きよ！どんなコスしようかなあ」

時雨「面白そう、ぼくも行きたい」

島雪「いいわよ、大歓迎よ。あたしは金剛さんのコスしたいなあ。」

時雨「やったあ！」

那智「貴様ら！その遠征ではない!!真面目にやれ!!」

島雪・秋雲・那珂・時雨「ごめんなさい・・・」

那智さんはあたしを助けてくれた人。本当はいい人なの。怒ると怖いけど。

〔海上〕

黒潮「なあ、那珂、もうすぐ休憩やね。」

那珂「はい、あの島で休憩しましょうね」

3人「はい」

〔休憩所〕



黒潮「なあ島雪、5人も来て、鎮守府は賑やかになったなあ。うちも楽しいわ」

島雪（潮風）「うん、あと6人くらいかな。お友達いるの。」

黒潮「ええことやん、お友達ぎょうさんおることは。楽しいやん」

黒潮ちゃんはおたしと同じ大阪弁を使うの。同じ大阪弁を使うということ、仲良しになつちやつた。ほかに、龍驤さんとも仲良しになつたの。そのほかにもお友達になつた艦娘さんはいっぱいいるの。

〔海上〕

那珂「さあ、もうすぐ鎮守府よ。がんばろうね」

5人「はいー！」

島雪（潮風）「あ、通信だ。誰からだろ？」

神通「あ、島雪、遠征から帰ってきて申し訳ないけど、すぐ榛名と行って

くれない。もう提督には連絡してあるから。」

神通さんは、あたしの助けを求める声を聞きつけ、助けにきてくれた人なの。もちろん、天龍さん、榛名さん、隼鷹さんも命の恩人なの。あたしは恩返しがのために艦娘になつたの。

島雪（潮風）「いいよ。装備はこのままでいいよね。」

神通「いいわよ！ごめんね。」

〔鎮守府〕

榛名「ごめんね島雪、着いた早々申し訳ないけど緊急出動よ！」

島雪（潮風）「いいわよ！駆逐艦潮風、いきますー！」

あたしはこれまで前例がない駆逐艦潮風としても戦ってるの。まあ、通常は軽巡洋艦の春日なんだけどね。ここじや島雪で通ってるの。ややこしくなるからね。ちなみに榛名さんは秘書の金剛さんの妹さんなの。んで、この潮風は、皐月ちゃんや長月ちゃんたちと同じ服装なんだけど、わけが違うの。ナイトスコープ、レーザーポインター、おまけにステルス機能、自動姿勢制御システムまでついてるの。まさに規格外！あ、艦装をつけたらサイボーグ形態になるけどね。ほかの艦娘さんたちはどうかはわからないけど。

皐月「欲張りすぎるなよ……。」

〔南西諸島沖〕

島雪（黒潮）「どりやあああああ！」

ドゴーンドゴーンドゴーン（連装砲の音）

ドカーン！（駆逐イ級轟沈）

あたしの12.7ミリ連装砲は標準装備で、腰には刀剣、拳銃、サブマシンガン、自動小銃もつけれるの。魚雷は足にとりつけてるの。しかも誘導弾タイプよ！おまけに

連装砲は連射も可能なようにしてあるの。しかも単装機銃つきだよ。

天龍「いくぞ島雪！」

島雪（潮風）「おう！」

バシユ！（2人の刀が駆逐イ級を撃沈させる）

最近では動きがよくなってだんだん使いこなせるようになってきたの。

皐月「すごいなあ・・・」

榛名「もしあの子戦艦になっても刀とつかつかえるのかな？」

陽炎「それはやってみないとわからないと思うよ。」

長月「いえてるなあ。それ。」

この日は夜になってもあたしの出番は終わらなかった。隼鷹さん、神通さん、陸奥さん、叢雲さん、利根さん、そしてあたしが南西沖に向かった。このときは島雪として出動。目的別に駆逐艦と軽巡洋艦をつかいわけてるの。も・ち・ろ・ん！

〔夜・南西沖諸島〕

島雪「そりゃ！」

ドゴーン！（弾を切り払い）

この天龍型軽巡洋艦3番艦島雪は、潮風同様、刀剣、ライフル、サブマシンガンも装備できるんだよ！20・3センチメートル連装砲や連装機銃を最初から装備、そして最

近特別な改装で頭部バルカンも装備してもらったんだよ。

隼鷹「いまだよ！島雪」

島雪「ターゲットロック！発射！」

ズドーン、ドカーン（重巡り級撃沈）

叢雲「さすがは島雪ね。」

利根「吾輩もおぬしの進歩におどろいておるぞ」

隼鷹さんは軽空母、叢雲さんは駆逐艦だけど、榛名さんと同じあたしの命の恩人なの。

利根「おい！吾輩も忘れてはこまるぞ」

陸奥「あらあら、私もよ。」

島雪「あ、ごめんなさい」

ちなみに、重巡洋艦の利根さん、戦艦の陸奥さんと日向さん、駆逐艦の皐月ちゃん、吹雪ちゃんも、あたしをたすけてくれた人だよ。

〔鎮守府・食堂〕

陸奥「みんなお疲れ様、ご飯たべたら、お風呂入って寝るのよ。」

5人「はい」

島雪「今日はカレーか。コロッケもつけてもらったし。いただきまーす。」

島海「お疲れ様！島雪。」

望月「やあ、島雪。」

島雪「あ、鳥海さん。それに望月ちゃんも。」

鳥海「よかったら明日霧島と一緒に買い物いかなかった？あなたががんばったし。」

そのごほうびだよ」

島雪「はい、喜んで」

この人は重巡洋艦の鳥海さん。あたしと同じメガネをかけてるの。もちろん、霧島さんもめがねかけてるけどね。町会長さんじゃないよ。もう一人はお友達の望月ちゃん。

鳥海「読み方は同じでも使う漢字が違うからね。まあ、似たような言葉もあるけど。」

〔翌日〕

霧島「さあ、行きましょうか。」

3人（島雪・鳥海・望月）「はい。」

鈴鹿「島雪ちゃん。」

春日「ゆう・・・鈴鹿ちゃん、鈴鹿ちゃんもおでかけ？」

鈴鹿「うん、最上さんとね。お買い物だよ。島雪ちゃんも？」

島雪「うん、お買い物だよ。」

鈴鹿「気を付けて行ってきてね。」

島雪「ありがとう」

霧島「よっしや！ウインカーよし、バッテリーよし、メーターよし、出発進行。」  
この人は金剛型戦艦の霧島さん。いっしょにお買い物にいつてくれた人なの。この人もメガネをかけてます。

島雪「次回は鈴鹿ちゃん（ゆうきちゃん）が、お送りします！おたのしみに！！」

## 艦娘鈴鹿（ゆうき）の鎮守府

こんにちは！ぼく鈴鹿。皐月ちゃんや時雨ちゃんと同じボクっ娘です！今回はぼくのお話です。ぼくも艦これ大好きでプレイしてます。靖子（島雪）ちゃんのおかげでこっちの世界でしばらく暮らすことになりました。今僕は最上さんとお買い物でシヨップングモールにきてます。いま、ブラとシヨーツのセットを選んでます。

「下着売り場」

鈴鹿「ぼくこの下着にしよつと」

時雨「鈴鹿ちゃんピンクもはくのか？」

鈴鹿「うん、時雨ちゃんは？」

時雨「ぼくはこれだよ。」

鈴鹿「ミントグリーンか。あ、皐月ちゃん。」

皐月「ぼくはこのオレンジにしたよ。」

駆逐艦の皐月ちゃんと時雨ちゃんは会った時にすぐお友達になったんだ。そして：：最上「みんな、決まった？ぼくはこれ！」

この人は重巡洋艦の最上さん。この人もお友達です。

鈴鹿「あ、最上さんは水色だ！」

最上「声がおおきいよ。」

鈴鹿「初めて見た。最上さんもスカートはくんだ」

最上「今日はジャンパースカートだよ。そりゃ、ぼくだって女の子だよ。」

そんなボクだけど、艦娘として戦うときは長良型軽巡洋艦鈴鹿として戦うんだ。

「鎮守府海域」

鈴鹿「くらえ!!」ズドーン！（連装砲）

ドカーン

ボクの武装は最初から連射に対応できる連装砲、機銃が装備されてるし、4連発の魚雷もある。そして、長良型と違うのは刀剣類、拳銃、マシンガンの装備・使用ができることなんだ。さらに、今度の改装で頭部バルカンも標準装備！

阿武隈「すごい、鈴鹿。天龍みたい！」

この子は阿武隈ちゃん。着ている服が似ているし、時々遠征にいたりしている。今じゃすつかり仲良しさん。

祥鳳（しようほう）「いきます！」（矢が飛行機に）

鈴鹿「すごいなあ、手品なの？」

祥鳳「手品じゃないわよ。」



名取「こら！鈴鹿、邪魔しないの！」

この人は名取さん。お友達。同じ長良型だけど、服装がちがうんだよ。でもこの世界にはプロペラの戦闘機はあるのに、なぜかジェット戦闘機や戦闘ヘリはないんだ。なぜかな？

鈴鹿「いつも思うんだけど、それってライフル？機関銃？」

名取「どつちでもないよ。」

まあ、この艦これの世界に来てからは初めて見るもの、聞くもの盛りだくさん！

あ、そうそう、ぼくだって駆逐艦仕様もあるんだよ！吹雪型11番艦紀美野としてね！

もちろん、11番は重複を避けるためにつけられたのさ。連射対応の連装砲、4連発魚雷、機銃、さいきんの改装で取り付けた頭部バルカンを標準装備としたタイプで、もちろん刀剣類、その他の銃器の使用も可能なんだよ。もちろん吹雪ちゃんたちと服装がちよつとちがうけどね。

「鎮守府射撃場」

鈴鹿「どりゃー！」ズドーンズドーンズドーン！（連装砲）

深雪「へえー、やるじゃん。あたしたちと装備全然ちがうけどね。」

初雪「・・・ほんとだ、なかなかやる。」

吹雪「すごい、提督こんなのまで開発してたんだ。」

白雪「かっこいい！」

この4人もボクのお友達。授業をうけるときの子たちのクラスになったんだ。

深雪「でもあんた、男の子のままだったらモテてたかもね。」

鈴鹿「時々そう言われるけどね。」

そう、ぼくはもともと男の子だったけど、わけあって女の子としてくらしてるわけ。ちやんとその訳を話したら、提督さんが理解してくれて、本当にうれしい。

五十鈴「これから警備任務に向かいます！所要時間は20分、途中休憩にはいりません。絶対に離れないように！暗いので、灯りも絶対忘れないように。それと、鈴鹿は駆逐艦として同行してもらいます。」

3人「はい！」

〔海上〕

鈴鹿「今日の夜空は星がきれいだなあー。」

時雨「ほんとだね、今日はいいお天気だね。」

皐月「こんな日は、ゆつくりラムネのみたいなあ」

五十鈴「みんな、もうすぐ休憩よ。」

〔休憩所〕

鈴鹿「ねえ時雨ちゃん、もしぼくが男の子のままだったたらどんなふうになってたんだろう？」

時雨「さあ、わからないな。きみが男の子のままだったらなんて、想像もつかないよ。」

臯月「じゃあ、僕たちが男の子だったたら、きつと野球したり、サッカーしたりと、男の子の遊び、やってたのかな？」

鈴鹿「おそらくね。ただ、女の子もサッカーするし、野球をしたりするからね最近は。」

時雨「ねえ！帰ったらお風呂直行しよ？ごはん食べたんだし！」

鈴鹿「いいねえ！じゃ、着替え用意したらお風呂場集合！」

2人「いいよ！」

五十鈴「時間だよ！帰るよ！」

3人「はい！」

〔鎮守府・お風呂場〕

時雨「あとでコーヒー牛乳のもう！」

鈴鹿「いいよ。」

臯月「あ、木津さん。」

木津「よう、鈴鹿、お前もお風呂か？」

鈴鹿「うん。木津も？」

木津「ああ、偶然だな。まあ、ゆっくりしようぜ！」

というわけで、今回はここまで！次回は軽巡洋艦・木津（ふきの）のおはなしだよ！よろしくね！

木津「ああ、わかってるぜ！じゃ、風呂に入るか！」

「最上の部屋」

鈴鹿「コーヒー牛乳おいしかったね。」

時雨「うん、ねえ、今夜はみんなで一緒にねよ！」

皐月「いいねえ……って鈴鹿？ズボンは？ぬいじやつたの？」

鈴鹿「うん、今日はこれでねようかな？」

最上「きみパンツ丸出しだよ。」

鈴鹿「いいじゃん！最上おねえちゃんも！」

最上「……まあ、たまにはいいか。女の子だけだし。」

確かに女の子には女の子のたのしみだつてある。おしゃべりしたり、かわいいお洋服きたり、お化粧したり。おいしいお料理つくつたりお化粧したり。もちろん、コスプレしたり、おでかけしたり！

時雨「結局みんなルツキーニちゃんみたいになっちゃったね。」

鈴鹿「みんな下パンツ一丁だし。」

臯月「たまにはいいかって、最上さんピンク？」

最上「ぼくだって女の子だよ！ピンクもはくよ。そういう臯月ちゃんもピンクだよ！」

臯月「・・・恥ずかしいなあ。まあ、女の子同士だし、いいか。」

時雨「君もまけてないね。ピンクの水玉模様？」

鈴鹿「そっだよ。時雨ちゃんもピンクの縞模様？」

時雨「恥ずかしいなあ。まあいいや、きみもぼくも女の子だし。」

最上「さあ、もう寝ようか！」

鈴鹿・時雨・臯月「おやすみなさーい！」

どうやらこの人たちもルツキーニちゃんたちのこと知ってたみたい。この艦これの世界ではじぶんのことを僕という艦娘はいたけど、坂本さんのところはどうかなあ？そこが気になるところ。調べてみないとわからないことだらけだ。いや、まだこの艦これの世界にもじぶんの事をぼくという人はまだいるかもしれない。

## 艦娘木津（ふきの）の鎮守府

よっ！俺は木津。軽巡洋艦なんだぜ！こう見えても、俺はちゃんとした艦娘だぜ！  
しばらくこの鎮守府にやっかいになることになったんだ。きようはおれの話だぜ。  
よろしくな。

〔鎮守府お風呂場〕

天龍「おい、いっちょようさ、指で水鉄砲しようぜ！」

木津「お、面白そうだね！」

ピュー、ピュー（手水鉄砲）

木津「おらあー！」

天龍「あらよつと！（よける）」

ピュー ピチャ！（お湯が那智にかかる）

2人「あ……。」

那智「貴様ら……。何をしてる!!」

2人「ごめんなさあーい！」

天龍「次はおもちやのボートうかべて遊ぼうぜ！」

木津「お、いいねえ。競艇ごっこか？」

那智「貴様らいいかげんにしろ。」

この子は軽巡洋艦の天龍、天龍型一番艦。ここに来てすぐに友達になったんだ。

天龍「あ、木會じゃねえか。」

木會「よ！天龍に木津。」

この子は木會、球磨型軽巡洋艦なんだ。おれたちは自分のことを俺っていつている。でもおれたちはれつきとした女の子なんだぜ。

〔鎮守府海域〕

島雪「くらえ！」ズダダダダダ（サブマシンガン）

木會「おっしや！いいぞ島雪！」

木津「でえーい！」

バキーン（刀で駆逐口級型撃破）

島雪「やったあ！これで全部撃破や！」

五月雨「すごいなあ！」

そう！俺も刀を使えるのだ。とはいっても球磨型だが、天龍と同じで刀剣類が使えるし、手持ちの武器だって使える。そして、本来なら単装砲だが、規格外好き提督のアイデアで連装砲がつかえるんだぜ！自動姿勢制御システムもあるぜ。ま、ここの鎮守府

の軽巡洋艦は連装砲に換装されてはいるけどな。そして！

村雨「あら！こうしてみると凸凹コンビね。」

白露「ほんとだ！姉妹みたいだね。」

時雨「つていうか、同じ学校の生徒ってかんじだね。」

木津「・・・んまあ、いえてるな。」

夕立「いや、アイドルグループっぽい！」

白露型駆逐艦としてもやっていける。もちろん、この4人も俺の友達さ。とくに時雨は鈴鹿の友達だが、けっこう好きだぜ。ちなみに俺はスカートははかない方だが、ロングスカートや見て気に入ったスカートならはくぜ。高校のときの制服もスカートだが、けっこう気に入ってるんだ。あ

〔鎮守府演習場〕

島雪（潮風）「でやあー！」ズドーン（連装砲）ドカーン

夕立「やられたあー！」「大破」

木津「ターゲットロック、くらえ！」ズドーン（連装砲）ドカーン

島雪（潮風）「や、やられた・・・。」「大破」

武装は連装砲、誘導式魚雷、機銃といった武装をもち、軽巡洋艦同様、手持ちの武器だつて使えるんだ。それに、この駆逐艦と木津は最近頭部バルカンを装備してるんだ。



今度の改装でつけてもらったのさ。

ズドン！（単装砲）ドカーン

木津「な、なにすんだよ！」「大破」

菊月「戦闘中はよそ見るな。それに余計なこと考えるな。」

ただ説明してただけなのになあ……。

島雪（潮風）「ふーちゃんも服ぼろぼろだ。」

島雪が俺のことをふーちゃんと言っていたが、それは元の世界での俺のニックネームだ。

「グラウンド」

加古「ふわーあ、眠たい。あ、木津。」

木津「よ。元気か？」

加古「あたしはね、元気だよ。」

この子は加古、古鷹型の重巡洋艦なんだ。まあ、どこか気が合うのかな？そんな感じかな。眠たそうな顔をすることもあるが。

天龍「おーい、スーパー行ってなにかかおうぜ。」

木津「この近くにあるのかよ？」

木曾「ああ、案内するぜ。」

加古「あたしも行くう。」

摩耶「よつ、あたしも一緒に行くよ。」

木津「あ、摩耶さん」

この人は重巡洋艦の摩耶さん。この人とも気が合うし、すぐに仲良くなったんだぜ。もう一人、同じ服装で鳥海さんもいるんだぜ。

「鎮守府付近のスーパー」

木津「おーし、おれはこのチョコレートだ。」

木曾「おれはこの菓子だ」

加古「あたしはねえ、このポテトにしよつと。」

天龍「俺はこの・・・、お、薄野と夕張じゃねえか。」

薄野「こんにちは。みなさんお買い物？」

木津「ああそうだよ。今からレジに行くところさ。」

夕張「あたしたちは間宮さんに頼まれて食材買いにきたの。」

木津「よし、あとで手伝ってやるか。みんなもいい？」

天龍「ああ、いいぜ」

加古「いいよ」

木曾「かまわないぜ」

## 「鎮守府食堂」

6人「ただいまあー」

間宮「ありがとおー。助かったわ」

次は郡津提督についてお話するぜ。郡津提督は、島雪（靖子）を助けてくれた命の恩人なんだぜ。この人はいろいろと武器とかを考えてるんだ。俺たちについてる自動姿勢制御装置もこの人が開発したんだぜ！郡津提督って人は、女性提督で、おじいちゃんが政界や財界とかに顔がきく存在、それにすごい大富豪だんだって。ちなみに秘書艦は金剛さん。しかも戦艦だよ。

郡津提督「あら、木津。これから白露たちとお買い物行ってくれない？5人で。」

木津「ああ、いいぜ。」

郡津提督「はい、これ。いるもの紙に書いておいたから。」

すつかり白露、時雨、村雨、夕立とも仲良くなっちゃった。白露から聞くところによるとなんかもう一人仲間がいるって聞いたぜ。白露型で。

五月雨（さみだれ）「ちよつと！わたしたちも忘れてるわよ！」

涼風「そうだよ！忘れんなよ！」

あ、ごめんごめん。この2人も白露型だったんだ。

涼風「もうひとつさ、あと3人も入れると合計4人かな。まだこの鎮守府にいないけ

どさ、あたいたちもあつてみたいぜ。その時は一緒に戦うことになるだろうけどな。」

ますます興味がわいてきたぜ。早く会いたいぜ。つてか、なんで2人がここに？

五月雨「あ、司令官から手伝うように言われたの。」

涼風「そうそう。あ、あの店だよ。」

今日は7人でデイスカウトスパーへお買い物さ。歩いて数分だけどね。今日の晩御飯のおかず買いにきたのさ。

郡津提督「あの木津つて子、すっかり天龍たちだけじゃなくて、白露型のみんなとも仲良しさんになったわね。」

金剛「まあ、仲良しなのはいいことでーす！」

郡津提督「あら、あなたも島雪とすっかり仲良しさんになったじゃないの。」

金剛「それは比叡たちも同じでーす！」

島雪「失礼します。あ、金剛お姉ちゃん！」

金剛「どたつ！時間と場所をわきまえなさい！」

郡津提督「うふふふ。」

まあ、賑やかなのはいいことだし、みんなと仲良くやるのはとてもいいことだつて提督もいつてるし。これからもよろしくな。鎮守府のみんな。

## 艦娘薄野（まどか）の鎮守府

やつほー、夕張型軽巡洋艦の2番艦薄野だよ。今日は私のお話だよ。あたしはまどか、三養基（みやき）まどかだよ。本来ならこの小説では苗字は基本的にだしてないけど、区別するために表記します。いま、食堂でお手伝いしてるの。薄野（すすきの）は、北海道札幌市にある地名にちなんでます。今日は木津たちが手伝ってくれたからたすかったよ。

ありがとう！

木津「ああ、いいよ別に。」

木曾「おい、いこうぜ」

（4人かえっていききました）

夕張「間宮さん、手伝いますよ。」

間宮「ありがとう、助かるわ。」

間宮さんは、聞くところによると、けがをして助けられた島雪（靖子）におかゆつくつてくれたの。あの子はこの間宮さんに感謝してるの。

薄野「あ、鈴鹿。」

時雨「だめだよ、そんな包丁の持ち方じゃ。」

鈴鹿「ごめんさない、包丁で皮むいたことないから。」

時雨「それじゃ将来お嫁にいけないよ。」

鈴鹿「・・・いや、ぼく彼氏いないんだけど。」

〔鎮守府の食堂〕

不知火（しらぬい）「おいしい！誰がつくったの？」

薄野「あたしと夕張ちゃんの間宮さんのお手伝いしたの。」

不知火「ふうーん。」

この子は駆逐艦の不知火。ここに来た時にお友達になったの。夕張は夕張型軽巡洋艦なの。あたしはその2番艦になるわけよ。

〔鎮守府海域・製油所沿岸〕

薄野「えーい！」ズドーン（連装砲の音）

あたしの武装は連装砲、機銃、誘導式魚雷なんだけど、ほかに拳銃、マシンガン、シヨツトガン、ロケットランチャー、刀剣類の使用も可能なんだけど、あたしは刀剣類はあまりつかわないほうなんだけどね。あと、今度の改装でバルカンもつけてもらったの。

ドカーン！（駆逐ハ級轟沈）

綾波「あなた、島雪たちは刀とか使うけど、あなたは使わないね。」

薄野 「ん？まあね。」

島雪 「でえーい！」バシユ！（刀で駆逐口級撃破）

川内 「まあ、たしかに刀で倒すのはあなたたちと天龍くらいかな。あたしのしる限りでは。」

そして、あたしは島雪同様、駆逐艦仕様もあるんだよ。暁型だけど。あたしも、敬礼のしかたにはちよつと戸惑ったかな。

〔鎮守府射撃場〕

薄野 「ターゲットよし、発射！」ズドーンズドーンズドーン！

暁 「かっこいいー！」

電（いなずま） 「すごい、全部あてちゃったー。」

雷（いかづち） 「さすがね。」

響 「これは心強い。」

そして、この子たちともお友達になった。同じ制服を着ているということもあるのかな。でもほかのみんなも同じ制服の子とお友達になったというし、不思議はないか。

ちなみに駆逐艦琴平の武装は連装砲、機銃、誘導式魚雷、ほかにいろんな武器がつかえるんだけど、やっぱり刀はあまり使わないかな。

暁 「一度みてみたいなあー。」

薄野「何を？」

暁「あなたの刀使う所よ。」

雷「いっぺん見てみたい。」

薄野「いいわよ！今度の出撃でみせてあげる！」

そして、いよいよその時がきた！その日は暁型4人、川内さん、そして駆逐艦琴平となつたあたしが出撃となつた！

琴平（薄野）「あたりは暗いわね」

川内「何言ってるの、これぞ夜戦日和よね。」

やつぱり川内さんは夜戦好きだ。なんでだろ？

川内「むむ、敵発見！3機よ！」

そこへ駆逐イ級2機、軽巡ヘ級1機が来た。ようし、腕の見せ所だ！

ズドーン、ズドーン、ズドーン！（連装砲）ドカーン！（爆発音）

暁「すごおい！」

電「敵を3機いっぺんに倒しちやつたです」

雷「さすがは薄野さん！」

響「これは大したものだ。」

実は、この駆逐艦用の連装砲もカスタマイズされてて、従来の連装砲より火力がアツ



プしてるの。もちろん夕張さんが改造してくれたの。けど島雪ちゃんは時々無茶な注文をしてくるの。たしかに島雪ちゃんがこの鎮守府に助けられたときは壊れた装置や武器は修理してくれたけど。

島雪「ねえ、夕張さん、神通さんとか那珂ちゃんとかがつけてる連装高角砲ある

じゃん。あれ自動化できないかなあ？それと、時雨ちゃんや秋雲ちゃんが

使えるようにしてほしいんやけど。駆逐艦用の連装高角砲つくって。」

夕張「いくらなんでもそれは難しいわよ。」

ここでいう連装高角砲は、おもに軽巡もみなさんが使う兵装なの。後期型ならつけられるって夕張さんから聞いたことはあるけど。まあ、続々と新しい武器とか装置とか出たらいいなあって、私たちも思ってるわ。じつは、この世界にきて私たちが深海棲艦と戦ってるのにはわけがあるの。リンディ提督の世界で使われている技術が、敵の機体にも使われていたの。リンディさんによると、誰かがその技術を持ち込んだのではないかって。ちやうど、通信機とかデータ照合するためのコンピュータとかの機材を設置することになったの。

リンディ「こちらにいろんな機材を置くことになってごめんなさい。」

郡津提督「でもありがたいです。これで連絡がとれるようになるんですから。」

そう、これで時空管理局とデータが共用できるし、連絡がとれるようになったの。リ

ンディ提督も階級（？）は提督だけど、同じ提督でもちよつと違うかな？

エイミー「ここは、これでよしと。本部、聞こえますか？」

局員 「はい、聞こえます。感度良好です。どうぞ。」

このエイミーさんはリンディ提督と同じ時空管理局の人なの。クロノ君も同じなの。ちよつどこの日はみんなのお手伝いに来てたの。

「元の世界」

靖子（島雪）「本当によかった。あなたたちが来てくれて。もう元の世界に帰れない  
と思つたよ。」

まどか「リンディさんたちに感謝しなくちゃね。でもどうして深い霧が出てき

たの？今その原因を調査中だけど。」

靖子（島雪）「いやあ、その、コンビニの帰りにちよつと空のお散歩をと思つ

て飛んでたら急に深い霧が。気が付いたら、その世界にいたわ

けだよ。天気予報でも濃霧になるって言つてなかつたし。」

私たちは一定期間、といつても数日おきではあるけど、元の世界と艦これの世界を  
き来してるの。こつちの学業も大事なわけだし。もちろんその事は郡津提督の了承は  
得てます。まあ、そのうち、なのはちゃんたちと深海棲艦と戦うことになるかもしれな  
い。

ユーノ「その可能性は十分ありえるよ。」

まどか「おわあ！びっくりした。」

なのは「そうだったら、力を合わせてがんばらないと。」

あ、言い忘れてたけど、靖子ちゃんとは昔お隣同士の幼馴染だったの。あたしが父の仕事の都合で海外に行つて、高校1年のときに靖子ちゃんと再会したの。あの時は本当にうれしかった。あ、ちなみに学校は靖子ちゃんと同じ学校です。

なのは「へえ、知らなかった。ところで、ユーノ君なんで人間になつてるの？」

ユーノ「あ、いや、細かいことは置いといて。あ、ひみか。」

ひみか「こんにちは。次回は私の番だね。」

まどか「そうだね。では、次回はひみかちゃんの番です。お楽しみに！」

## 艦娘笛吹（ひみか）の鎮守府（編集集中）

こんにちは。私は川内型5番艦笛吹だよ。今は那珂ちゃんのお部屋にきてます！

服装是那珂ちゃんたちと同じですが、装備はちよつとちがうんだよねえー。

那珂「鎮守府のアイドル那珂ちゃんですー！」

この子はお友達的那珂ちゃん、かわいいわよ。すぐに仲良しになったのよ。

神通「那珂さん、笛吹さん、出撃ですよ。」

この子は神通さん、島雪ちゃんの命の恩人よ。ほんとうに感謝してるの。

「鎮守府海域」

川内「さあ！夜戦よ！」

この子は川内（せんだい）、宮城県の県庁所在地、仙台市じゃないよ、鹿児島県の川内よ。島雪ちゃんだて知ってるはず。

島雪「なあに？呼んだ？」

笛吹「あ、来てたんだ……。」

島雪「きてたわよ！」

この日は川内さん、那珂ちゃん、島雪ちゃん、扶桑さん、初春さん、あたしで戦闘区

域に行くことになりました。

島雪「うわ！軽巡ホ級だあ！」

川内「いくわよ！」

ドーン、ドーン、ドーン（単装砲）

川内型は単装砲を装備してますが、あたしは規格外に設計された軽巡なので……。

ドーンドーンドーン（連装砲）

ドカーン！（軽巡ホ級撃沈）

扶桑「あらあ、なかなかのものね。」

初春「おお、なかなかやるぞよ。」

あたしの武装は連射可能な連装砲、機銃、誘導式の4連発の魚雷が装備されてるの。ほかの武装も使えるけど、飛び道具以外はまずつかわないかな。そんなあたしも駆逐艦タイプがあるよ。陽炎型21番艦与謝野としてね。21ていうのは重複を防ぐためよ。

「教室」

陽炎「あなただけは黒タイツなのね。あたしたちはスパッツなのに。」

笛吹「そういやあ、そうだよね。」

黒潮「そやなあ、うちらとはちよつと違うなあー。」

不知火「そういやあ、そうよねえ。」

秋雲「なにいつてるの！あたしだってタイツはいてるよ！」

不知火「あ、忘れてた、ごめんね。」

この4人とはすっかり仲良しになっちゃった。陽炎ちゃん、黒潮ちゃん、不知火ちゃん、秋雲ちゃんだよ。

高雄「はい、きょうの1時間目は演習です。」

〔鎮守府射撃場〕

ドーンドーンドーン（連装砲）

黒潮「おお、穴が開いたやん、すごいな」

そう、あたしの連装砲は連射対応型、速射ができるのよ。機銃もあるし、誘導式の魚雷だってあるの。まあ、まず使うことはないでしょうが、刀剣類の使用、重火器、ハンドガンとかの使用だってできるのよ。あ、そうそう、言い忘れてたけど、この与謝野や笛吹、改装でバルカンつけてもらっちゃった。まあ、酸素魚雷はまだ先でしょうが：。ちなみに改装は、最初は提督さんが付けていなかったの。というのも、計画にはなかったし。のちにあたしたちの提案でつけることになって、すぐ改装になったのよ。

那珂「さあ、笛吹ちゃん、夕立ちちゃんと歌おうね！」

笛吹「いいの？那珂ちゃん。」

夕立「みんなで歌ったら楽しいっぽい！」

笛吹「よつしや、歌いますか。」

時々、好きな歌をみんなで歌ったりするの。おかげでちよつと歌が上手くなつたかな。のぞみちゃんも一緒ならもつと楽しそうだな。普段は学校に通つてて勉強してるの。お嬢様学校だけだね。島雪ちゃんもお家は大金持ちだから私と同じ学校に通えるでしょうけどね。いつもは電車で通つてます。なえみちゃんもお金持ちですけどね。

なえみ「はい、ご紹介に与（あずか）りました、阪井なえみです！今後ともよろしくお願ひいたします。」

ひみか（笛吹）「まだ出番早いって。」

私達は魔法少女だけど、リンデイ提督の世界、つまりミッドチルダの技術が使われているから、定期的にメンテナンスが必要なの。時々リンデイ提督の戦艦に乗せてもらつたり、直接行つたりしてるの。ワープ機能があるし、シールド機能もあるの。ミッドチルダ式なのでカートリッジが必要なの。中には近代ベルカ式を用いたものもあるけど。でも共通点はビーム兵器も使えるし、通常兵器も使用可能なことかな。

「ミッドチルダ・時空管理局」

エイミイ 「お待たせ。さあ、メンテナンスを始めるわよ。」

ひみか（笛吹） 「はい。」

靖子（島雪） 「なんか身体検査っぽい。」

ゆうき（鈴鹿） 「他の人はもう終わっちゃったからね。」

メンテナンスは必要だからね。メンテと言えば、艦娘になった時の艦装や武器のメンテは鎮守府の工場のスタッフの皆さんに任せているの。まあ、島雪ちゃんのストライカーパックはウィッチーズ基地のスタッフの皆さんがやってくださっているの。そうそう、時空管理局にいつてる間、ミッドチルダ文字の勉強とかもやってるの。なにしろデイスプレイも出せるけど、ミッドチルダ文字も出るから、読めないとだめだからね。

ひみか（笛吹） 「なるほど、ここをこうか。」

エイミイ 「そうよ、ここはこうして書くのよ。」

靖子（島雪） 「普通の英語なら書けるけど。」

ゆうき（鈴鹿） 「そんなんじゃないだよ。」

エイミイさんが先生として教えてくださってるの。けど時には顧問官のグレアムさんからも教わってもらうこともあるの。さらにリーゼさんとアリアさんからも教えてもらうこともあるの。勉強以外にも、エイミイさんたちと近くの公園にお散歩に行ったりもするよ。



## 艦娘奈半利（妙子）の鎮守府

あたしは奈半利、阿賀野型の軽巡洋艦なの。でも、この鎮守府には阿賀野型はないの。提督さんがほかの鎮守府にいったときに阿賀野っていう軽巡洋艦をみて、思いついたの。いつかお会いしたいなあ。でも、あたしには軽巡洋艦のタイプは違えど、ちゃんとお友達がいます！

「鎮守府ドック」

北上「ああ、魚雷はやっぱ重い。手伝ってくれてありがとう。」

奈半利「かまわないよそんなこと。」

この子はお友達になった北上さん。軽巡なんだけど、大井さんってのもいるんですけど。まだあつたことはないけど。でもあつてみたいなあ。

「鎮守府正面海域」

北上「さあ、魚雷いきますよ！」ズドーン

奈半利「でえーい！」ドーンドーンドーン（連装砲）

ドカーン（駆逐八級撃沈）

北上「すごいですねえ、連射できるなんて。」

そう、あたしの連装砲は連射ができるタイプ。ほかに誘導式魚雷、機銃が装備されています！最初はなかったけど、のちに頭部バルカン、コクピットシステムもあるの。あ、いってなかったけどコクピットシステムは島雪ちゃんたち以外にはないから。

龍田「でもほかに阿賀野型がないなんて、淋しいんじゃないですか？」

奈半利「そりゃさびしいよ。あたし一人だけだから。」

島風「あたしも島風型だけ一人よ。でもあなたがいるから淋しくないよ。」

この島風ちゃんもお友達なのよ。駆逐艦だけ。ほかにも駆逐艦のお友達がいるよ。

長月「おい、それは戦いがおわってからにしろ。まだ終わってないぞ！」

奈半利「おーし、これでバツサリといくぞ！」

バシユ！ ドカーン（駆逐口級撃破）

もうひとつ、刀剣類の使用も可能なんだよ。ほかに重火器、アサルトライフル、ハンドガンといった携行武器のしようもできるんだよ。そしてあたしたちでも扱えるように自動姿勢制御システムがあるの。ようはたおれないように航行をサポートしてくれる装置かな。

「鎮守府の教室」

朝潮「にあうわよ、その制服」

奈半利「ありがとう。」

初霜「あたしはネクタイだけどね。」

霞「でもおりボンつけるなんてね。まるで学校の生徒だね」

満潮「私とおなじだ。」

奈半利「それはそうと、なんであなたたちつけないの？」

大潮「それは人の好みだと思うわ」

霞（あられ）「あたしもそう思う」

若葉「全く、その通り。」

駆逐艦バージョンもあるあたしは初春型（初霜と同じ制服）の駆逐艦・弓張でもあるの。仕様は奈半利のときとおなじだよ。耐久性と装甲は島雪ちゃんたち同様規格外の強さ、つまり普通の軽巡と駆逐艦よりは上だけど、あたしのほうは一番上なの。ただ出張と間違えられそうになりはするけどね。それと、朝潮ちゃん、大潮ちゃん、霞ちゃん、霰ちゃん、初霜ちゃん、若葉ちゃんともすっかりお友達になりました。

金剛（放送）「へーい皆さん大変デース！戦艦ル級が現れました。霧島からの応援要請デース！奈半利、川内、筑摩、高雄、青葉、衣笠は直ちに出勤デース！」

奈半利「おし！いつてくるか」

〔鎮守府海域〕

島雪「あ、あいつだ！あたしあいつに、両手が太砲になってるお姉さんにひどい目

にあわされたの。」

霧島「うん、これは苦戦するわね」

木曾「お！どうやら来てくれたぞ！」

筑摩「待たせたわね！攻撃開始よ！」

奈半利（弓張）「くらえ！ロケットランチャー！」バズンバズンバズン！（発射音）

ル級「!!」ドカーンドカーンドカーンドカーン！

衣笠「続け！」ズドーンズドーンズドーン！

ル級「ぐわあああああ！」

霧島「やったわ！見事たおしたわ」

島雪「やりましたね霧島さん！」

この弓張でも小火器、重火器、刀剣といった手持ちの武器が使用できるの。あと、コクピットシステムあるのよ。

霧島「今度、乗せてくださいね。海上をドライブも楽しそうだし。」

奈半利（弓張）「いいですよ。」

島雪「そりゃクレージングっていうんじやないの？」

衣笠「違うわよ！クレージング！」

そして、私たちを狙う敵組織、少内提督、そして背後には大掛かりな組織があるときれているけれど、まだまだ謎の部分が多すぎるの。わかっている事は深海棲艦を自ら作り出せるということなの。それに、ジュエルシードが使われているということかな。

少内提督 「私が少内提督だ！日夜、すごい深海棲艦を作ってる提督だ。最近は資材を使いすぎ開発がままならぬ状態なのだ。ほかに賀千谷提督、それに角有大提督も控えておるのだ！あ、しゃべりすぎたかな？」

部下 「提督、喋りすぎです。」

少内提督 「私はあの提督を倒すためなら全ての資材を使つても倒してやる！たとえ相手が魔法少女でもウィッチーズでもな！」

部下 「だから資材の無駄遣いはやめてください。もうどれだけ資材使つたかお分かりですか？」

少内提督 「分からないなあ。なにしろありつたけ使つたからなあ。まあまた、賀千谷提督や角有大提督から調達すればいいさ。」

部下 「仕方ない人ですね。」

他に伊達一提督や女装子の岡山提督もいるよ。これから出てくるからよろしくね。伊達一提督 「伊達一だ。よろしく頼む。宿毛湾泊地の提督だ。」

桃桜 「私は駆逐艦の桃桜です。伊達一提督の秘書艦を務めています。」

岡山提督「ぼくは岡山です。よろしくね。こう見えても艦娘もやってます！僕は

岩川基地です！」

まあ、提督が艦娘もやってるってのは前例がないと思うな。けど、郡津提督のお陰で艦娘になれたのかな。ほかに桃桜さんは郡津提督さんのところで作ってもらった艦娘さんなの。

「鎮守府」

大潮「ねえ、奈半利、あとであんみつ食べにいこう！」

奈半利「いいわね、いこいこ！」

朝潮「その前にやるべきことがあるわよ！」

島雪「そう、読者の皆様へごあいさつよ！いくよ！」

鈴鹿「みなさま、拙い文章ですが、最後までお読みいただきありがとうございます。」

います。」

木津「次回からは新しい艦娘さんが登場するぜ！」

薄野「それだけじゃなくて、新しい提督も登場予定よ。」

笛吹「今後も暁の水平線に平和と友情の絆を」

奈半利「よろしくおねがいます。」

なのは「まって！わたしたちも一緒に！」

芳佳「私たちを差し置いてごあいさつはないわよ！」

(鹿目) まどか「そうだよ、みんなであいさつしよう！」

さくら子「わたしたちも！」

島雪「そうだね。それじゃ！」

登場人物一同「今後も、暁の水平線に平和と友情の絆をよろしく

お願いいたします！」

## 長門さんがやってきた!

教室では、こんど来る新しい戦艦でもちきりだった。

「なあ、島雪。どんな戦艦がくると思う?」

「え? 陸奥さんはもうここにいろし・・・」

「なんでも聞くとところによると陸奥さんのお姉さんらしいぞ」

長月と島雪、望月で話していた。薄野と鈴鹿も誰が来るかはわからなかった。ただみんなは長門型の一番艦がくるといふ情報だけで、それ以外はわからなかった。

島雪は考えていた。もう陸奥はここにはいるが、そのお姉さんがわからない、しかし、戦艦ではないかと考えていた。郡津提督所属の鎮守府の大型戦艦は金剛さん4姉妹を除けば扶桑姉妹、日向、陸奥ぐらいである。いったいどんな人なのか・・・。

そのころ、深海棲艦のアジトでは、通信が入っていた。闇の提督と名乗る人物からであつた。

「どうだ、新開発の駆逐艦は?」

「まずまずの性能です。しかし、例の艦娘の邪魔がはいりました。」

「報告は聞いている。ならばそれに対抗できる軽巡を送り込もう。」



「ありがとうございます。お礼に深海饅頭をどうぞ。深海温泉名物です。」  
「……なんだそりゃ？」

深海饅頭とは、深海棲艦たちのあいだで人気のお饅頭である。しかし、提督はお断りした。

「この饅頭、おいしいのに……。おかしな提督ね。」

そのころ、鎮守府の教室では、新しい戦艦はまだかまだかと島雪たちがまちわびていた。そして、長門と提督が教室に向かっていた。戸を開けたら島雪たちがお喋りしていた。そこへ長門がきた。島雪はあわてて号令をかけた。

「あ、来た！起立！礼！着席！」

このあと、提督は長門を紹介し、長門も自己紹介した。

「今日、この鎮守府に新たにきた長門さんよ。」

「私が新しくここに来た長門型一番艦の長門だ。陸奥ともどもよろしくな。」

全員起立して、敬礼をしたが……、島雪、鈴鹿、薄野は慌てていたのか、陸軍式の敬礼をしてしまった。

「あ、ごめんなさい。」

それを見て長門が笑った。

「ふふふ、そのままでもいいよ。それよりお前たちか？異世界からきたってのは」

「はい！軽巡洋艦の島雪といひます。」

「ぼくは軽巡洋艦の鈴鹿です。」

「私は軽巡洋艦の薄野です！」

一通り挨拶が終わると、授業に入った。島雪たちは、長門は提督からいろいろと聞いているのではないかと思つた。しかし、陸奥と同じ戦艦なら、すごい威力をもつた強い戦艦ではと確信した。その威力とかを見たいとおもつていた。長門もまた、島雪たちの実力を見たいとおもつていた。もちろん、長門は陸奥、提督たちから島雪たちのことを聞いていたのである。それならば、この日は演習の時間があるので、それを利用して、彼女たちの能力を試そうと思いついた。演習の時間、島雪たちは、3対1で演習を申し込まれた。島雪は、たった1隻の戦艦が軽巡洋艦3隻にかなうのかと疑問におもつていた。

「うーん、1隻で挑むなんて、よほどの自信があるのかな？」

しかし、鈴鹿は気にはいかなかった。薄野も同じだった。

「たった1隻で3隻の軽巡に勝てっこないとおもうよ。」

「そうそう、相手は1人よ。」

そこには、隣のクラスの艦娘たちの姿もあつた。もちろん、陸奥もいたし、奈半利たちの姿もあつた。

「あの人が新しい戦艦、長門ね。」

「長門といえば山口県に同じ地名があるね。」

「けどどんな戦いになるのかな?」

長門は、隣のクラスにも島雪たちの友達がいることも知っていたし、特別な装備もあることも聞いていた。この際、隣のクラス、自分のクラス全員にも自分の戦い、模範演習（つていうのかな?）を行うことになったのだ。

演習開始! 島雪たちは自分たちの連装砲で攻撃したが、まるで歯が立たない。

「くっ、なかなかやる!」

鈴鹿は連装機銃で攻撃するが、やはり歯が立たない。薄野は連装砲で長門を攻撃、みごとに当たった。が、致命傷にはならなかった。

「なかなかやるけど、みんなまだまだだね。今度はこっちから攻撃するよ。」

長門が20・3cm連装砲を発射、薄野と鈴鹿に命中、「大破」した。

「どうした? 提督からきいたが、お前たちは規格外の強さだとはきいてはいたが、訓練がたりぬようでは、死ぬぞ。」

「まだまだあー!」

鈴鹿と薄野は大破してもハンドガン、魚雷で攻撃してきた。島雪もかすり傷ながらも連装砲で攻撃してきた。さすがの3人の攻撃に長門は「小破」した。

「ふふふ、それでいい!その諦めない気持ちが大大事だ!」

長月たちや吹雪たちも、演習といえど、釘付けになって見ていた。

「すごいな、あんなにぼろぼろになってもまだ戦ってる。」

ついに島雪も「中破」した。しかし、それでも残った武装で立ち向かった。

「こんなかつこうになっても、あたしは負けない!」

「ぼくも最後まで戦う!」

「こうなつたらみんなで力を合わせて!」

そして、3人は1つになって長門に立ち向かった。

「でやあ————!」

「!!」

ついに長門は「中破」した。それを見ていた長月たちは驚いた。

「ふ、見事だ。それでこそ規格外の強さというものだ。」

そこへ提督が現れた。提督は3人の頑張りに驚いた。長門も3人の奮闘ぶりに驚き、これなら深海棲艦も倒せると太鼓判を押した。長門は、ぼろぼろになつた3人の服装をみて下着がみえてることに気が付いた。

「・・・それにしてもお前たち、今日はその下着着けてきたのか?」

「あ、見えてました?」

服が破れてたから当然である。3人は照れ笑いした。

「女の子はおしゃれするには当然です。そりや、ブラやパンツだってかわいいのえらびますよ。」

「ふ、そうだな、今日の授業は終わりだ。早く帰って着替えるように。」

やっと授業が終わり、3人は新しい服と着替えた。長門があのような強さだったことを痛感した。さすがは戦艦だと感心した。しかし、長門の頭のアンテナが、なんかつうとほいという感じはしていた。ふきの提案で、6人は伊良湖のところへ軽食にいうとしたとき、緊急の知らせが多摩から届いた。

「大変にやー、緊急出動だにやー!!南西諸島沖にて深海棲艦出現だにやー!」

「わかった!今行くから!」

島雪たちは出撃準備を済ませ、急いで南西諸島沖に向かった。島雪、薄野、鈴鹿、三日月、初霜、長門が出撃した。そこではみたこともない軽巡闇樁が駆逐口級たちと暴れていた。右腕は連装砲とクロー、左腕にはミサイルランチャーを装備していた。

「なにあれ?みたこともないやつだ。」

「みんないくぞ!」

「あ、はい。」

長門の号令で6人は軽巡たちに攻撃を開始した。島雪と三日月、初霜は連装砲で攻撃、そして鈴鹿と薄野は刀で次々と駆逐イ級、ロ級、ハ級たち（数は合計5隻）を倒していった。薄野は刀を普通使わないが、この時ばかりは特別であった。長門は軽巡閘樁（やみつばき）と対峙していた。

「ビッグ7のこの長門の実力をみせてやる。」

長門は連装砲で攻撃するが、軽巡閘樁はまるで攻撃をよんでるかのようになんとかかわし、長門の弾はなかなか当たらない。

「くそ、なかなかあたらない……。」

長門は攻撃を続けたが、一発もあたりもかすりもしなかった。そして弾切れを起こした。

「く、弾切れか……。」

それをまっていたかのように、軽巡閘樁はクローで長門に襲いかかった。クローは長門の右側の連装砲を破壊した。そして左側の連装砲も破壊した。次々と繰り出される攻撃で「中破」した。

「く、さすがにやる。このままでは……。」

軽巡閘樁は長門に襲いかかった。そのとき、薄野と鈴鹿の連装砲が火を噴き、軽巡閘樁は吹っ飛んだ。

「大丈夫ですか？長門さん」

「大丈夫だ、助かった。さあ、攻撃を続けるぞ。」

「はい！」

5人は軽巡閤椿に連装砲、魚雷で攻撃、軽巡閤椿は「大破」した。そこへ木津、陸奥、笛吹、奈半利、島風、吹雪もかけつけてきた。

「いくわよ、みんな、攻撃開始！」

「はい！」

そして、陸奥たちの攻撃によって、軽巡閤椿は撃沈した。島雪は長門によってきた。

「大丈夫ですか、長門さん。」

「ふ、さすがだな、私が太鼓判をおしたことだけのことはある。これからもよろしくな。」

長門は、島雪たちの活躍をだれよりもよろこんだ。それは陸奥も同じだった。これからもこの6人といっしょにやれると確信した。その報告を聞いた提督も金剛も喜んだ。しかし、新しい深海棲艦の軍艦が出たことも知り、これからの6人の役割が重要性も再認識した。

「了解、金剛、あの6人やったわよ。」

「hey、やりましたね！期待どおりでしたね。でもあの見たこともない軽巡、データにはありませんでしたね。」

「そうね、これからのあの6人の力はますます重要になってくるわね。それに敵の新しいデータも作らないと。」

「そうですね、提督のこれまではみ出した行動をデータにしないと。」

「なんでその話になっちゃうの!話をそらすな!!」

鎮守府に戻り、6人はいらこやで蜜豆をたべていた。そこへ三日月、初霜もきた。島雪は2人をねぎらった。

「ありがとう、初霜ちゃん、三日月ちゃん」

「てれるなあ、島雪ちゃん」

「でも敵は倒せたし、無事に帰ってこれたんだし。」

「そうだね、これからも一緒にがんばろう!」

「うん!」

この日も鎮守府のいらこやは笑顔であふれていた。



## 島雪とはみだし者の伊達一提督（編集集中）

夜、自室でリンディ提督と今回の新型の敵の軽巡について報告していた。リンディ提督は、島雪たちとの連絡のために通信機を置いておいたのである。

「そう、新しい敵の巡洋艦が。」

「ええ、調べましたが、この鎮守府の資料にはないタイプのもんです」

島雪たちは、あれが深海棲艦のものではなく、だれかが開発したものではないかと推測した。でなければ、あのようなデザインのものには開発できないと考えていたからだ。

郡津提督もそう考えていた。そして、薄野はデータをリンディ提督に送った。薄野はパソコンにもたけていた。

「また新たな敵のこととかわかったら連絡してね。」

「わかりました。」

通信を終えた6人はそれぞれの個室に帰ろうとしたが、そこへ霧島がやってきた。

「あの一、提督があなたたちにお話しがあります」

それを聞いた6人はいぶかしげに提督室へ向かった。そして、6人は、ほかに提督がいることを知った。島雪たちは艦これの世界ではいろんな提督がいることは知っては

いた。それはこの世界でも同じことだったと確信しつつあった。だが、実際あつてみないといわからなかった。

「伊達一（だていち）提督？」

その名前を聞いた島雪たちは初耳の提督の名前に驚いていた。

「その人はね、この前、ここの技術を知って、私に艦娘の建造を依頼したのよ。まあ、戦略、射撃の腕は優秀なベテランなんだけど、はみ出し者と言われてる提督なのよ。」

それを聞いた島雪は、この提督もひとのことは言えないと思つた。しかし、同じはみ出し者でも中身は異なるし、一概にはいえないのではないかと考えた。

「明日、授業はいいから、あなたたちのほかに選ばれた6人で行きますから。」

「ねえ提督、その人とどういふ関係？ひよつとしたら提督の恋人？」

鈴鹿の質問に郡津提督は真つ赤になつた。

「違うわよ！この前の旅行のお土産を渡すついでに行くのよ！」

さらに奈半利はからかつた。

「中にラブレター入れて渡すつもり？」

「違います、いい加減にきなさい！」

さらに金剛もからかつた。

「oh！ロマンスグレーもいいじゃないですか！提督う！！」

ついに郡津提督は大激怒!!頭にきちやった!!

「いいかげんにしなさいあなたたち!!」

「いやぁーん!!」

7人は悲鳴をあげ黙り込んでしまった。怒鳴った郡津提督は息を切らした。

「はあ、はあ、とにかく、あたしと金剛は一緒にいきます。」

「あとの5人は?」

「今日中に考えておきます。」

という回答にとどまった。いったい誰が行くのか、島雪たちはきになって仕方なかった。そして翌日……。

「あー、島雪の中にこんなゆったりくつろげるコクピットがあつたなんて。」

「ええ、あたしはサイボーグといつてもロボットみたいには操縦可能ですから。」

郡津提督は知つてか知らずか、島雪の中にゆったりくつろげる空間のコクピットでくつろいでいた。島雪は、鎮守府のミサイル艇2隻あるからそれに乗ればいいのにとふと思つた。一応ミサイル艇は1隻同行はしているが。その頃、少内提督の鎮守府では、駆逐艦黒雪を完成させていた。吹雪型をモチーフにしている。

「うーむ、いい出来だな。まあ、私が開発したわけではないが。」

「提督、この付近に航行する船団があります。」

「よし、追尾しろ。」

部下に追尾を命じ、攻撃する機会をうかがうことにした。その頃、郡津提督は、伊達一提督と挨拶していた。伊達一提督の鎮守府は、宿毛湾泊地にあった。

「郡津と申します。」

「伊達一だ。ようこそわが鎮守府へ。貴官らを歓迎する。そしてこちらは駆逐艦の若桃桜だ。」

「駆逐艦桃桜です。」

そして、島雪たちも挨拶した。ひよつとして、この子が郡津提督に頼んで作ってもらった艦娘かな？聞いてみた。

「提督、この子が？」

「そう、この子が私が設計、作った艦娘よ。たっぷり時間があるから、休憩していいわ。」

「桃桜、休んでいいぞ。それにほかの鎮守府の艦娘とのコミュニケーションも大事だからな。」

「はい。」

この伊達一提督の鎮守府は、広大な畑があり野菜作りもしていた。この艦娘たちは畑仕事もしている。島雪は、ひよつとしたら提督は、ほかの鎮守府の見学のために自分たちを誘ったのかもと思った。

「ここで野菜を作ってるの。イベントの際には手作り野菜を売ったり、お料理の食材にしたり、お料理の食材につかったり。」

「ふうーん。ぼくたち、人間だけど艦娘でもあるんだよ。」

「そのことはあの提督から聞いたわよ。」

いろいろと彼女たちの会話は続いた。と、その時、爆発音が響き渡った。奥から白雪

(伊達一)と多摩(伊達二)が飛んできた。

「大変だにやー！敵が攻めてきたにやー!!」

「何ですって?」

「どこなの白雪ちゃん!」

「あつちよ!演習場が。」

急いで演習場に駆け付けけると、その場所が被害を受けていた。そこには黒雪が立っていた。ほかに人型駆逐艦イ級、駆逐口、ハ級合計10隻がいた。

「さあ来い!これは演習じゃないぞ!」

「円周率か?」

「違う!」

「違うよ、円周率じゃなくて遠州灘だよ。」

「それも違う!行くぞ!」

ついに戦いが始まった。

## 島雪と鳳翔さんのお料理

島雪は、晩御飯を食べずに1時間30分の遠征に向向いていた。この遠征には、文月、三日月、村雨、時雨を連れていた。島雪は夜空を見上げて村雨に話しかけた。

「村雨ちゃん、きょうもお空が晴れててお星さまがきれいだね」

「そうね。明日もはれるかな？」

「きつと晴れるよ。ラジオの天気予報でそうだった。」

この艦これの世界にもラジオはあるのだ。当然のことながら．．．もちろん、icレコーダーやポータブルラジオだってあるのだ。島雪の艦装にだってそのラジオを聞く機能はある。艦装なしでもサイボーグ形態になればきけるが。島雪は遠征のときどきどきfmで音楽を聞いたりしているのだ。

「あなたもラジオをきくんだね時雨ちゃん。」

「そりゃ、もちろんだよ。fmだけど」

5人は晩御飯をたべてなかつたので、早く鎮守府に付きたかつた。

「まだ？村雨おなかすいたよ。」

「見えてきたよ。もうすぐだよ」

文月が鎮守府を見つけた。もう目と鼻の間だった。みんなは晩御飯を楽しみにしていた。ところが、もうすぐ到着するころ、食堂ではとんでもないことが起こっていた。それは、赤城が島雪たちのぶんまで食べてしまったのだ。それを見て間宮は怒った。

「ちよつと赤城さん！それは島雪たちのぶんよ！！いい加減にしなさい！！あーあ、全部たべちゃった。」

「ほかの人の晩御飯を勝手に食べちゃって、この榛名が許しません！」

「ごめんなさい。まだ食べ足りなかつたもの。」

間宮さんは呆れていた。人の分まで食べるなんてとんでもないことです！気を付けてください赤城さん！さて、鎮守府に戻り、食堂へ一直線の島雪たち。

「さあ、晩御飯晩御飯！」

「きようは時雨ちゃんのスきな肉じゃがだったね。村雨も好きだけど。」

「早くごはんたべたいよ。」

「肉じゃが肉じゃが！」

「おなかすいちやつたわ」

しかし・・・、島雪たちのぶんはなかつた。間宮さんは5人に謝罪した。

「ごめんなさい・・・。赤城さんが全部食べちゃったわ。」

それを聞いた島雪たちはしよんぼりした。文月は突然ショックで泣き出した。



「うわあーん！食べたかったのにい！」

春日は文月になって言ったらいいのかわからなかった。そこへ鳳翔さんがきた。

「どうしたんですか間宮さん？いま文月ちゃんの泣き声が聞こえたんですが」

間宮さんは、どうしてこんなことになったかを鳳翔さんに説明した。すると鳳翔は代わりに晩御飯をごちそうすることになった。

「かわいそうに、わかりました。簡単な晩御飯くらいは出せるとおもいます。」

「すみませんね、お願いします。」

それを聞いて、島雪たちはちよつと安心した。鳳翔さんは5人を酒場に案内した。そこは、島雪が吹雪に案内された酒場であった。しかし、そのときは鳳翔さんはいてなかった。初めて鳳翔さんに会ったのだ。

「あの、失礼ですが、お名前は？あたしは天龍型3番艦、島雪と申します」

「あら、島雪さん、私は軽空母の鳳翔ともうします。よろしくお願いします。」

ちよつど酒場で、日向と足柄、那智が酒を飲んでいて、日向は飛行機のことを2人に話していた。しかし、飛行機のこと、足柄と那智にはわかるのだろうか!?ましてや島雪がジェット戦闘機とか戦闘ヘリのこと話してもわかるのだろうか？少々疑問に思った。

「待っててね、いま作るからね。」

「はーい！楽しみだな」

島雪たちは肉じゃがを食べそこなったが、特別に鳳翔さんの手料理が食べられるとあって、楽しみにしていた。島雪はメニニューを見まわした。

「サイダー割り、鹿児島産芋焼酎、京都のかぶの漬物、ウイスキー、熱燗、テキーラ、いろいろあるね。けっこうメニニューあるなあ」

それを聞いて、那智が島雪に話しかけた。

「なんだ、貴様らもきていたのか。」

「ええ、晩御飯に誘われてね。」

「さては赤城に晩飯を取られたか、まあ仕方ないか。」

「ええ、私が晩御飯にさそったんです。」

鳳翔はてきばきと料理を作っていた。そして、お味噌汁をつくっていた。本来なら作らないはずなのだが、5人のために特別につくっていたのだ。続いては塩分控えめの鮭のホイル焼き、5人分をつくっていた。島雪は、この鳳翔さんを見て、まるでこの鎮守府のお母さんのような存在を感じていた。そこへ、村雨がふざけて島雪の耳に息を吹きかけた。

「ひいっ……！こおーら！人の耳に息を吹きかけるな！」

「だって島雪がぼおーつとしてたから！」

そしてご飯が出来上がった。ご飯、かぶの漬物、お豆腐入りの味噌汁、しゃけのホイ

ル焼き、みようがである。5人はいただきまーすとさっそく食べた。

「あ、うまい！」

「この塩じゃけ、塩分控えめだけどおいしい」

「お味噌汁もいける！」

「みようがもいける！」

「肉じゃがもいけど、こつちもいい！」

島雪は、これがお金じゃかえないものなんだなと思った。世の中はお金じゃ買えない大切なものもあるんだってことを再認識した。島雪はふと思った。どこか懐かしい風景がこの鎮守府にもあるんだなと感じた日であった。

「鳳翔さん、このすてきな料理、ほかのみんなにふるまったらいかがですか？」

「ええ、いいわよ！」

「おいしかったよ、鳳翔さん、文月、また食べたい」

「もちろんよ、いつでもごちそうしてあげる。」

「うわーい！」

この日は、島雪たちにとつて忘れられない晩御飯となった。そして、晩御飯を終え、5人はお風呂に入っていた。そのとき、島雪は、あることを思いついた！4人を集めて相談した。翌日、間宮さんの食堂で、赤城は今日も大盛りのご飯を食べていた。そこへ島

雪、時雨、村雨、文月、三日月の5人が来た。

「赤城さん！よくもあたしたちの肉じゃがを食べたわね！」

「黙って人の晩御飯まで食べるなんて最低！」

「文月、肉じゃが食べたかったんだから！」

「何かおごつてもらうよ！」

「何かおごつてよね！」

5人の様子を見て驚いた赤城は、けつきよく根負けし、放課後に甘味処で5人にデザートをおごることになった。

「さあ、どれでもいいわよ。」

それを聞いた島雪は

「んじや、あたしは特製間宮もなかとチョコレートパフェ大盛りね！」

「な、何ですつてえ！」

驚いた赤城であったが、約束を守るしかなかった。

「ぼくは白玉あんみつ大盛り！」

「文月も白玉あんみつ大盛り！」

「あたしは大盛りアイス！」

「んじや、あたしは間宮特製抹茶アイス大盛り！」

全員大盛りで注文した。赤城は、島雪も自分に負けないくらい大食いだなと、痛感した。そして、デザートを平らげた島雪たちは満足げに甘味処を後にした。

「あーあ、痛い出費だわ。とほほ……。」

「当たり前です！ほかの人の晩御飯を取ったからばちがあたつたんです！ゆっくり反省しなさい！赤城さん。」

5人にデザートをおごるはめになったうえ、間宮さんに叱られる赤城さんでありました。

## 蒼龍さんと鳳翔さんの出撃

お風呂から上がり、あの時の味がわすれられない島雪は、また食べたいなあーと、自室で考えていた。あれはまさしくおふくろの味って感じであった。時間はすでに11時になっていた。

「あ、もうこんな時間！早く寝ようっと。」

島雪は、また鳳翔さんがおいしい料理を作ってくれることを期待した。翌日、授業の2時間目が終わると、島雪、鈴鹿、涼風、響、文月は、高雄から遠征のついでお使いを頼まれた。伊達一提督のところへ行って、野菜をもらってきてほしいというのだ。伊達一提督の鎮守府では野菜を育てているというのだ。これがまたおいしいと評判だという。しかし、あと1人たりない……。いったい誰が行くのだろうか……。鈴鹿は気になつて聞いてみた。

「高雄さん、あと1人は誰ですか？」

「それはこの子よ。入っただい。」

そこへ入ってきたのは、新人の蒼龍（そうりゆう）だった。

「二航戦（にこうせん）の蒼龍です、よろしくお願いします。」

5人は挨拶をして、さっそく出発をした。このため3時間目以降の授業なしになった。この鎮守府には2人の正規空母がいたが、この蒼龍が加わったことで、3人になった。島雪と鈴鹿はこの鎮守府の戦力が再び増強されたと感じていた。島雪と文月は、鳳翔さんの作った料理が最高だったとみんなに話した。そして今夜、その鳳翔さんが、みんなに手料理をふるまうことになったのだ。2人はたのしみに行っていた。

「そうだったんだあ、ぼくも食べたいなあ」

「でしょ！涼風も食べたくなってきたよ。」

「それは私も楽しみだ。」

「ふーん、あとで挨拶しなくっちゃね。」

島雪がテレビを付けると、輸入野菜を積んだ商船が次々と襲われ、輸入ものの野菜が高騰しているというニュースを聞いた。

「あ、このニュース！」

「知ってるんですか？蒼龍さん」

「ええ、知ってるわ。幸い死者はでてないようだけど。」

それを見た蒼龍は驚いた。実は蒼龍は提督からこの事件のことを聞いていたのだ。郡津提督の鎮守府でも、このニュースのことは伝わっており、司令部から厳重に警戒するように厳命されていたのだ。伊達一提督のところについた一行は、用意されていた野

菜を護衛艦からくわに積む作業中、休むことになった。からくわは、唐桑半島にちなん  
でつけられた名前である。郡津提督所属の護衛艦である。島雪は、鈴鹿に鳳翔さんのこ  
とを話したが……。

「ああ、冷蔵庫とかパソコンとかテレビとか電器屋さんで買ったらただで直してくれる  
もの?」

「それは保証!」

・・・鈴鹿のぢやれで島雪は思わず突っ込んだ。しかし、鳳翔さんは軽空母である。  
腕前はどんなものか、そして正規空母の蒼龍さんの腕前も気になるし、5人は気になる、  
一度見てみたいと思っていた。そのころ、闇の鎮守府では、開発した軽巡が野菜強奪に  
成功してるといふ連絡を聞きつけ、提督が大喜びしていた。

「わははははは、どうだ今回の軽巡黒風の威力は!」

「今回は提督の意欲作ですからね!」

「いや、私のはいつだって意欲作だよ!」

「・・・ほんとかしら?」

秘書艦は半信半疑だった。それに、鎮守府の提督が食べ物の強奪をしていいのかと疑  
問を感じていた。一方、島雪たちは、宿毛湾に到着していた。さっそく野菜積み込みの  
作業に入っていた。



「島雪と鈴鹿はいてるか？」

「はい。あたしたちに何か？」

「この前はこの泊地を救つてくれて本当にありがとう、俺からも礼を言わせてもらおうよ。最近野菜が狙われてるといふニューースが入つてるのは知つてるな。」

「はい。私もそのことはニューースで知りました。また被害があつたそうで。」

「ぼくはおそらく、この前この泊地を襲つてきた敵と同じじゃないかと思ひます。」  
「俺もそうじゃないかと考えてる。同一犯だろう。警戒を嚴重にしなければな。」

そこへ、その様子を見ていた軽巡黒風と、駆逐艦6隻（イ級、ロ級、ハ級3隻ずつ）、輸送ワ級型3隻が様子を見ていた。

「いま荷物を積み下ろし中です。船に野菜を積み込むための作業をしています。」

「よし！作戦開始だ！」

「了解！」

港に威嚇射撃を開始、そして襲撃を開始した。その知らせは畑にいる3人にも伝えられた。

「大変です！提督！」

「どうした？桃桜？」

「積み込み作業中の護衛艦が何者かに襲われています。おそらくこの前の敵かと」

「やはり来たか。頼めるか？俺も出る。郡津提督にも応援要請を出すから。」

「わかりました。いこう、鈴鹿ちゃん。」

「うん。」

島雪と二人は急いで現場へ駆けつけた。港では、涼風、響、文月、伊達一提督所属の艦娘の妙高と鬼怒たちも応戦していた。

「こいつらか、野菜を強奪してるって連中は。」

「そうみたいね。おそらくこの連中ね。」

そして、駆逐八級と口級が護衛艦のほうへ襲おうとした。

「しまった！護衛艦のほうに！」

そのとき、島雪と鈴鹿の連装砲が炸裂、襲ってきた駆逐艦を撃破した。

「お待たせ！」

「よかった。間一髪だったぜ。」

島雪と鈴鹿は黒風に奪った野菜のありかを聞き出そうとした。しかし、黒風は教えようとしなかった。

「私を倒したら教えてやる。」

「倒す？筆筒（たんす）みたいに前か後ろに倒すの？」

「は？何言ってるんだ!?!そういう意味じゃない！」

「仕方ないな、行くか！」

「おう！」

戦闘が開始された。涼風と文月は、力を合わせて駆逐イ級型を2隻撃破、そして響も妙高（伊達一）と一緒に口級型とハ級型を撃破した。輸送ワ級も機銃で攻撃を開始した。本来なら武装がない輸送ワ級型なのだが、少内提督はワ級に機銃を取り付けた改良型を開発していたのだ。だが島雪と鈴鹿、鬼怒（伊達一）は連装砲で撃破した。さらに蒼龍は艦載機で残りの駆逐艦を撃破した。

「やっぱり正規空母はすごいね。」

「そりゃそうよ、あたしは二航戦よ。」

「ラジコン飛行機飛ばすの天才だね！」

「ラジコンじゃないわよ！」

「やるな。では今度は私の番だ！」

黒風は無数のミサイルを艦娘たちに浴びせた。その攻撃で妙高（伊達一）、響は小破、文月と涼風は中破してしまった。

「これはきついな。」

島雪と鈴鹿は自動小銃で、蒼龍は機銃でミサイルを次々と撃ち落としつつあった。

「いつまでもこのミサイル攻撃を防げると思うな！増援も呼んだからな！」

「こりやますますきつくなりそうだ！」

ミサイル攻撃は絶え間なかった。一方、青葉は木津を誘ってスクープ探しに行っていた。

「このあたりの島に盗まれた野菜があつたらすごいことになるかも。」

「どうかなあ。ん？青葉さんあれ！あの島！」

「あ、あれは深海棲艦？あれは盗まれた野菜？」

なんと、宿毛湾泊地の付近の島に盗まれた野菜が積み込まれていたのだ。すぐさま青葉は鎮守府に連絡した。まさかこの島に盗まれた野菜があつたとは。一方、島雪たちは黒風に苦戦していた。すでに増援も到着していた。涼風と文月、響は大破、妙高（伊達一）と鬼怒（伊達一）は中破、島雪と鈴鹿は小破していた。無傷は蒼龍だけだった。

「さあーて、とどめの総攻撃と行くか。」

その時、後ろから多くの艦載機が増援の駆逐艦すべてを撃破、黒風も中破した。

「な、何だ？」

そこに、助けに来た鳳翔、隼鷹、加賀、白雪、白露、龍田が助けに来た。

「ほ、鳳翔さん。」

「本当だ。」

「みんな、助けに来ましたよ。私だって空母ですから。」

「あらあら、みんなけがしちやつて。あとで治してあげるね。そうそう、盗まれた野菜はこの付近の島にあつたわよ。いま積み込み作業中よ。」

それを知った黒風は最後の力を振り絞り島雪たちに最後の攻撃をしようとしたが島雪と鈴鹿の魚雷攻撃を受け、黒風は撃破された。

「おのれえー！まさか簡単に隠し場所が発見されるとは！野菜高くなったら売りたかつたのになあ！」

少内提督は頭を抱えて悔しがっていた。そして、野菜の積み込み作業を終えて、島雪たちは帰路についた。伊達一提督と桃桜、鬼怒（伊達一）、妙高（伊達一）はそれを見送っていた。

「妙高、鬼怒、よくやった。」

「ありがとうございます。」

「あの子たち、さすがですね。」

「さすがは郡津提督の見込んだことはありますね。」

「ああ。だが、戦いはこれからだ。」

護衛艦からくわに乗り込んでいる島雪たちは、だれが野菜の隠し場所になっている島を発見したか龍田に聞いてみた。それが青葉、木津だと知った。

「青葉さんのお手柄か。やるじゃない。」

「木津ちゃんたちのおかげでもあるけどね。」

「さあ、鳳翔さんの手料理が楽しみだ！」

そして数日後、文月、響、涼風の傷も治り、食堂で楽しみにしていた鳳翔さんの手料理が出た。茄子の揚げびたしだ。

「ナスは苦手なのですう！」

「ちよつと電（いなづま）！好き嫌いはだめじゃないの！」

それを見て、みんな大爆笑した。

「島雪、本当においしいね。」

「うん、本当においしいわね！」

「そうだね。野菜の値段も元に戻ったし、一件落着だね！」

島雪と文月と雷（いかづち）は美味しそうに食べていた。

## 扶桑さんと山城さんのお花見

島雪は自室でアクション映画とアニメを見ていた。近くのレンタルビデオ店で借りてきたのである。

「あーおもしろかった。」

この鎮守府の近くにはレンタルビデオ店があり、品数も豊富である。洋画からアニメ、ドラマ、時代劇、バラエティーまで、もちろんcdも充実しているのだ。艦娘の多くもこのレンタルビデオ店を利用しているのだ。主に那珂はアイドルが出ているバラエティー番組を、天龍は時代劇を借りてみている。まあ、借りるジャンルは艦娘によってはまちまちだが。そんなとき、外では扶桑がスマホを見ながら占いをしていた。そして、ふと空を見ていた。

「ああ、今日はこんな天気がいいのに」

木津はそれを見ていた。過去に何があつたのではないかと。それを木曾に聞いては見たが、彼女にもそれがわからなかった。翌日、鎮守府の石油施設で鈴鹿、奈半利、高雄、加賀、そして扶桑姉妹が戦艦ル級たちと戦っていた。しかし、山城は戦闘中にもかかわらずぼーっとしていた。

「あたしは本当に不幸なのかしら？」

と、呟（つぶやき）き、ため息をついた。そこへ

「山城さん危ない！」

と、奈半利が声をかけたが、山城が気が付いた時には戦艦ル級から発射された砲弾が山城に命中、山城は中破してしまった。

「よくも山城をこんな目にあわせてくれましたね！覚悟なさい！」

怒った扶桑は戦艦ル級を攻撃、続いて鈴鹿や奈半利、高雄と加賀が攻撃、戦艦ル級たちは全部撃破された。

「大丈夫？山城。」

「ええ、なんとか。」

「早く鎮守府へ運ぼう高雄さん。」

「そうね。」

扶桑たちは山城を鎮守府の病院へ運ぶべく帰って行った。そのころ、闇の鎮守府では、提督が占いをしていた。が、それをやって思いついた。今回送り込む敵は重巡洋艦にしようとしたのだ。闇の提督は秘書艦に重巡洋艦の建造を命じた。これまでは駆逐艦、軽巡洋艦の建造しかやらなかったのだが、今回初めて重巡洋艦に着手した。

「提督、なぜ重巡洋艦を？」



「ふふふ、試したくなったのさ。なんとなくな。」

「提督、ひよつとして提督も占い好きですか？」

「ん？あ、こ、これは、なんでもない……。」

闇の提督は慌てて占いの本を隠した。そのころ、鎮守府では島雪たち6人が、山城と扶桑を元気づけようと、どこがいいかと話し合いをしていた。島雪は同人誌即売会はどうかと提案したが……。

「それは島雪ちゃんと秋雲ちゃんがよろこびそうなことじゃん！」

と、木津は反対した。ならばお花見はどうかと奈半利は提案した。

「おおう、いいねえ！ちようどもうすぐ桜が咲くころだし。」

「それならば、坂本さんたちも誘っちゃおうよ！」

「そうだよ、にぎやかにやるのはいいことだし、たのしそうじゃん！」

「んじゃ、決まりね！提督に提案してくる！」

提督室では郡津と金剛が今度やるお花見について話し合っていた。今回のお花見は盛大にやろうと考えていた。

「へーい提督、今年の花見は盛大にやろうと思つてまーす。仮装大会とかもやりたいデース。」

「そうね、このときばかりは賑やかにやりましょう！」

そこへ奈半利がやってきた。コンコン!

「どうぞ」

「あの、提督、お花見のことですが・・・」

「あら、ちょうどよかった。わたしたちもお花見考えていたところよ。奇遇ね。」

「それでなんです、ウイッチーズ基地の人たちも・・・」

「わかつてるわよ。それも予定にはいつてるわよ!」

「やったあ!これは、山城さんたちを元気づけようと・・・」

「わかつてるわよ。あの子たちを元気づけるためにもお花見を開催します!」

そして、島雪たちは準備をすべく、近くのシヨップینگセンターにいつて、お花見に向け買い物した。ある者は漫才の練習、またある者は合唱、またある者はダンスの練習と余念がなかった。そして島雪はというと・・・

「じゃーん!ついに完成よ!」

「うわあー!やったじゃん!!」

なんと島雪たちは、コスプレを披露することになった。いっぽう扶桑はというと、病室で山城と一緒に桜を見ていた。今度お花見があると知って、楽しみにしていた。山城も楽しみにしていた。

「山城、具合は?」

「とてもよくなりましたわ。ご心配をおかけしました。」  
「いいのよ。無事でなによりよ。」

そこへ島雪と鈴鹿が見舞いに現れた。島雪たちは今度やるお花見について話した。もちろん、2人は楽しみにしていた。あとはお天気だ。晴れたらいいなとみんなは思うばかりだった。そして、翌日。見事に日本晴れだ。司会は提督進行でお花見大会が始まった。そこには芳佳、サーニヤ、シャーリー、ルッキニー、ペリーヌ、ミーナ、リネツトの姿もあつた。しかし・・・、坂本少佐の姿がなかつた。

「芳佳ちゃん、坂本さんは？」

「お仕事だからいけないって。」

「残念だなあ。あたしのコスプレ見せたかったのに・・・。」

龍驤（りゆうじょう）と黒潮の漫才、金剛4姉妹の歌とダンスと余興は続いた。続いては・・・。

「さあ、島雪ちゃんと秋雲ちゃんのコスプレ披露だよ。」

「なんでも時雨と皐月もでるんだって。」

「それだけじゃないわ。那珂さんも出るんだって。」

「へえー。楽しみだ。」

そして、島雪たち5人が登場した。時雨は北上のコスプレ、皐月は秋雲のコスプレ、秋

雲は皐月のコスプレ、島雪は榛名のコスプレ、那珂に至っては赤城のコスプレで登場した。榛名は思わずジューズを霧吹きみたいに噴き出した。

「まあ、島雪ったら、あたしの格好で。」

一方、金剛たちには大うけだった。

「オー島雪、とてもお似合いでーす!」

「島雪、気合い、入ってますね!」

「あの子本当にコスプレ好きなんですね。」

それを見て榛名は思った。

「まあ、別にいいけどね。似合ってるわ。あとで一緒にたのしくやろっと。」

時雨のコスプレを見た北上は

「大井つちがいたら楽しかっただろうなあ。早く会いたいなあ。」

とつぶやいた。赤城は思わずむせかえってしまった。

「な、何よあれは!?ゴホッゴホッ!!」

とビックリ仰天!しかし

「ふふふふ、とつても似合ってるわ、那珂は。」

加賀には受けていた。それを見た最上と比叡は

「よおーし!ぼくも飛び入りで参加していい?」

「いいよー！」

「よし！この比叡も参加します！」

許可をもらおうと早速着替えてきた。最上は日向、そして比叡に至っては芳佳のコスプレで登場した。日向と芳佳は思わず飲みかけのチューハイとジュースを思わず吹いてしまった。お花見会場は思わずお花見から仮装大会か物まね大会のような盛り上がりとなった。

「も、最上め、私の同じ衣装持ってたのか。」

「いいじゃないの。次回のあの子たちのコスプレ楽しみね」

「んもう比叡さんったらあー！」

「いいじゃない、比叡さんもたのしみたいんだし。」

そこへ、榛名のコスプレをした島雪がやってきた。島雪という艦娘になった靖子は、この世界にきてても、艦娘になっても、コスプレが楽しめることに喜びを感じていた。

「坂本さん、どうしてるかなあ？お仕事かなあ？」

「だと思えますわ。」

「坂本さんも一杯やってたりして。」

「まさか。」

島雪とリネットは冗談半分で坂本少佐のことを話していたが……。そのウィッチー

ズ基地でも桜が咲いて、坂本少佐たちは宴たけなわだった。

「あはははは！宮藤たちも楽しくやってるが、こつちも楽しくやってるぞ！」  
「私たちは私たちが楽しくやりましょう！」

そう、坂本さんたちは、残ったメンバーでお花見を楽しんでいた。日本酒、焼き鳥、珍味、スルメイカ、おいしい重箱に舌鼓だった。一方、闇の鎮守府でも……。

「提督、重巡黒桜完成しました……あら！」

秘書艦が見たら、なんと、提督たちもお花見で酒盛りをやっていたのだった。いらついた秘書艦は深海棲艦たちに連絡をとったのだが……。

「わはははは、今日はお花見日和（びより）だね！」

「今日はパーとやろうよ！」

「さんせいーい！」

深海棲艦たちまでもがお花見でわいわいやっていた。

「あいつら、高いバイト代払ってるのに。」

「おーい、君もどうだい？一杯やるか？」

「……あ、はーい。（仕方ない、今日は私もパーとやるか！）」

結局、出撃は延期とあいなった。鎮守府付近では、こうして、楽しい時間は過ぎていった。鎮守府では山城と扶桑は、みんなとたのしくやって、幸せをかみしめていた。

「お姉さま、またこうして楽しくにぎやかにやりたいですね。」  
「ほんと、今日はたのしかったわね。」

島雪は金剛たちと、秋雲と皐月は長月たちと、時雨と北上は村雨たちと、那珂は赤城たちと川内たちと、最上は伊勢たちと、さらに比叡は芳佳たちと、鎮守府のみんなは提督たちと一緒に楽しい時間を過ごした。

## 漣（さざなみ）がやってきた（再掲載）

曙（あけぼの）には、同じ制服の子が2人居る。それは潮（うしお）、朧（おぼろ）である。しかし、彼女たちには同じ制服の子がもう1人いる。それは漣（さざなみ）である。翌日、奈半利たちのクラスにやってくるようになったのだ。妙高からそのことを聞いた曙たちは喜んだ。

「早く会いたいなあ。」

「そうだね、ほかの鎮守府じゃもういてるって話だし。」

「明日が楽しみだなあ」

奈半利たちはもちろん、島雪たちも知らなかった。いや、少なくとも島雪と鈴鹿はおそらくは知ってはいたが。放課後、6人は伊良湖のお店でデザートを食べていた。彼女たちにとつてここは憩いの場である。もちろん、提督やほかの艦娘も利用する。

「へえー、曙ちゃんにはほかにもう1人同じ制服の子がいたんだあ。」

「ぼく知ってるよ。っていうか、艦これの演習でみたことあるよ。」

「やっぱり、この世界はあたしたちの知らないことがまだあるのかな？」

「それは言えてるぜ。」



「でもあの服着てる子、秋雲ちゃんだけなのかなあ。あの制服は。」  
「もしほかにもいてたら見てみたいなあ。」

確かに、例外はあるでしょうが、同じ級の駆逐艦などは、同じ服装になっていることがあるのだ。島雪も、駆逐艦潮風のときは同じ型のクラスの制服なのだ。しかし、春日は縞模様の長い靴下を着用したりと、ほかの5人も同じく、好きな靴下やりボン、下着などは各々（おのおの）好きなものを着用している。

「ねえ、もしここで大食い大会があったら参加する？」

「まさか、赤城さんが圧勝で終わっちゃうと思うけど？」

島雪と鈴鹿はもし大食い大会がどうなるか話した。そのころ、闇の鎮守府では、前日お花見で出撃をすっぱかし、秘書艦に大目玉を食らっている提督の姿があった。重巡が完成していたにも関わらず、お花見をしていたのだから。提督はただただ平謝りであった。

「まったく！なに考えてるんですか！」

「だって、お花見したかったんですよ。」

「提督ならもつと自覚をもってください！で、次の艦娘の用意は？」

「それなんだが、今回は駆逐艦で行こうと思う。しかも人型、ちゃんとしやべぞ。」

すっかり秘書艦にしぼられしよんぼりする闇の提督であった。翌日、漣がクラスに来

た。全員海軍式の敬礼で挨拶した。奈半利たちも敬礼はしたが……。やっぱり間違えて陸軍式の敬礼をしてしまった。もちろん、妙高に無理矢理敬礼をなおされてしまった。まあ、何はともあれこれで郡津提督の鎮守府では、曙、潮、隴、漣の4人がそろったことになる。曙たちは大喜びであった。放課後、伊良湖のお店では4人そろったことを祝して曙たちが歓迎会をやっていた。

「かんぱーい！」

曙たちは漣がきてくれたことに大喜びだった。

「ねえ、あの子たちのことを紹介しなくていいの？」

「あ、そうね。」

むろん、島雪たちのことであつた。

「この6人が別の世界から来た駆逐艦たちよ。ほら、あんたたちもちゃんと自己紹介して！」

曙に言われるがままに、6人は挨拶をした。駆逐艦といつても、授業を受けている間や、その他命令があつたときだけだが。島雪たちは、まだ姿を見せていない軽巡や駆逐艦もあるのではと考えていた。そのとき、鈴鹿は

「漣ちゃん、ぼくたちの装備見せてあげる！島雪ちゃん、長門さんに演習場使っているか聞いてみたよ。そしたら使っていないって！」

島雪は、長門から許可をもらい、さつそくその武装を披露することとなった。なお、この時は全員駆逐艦のままだった。島雪（黒潮）は手持ちの自動小銃や連装砲などで腕前を披露した。

「すごいですね！」

「この子たちは本当は軽巡なのよ。」

そう、島雪たちは軽巡なのだ。

「そうだよ、曙ちゃん言う通りよ。軽巡だろうが駆逐艦だろうが刀とか魚雷とかつかえるよー！」

「それじゃ、あたしたちのほんとうの軽巡の姿、見せてあげますかー！」

笛吹の提案で、全員は軽巡に戻った。いちいち着替えないといけないのだから仕方がない。だってそのままだとわからなくなるから。

「おまたせえー！」

6人全員はそれぞれ着替え終えた。早速腕前を披露しようとしていたその時……。「大変です！敵が南西諸島沖に現れました！緊急出動デース！」

金剛からの緊急出動要請が下った。妙高が出動するメンバーを言った。

「旗艦は古鷹（ふるたか）、ほかに島雪、菊月、龍驤（りゅうじょう）、木津、漣で行きます。今、漁船6隻が追われています。今のところ沈められた船はありませんが急いでく

「ださいー！」

「わかりました。よし、行くか！」

出撃カタパルトで6人全員スタンバイしていた。島雪はサイボーグ形態に変身した。それを見て漣は驚いた。

「島雪さん、あなたは一体!?!」

「お話は後だよ。助けを待ってる人達がいるから。」

「はいー！」

南西諸島沖では、その駆逐艦たちが大暴れして、漁船を追い回していた。駆逐艦・黒月である。闇の提督がすでに完成させていた。黒月は連装砲を漁船1隻に向けていた。

「がはははは、沈んでもらうぞー！」

その時、島雪の自動小銃にセットしたグレネードランチャーが黒月の連装砲にターゲットロック！破壊した。

「ん!?!来たな。」

古鷹は漁船たちにすぐ避難するように指示、木津と菊月は漁船の護衛のために海域を後にした。さらに島雪はさらなる増援を本部に要請した。あと数分で来るという。

「今までに見たことがない駆逐艦、しかも言葉もしゃべるなんて。ほかに人型駆逐艦2隻、イ級1隻、ロ級2隻か。」

島雪はこれまでにない駆逐艦だと判断した。なぜならデータベースにもない駆逐艦だったからだ。それを見ていた漣はこれが軽巡洋艦・島雪なのかと感心していた。

「さあ、攻撃開始や！みんないくでえー！」

「こら龍驤！それ私というのよ！人のセリフ取るな！」

古鷹に怒られた龍驤の一声で攻撃開始！古鷹は連装砲で人型駆逐艦2隻を次々と中破させ、島雪は頭部バルカンと刀でとどめを刺した。龍驤の戦闘機は残りの駆逐艦3隻を攻撃、次々と撃破した。うち1隻は大破したが、漣が連装砲でとどめをさした。

「ふ、やるな。だが、私をこれまでの駆逐艦といつよにしないことだ」

「これまででつて、あ、お給料もらってるつてこと？」

「あり……。違うわい！私を甘く見るとんでもないことになるぞつてことだよ！」

そう、この黒月には、連装砲、魚雷以外にガトリング砲が装備されているのだ。

「このバルカン砲で沈めてくれるわ！」

すさまじいガトリング砲の攻撃に島雪たちは防戦一方だった。今までの敵の艦とは一味違うとはまさにこのことであつた。

「よし、あれを使うか！」

島雪は何かを取り出した。そして、ライターで火をつけて黒月のほうに投げつけた。そして大きく鳴り響いた。漣たちはびっくり！しかし、相手には効果がなかった。

「爆竹鳴らしたけどだめだった？」

「こんなんでも倒せるわけないでしょ！」

古鷹は島雪にどなった。そうしてる間にもガトリング砲の波状攻撃が続いた。この攻撃で龍驤は「中破」した。古鷹も「小破」した。

「あかん、艦載機飛ばされへん。」

「そろそろとどめと行くか。」

そのとき、6発のミサイルが黒月めがけて攻撃、ガトリング砲を破壊した。続いて赤城が放った戦闘機が黒月を攻撃した。

「ぎゃあー！」

黒月は「大破」した。

「間に合った。よかった。」

そう、木津と菊月は、応援の笛吹、赤城、川内（せんだい）、敷波、夕立、白雪をつれてきたのだ。

「よっしゃー！とどめといきますか！」

川内の一声で一斉攻撃、黒月は撃破された。しかし敵も、どんどん新兵器をくりだしてくると予想される。12人はそう感じ、帰路に就いた。川内は島雪と会話していた。

「あんたね、爆竹で倒せると思ったの？」

「いや、向こうが派手にならしてたから。」

「感謝しなさいよ。笛吹がミサイルで助けてくれたんだから。」

そう、先ほどのミサイル攻撃は笛吹がミサイルランチャーで飛ばしたものだ。島雪はお礼を言った。同時にガトリングで爆竹にかなうわけがないと川内にどやされたのだ。こうして12人は、全員無事に帰ってきた。川内と古鷹は、新しい武器を装備した重巡のことを郡津提督に報告した。

「そう、わかったわ。ゆっくり休んでね。」

「提督……。」

「わかってるわ榛名、もうすぐ、例の新型重巡と、軽空母を使うときがきたようね。」

闇の鎮守府では提督が報告を聞いて悔しがっていた。

「おのれえー！あいつらめえ！次こそは！」

「提督、資材のほうは？」

「心配するな！ちゃんとたくさんある！」

「……はい。（資材はもう5000くらいしかないのに。）」

そう、闇の鎮守府ではたつぷりあった資材が5000くらいしかのこってなかったの。一方、郡津提督鎮守府では、島雪たちが、自分たちの装備、技、機能などを説明していた。それを見て漣は関心していた。

「へえー、すごいなあ。そんなのついてるんだ。」

「そうだよ、すごいでしょ。」

「次にあたたたたちの世界のこと聞かせて。」

島雪たちが話そうとすると・・・。

「ぜひ聞かせてください！」

突然青葉が顔を出し、みんなは驚いた。

「あ、青葉さん・・・。」

「島雪さん、ぜひ聞かせてください！」

青葉は島雪をおいかけまわした。

「いやあー！助けてー！」

それを見て、みんなは笑った。



## 青葉、鎮守府新聞作ります！

重巡洋艦・青葉は、取材という言葉が口癖である。出撃するときも、無意識に「取材」という言葉を口に出してしまう癖がある。そんな彼女の鎮守府での役割は、鎮守府で発行する新聞をつくることである。いろんな情報を仕入れたり、見たり聞いたことを記事にしたり、取材したりと、大忙しである。とくに、ほかの鎮守府では前例がない異世界からきた艦娘のいるこの郡津提督の鎮守府なら、ネタは尽きない。なぜなら、異世界のことを聞けるからだ。もともと、ほかの艦娘たちもそうである。

この日も、島雪たちは元の世界から帰ってきた。もちろん、学校の授業を受けないといけないし、いろいろとやらなければいけないことがあるからだ。

「あ、お帰りなさい島雪さん。どうでしたか？今回の里帰りは？」

「うん、楽しかったよ。あとでたつぷり聞かせてあげるから。」

「お願いします。」

毎回、みんなは彼女が作る鎮守府新聞を楽しみにしている。平均月に1度のペースで発行しているが、どれくらいおきに発行するかは彼女の気まぐれである。ときには連日ってこともあるのだ。

「青葉さん、次回の新聞楽しみにしてるわよ。」

「任せておいて!」

鈴鹿の部屋では、郡津提督から新しい重巡洋艦がやってくるという話で持ち切りだった。島雪と奈半利たちがそこに来ていた。

「新しい重巡?」

「うん、大淀さんから聞いたんだけど、なんでもこの鎮守府に来るって話だよ。」

「いったい誰なんだろう?新しい艦娘さん?」

「いや、ヒントはあなたたちのお友達だつて」

2人は、詳しくは聞かされてはいなかったが、島雪たちはまだこの鎮守府にきてないのぞみたちのことを思い出した。早くこの鎮守府に来てくれないかと楽しみにしていた。同時に元気でやっているのかも気になっていた。島雪たち(靖子たち)の友達であるのぞみは、声優になるために専門の学校に通っている。ちょうど母親から、学校を休学するようにいわれた。

「き、休学!?なんで?」

「もちろん、任意の日に学校へ授業へでもいいという条件よ。靖子ちゃんのおじいちゃんがかうまいこと取りなしてくれたのよ。」

のぞみにとっては、寝耳に水のことだった。さらにのぞみは、母親からリンディ提督

の手紙も受け取り、部屋で読んだ。

「……そうだったんだあ。あの子時々いなくなってる理由はこのことだったのか。しかもリンディ提督がああいつてるなら、うかうかしてられないわ。なぜ休学の手続きしてたかわかったわ。こうしちやいられない！準備しなきゃ。」

のぞみは、艦これの世界へ行く準備をした。手紙には、艦これの世界のデータが入ったフラッシュメモリーも同封されていたのだ。準備を終えたのぞみは、母親に

「いつてくるね。ママ。」

「……気を付けて帰ってきてね。」

そして、のぞみは近くの公園で変身を済ませ、背中の飛行ユニットで空を飛んでいた。間もなく海に差し掛かった。空間ディスプレイでワープする位置を確認したのぞみは

「……ね、よし、では！」

艦これの世界へワープした。ワープを済ませたのぞみは、あたりを見回した。そして、空間ディスプレイで地図を確認した。

「……かあ。艦これの世界ってのは。あとは鎮守府つてところを探すだけね。」

そのとき、通信が入った。ルッキニーニからである。

「やつほー、のぞみ元気？ウィッチーズ基地によつてかない？」

「いいの？OK！」

のぞみは、ウィッチーズ基地に向かった。そこへみんなに挨拶にいくためだった。しかし、その様子を偵察に来ていた闇の鎮守府の駆逐口級と軽空母は見逃さなかった。そこには重巡紅波もいた。重巡紅波は闇の提督にそのことを連絡した。そのころ提督は、カツプラーメンを食べていた。

「うーん、限定もののカツプ麺はうまいなあー。」

紅波は何度も連絡したが、提督は気づかなかった。

「提督ー！」

それでも・・・。

「うんー！これは最高にうまい！」

ついに頭にきた紅波は思いつきり叫んだ。

「提督うー！」

「うわあー！」

ビックリした提督は、限定もののカツプ麺をひっくり返してしまった。

「あーあ、せっかくのカツプ麺が・・・。」

「提督、見たこともない飛行物体がいます。」

「う、うむ、そのまま見張つていてくれ。」

「はい。」

通信を終えた提督だったが、床にこぼしてしまった限定もののカップ麺をみて、残念そうに見つめていた。

「う、う、ウォーマイガット!」

と、思わず叫んでしまった。一方、青葉は、スクープをゲットすべく動き出した。

「よおーし!とっておきのスクープゲットするぞおー!」

島雪の部屋では、島雪と秋雲がなにやらお話をしていた。今度の同人誌即売会のお話しである。

「ねえー島雪、今度蒼龍さんのコスプレして?」

「あ、構わないけど?できたら飛龍でもいいかな?」

「うん、いいよ。」

その時、テーブルの下から青葉がひょっこり顔を出した。

「あの、次回の島雪さんたちのコスプレ見れるのはどこですか?どんなキャラを予定していますか?」

「うわあー!」

「それと島雪さん、あなた正規空母にもなりたいんですか?」

2人はビックリ仰天!続いてお風呂場では、お湯が入っている湯船に木津が天龍と木曾、加古と摩耶に自分の母親のことを話していた。

「んでさー、うちのお母さん、いわゆるヤンママだぜ。」

「へえー、お前の母ちゃんがかあ。今度写真見せてくれよ。」

「いいぜー!」

そのとき、ブクブクと泡が出てきたと思つたら青葉が出てきた!

「あのおー、木津さん、あなたのお母さまのことについてさらにお話聞かせてくださいー!」

「ひえー!」

5人はいきなりでてきた青葉に驚いた。そこへ比叡さんがきた。

「あれ?だれか私呼びましたか?」

呼んでませんって!比叡さん。さらに村雨のお部屋では鈴鹿が白露たちと会話していた。鈴鹿は白露と同じ服装をしていた。

「こうしていると時雨ちゃんたちとぼく姉妹みたいだね。同じ白露型みたいだね。」

「うん、本当に姉妹って感じだね。」

「あたし、鈴鹿を本当に白露型の仲間に入れよつかかな?」

白露が冗談交じりで言うとき雨の押し入れに隠れていた青葉が突然でてきた。

「あの一白露さん、鈴鹿さんを正式に白露型の仲間入りを認めるってほんとうですか?」  
「待つてよ青葉さん!あれは白露ちゃんが言ったのはほんの冗談だよ!」

「そうよ冗談よ！」

鈴鹿と白露は否定した。青葉の強引な取材は鎮守府のみんなから顰蹙（ひんしゆく）を買った。しまいには郡津提督から大目玉を食らった。

「青葉さん！鎮守府新聞をつくるのに熱心なのはいいけど、もつとちゃんとした取材をしなさい！駆逐艦の子たちや軽巡、重巡の子たちからも苦情がきてますよ！みんなの迷惑を考えてください！」

「はい、申し訳ございません・・・。」

郡津提督から散々怒られた青葉は、鎮守府の周辺ならいいネタがあるのではと思ひ、準備を整え、カタパルトに向かった。

「重巡洋艦、青葉、抜錨（ぼつびよう）！」

一人でスクープを求め、出撃していった。しかし、重巡紅波はそれを見逃さなかった。闇の提督に青葉を攻撃することを伝えた。

「よし、わかった。駆逐4隻、軽巡1隻をそちらに送る。それまで待っている。」

「了解しました。」

そのころ、鎮守府では、青葉がいないことに気が付いた。衣笠が青葉とお買い物に行こうとしたが、どこをさがしてもいなくなったのだ。それを聞いた郡津提督は艦娘たちと一緒に鎮守府中を探していた。そこへ大淀が飛んできた。

「提督、大変です!青葉さん勝手に1人で出撃しました!映像も残ってます。」

「何ですって?急いで出撃しなくちゃ。島雪さん、蒼龍さん、祥鳳さん、奈半利さん、菊月さん、伊勢さん、お願いします!あとで応援を出しますから。」

6人は青葉を助けるべく、救助に向かった。そのころ、青葉はウィッツチーズ基地に向かっていた。いいネタはないか探すためだった。しかし、重巡紅波たちの攻撃を受けた。

「な、なによ一体!見たこともない重巡?」

「ふふふ、私は闇の鎮守府の重巡紅波だ。闇の提督からお前を攻撃しろとの命令だ。覚悟しろ。」

「闇の提督?闇の鎮守府?誰それ?それに闇の鎮守府って何なの?」

「おっと、しゃべりすぎたか。覚悟!」

重巡紅波たちは青葉に集中攻撃を開始した。ちようどそのころ、その様子をウィッツチーズ基地から見ていたのぞみが見つけた。

「あれ?何なの?大変!芳香ちゃん、女の子が襲われてる!」

「本当だ!早く助けに行かなくっちゃ!坂本さん!」

「ああ、こつちでも確認した。宮藤、リネットと一緒にのぞみの援護に付け。」

「はい!」



そしてのでみ、芳香、リネットは青葉を助けるべく救援に向かった。一方、青葉は善戦したが、紅波たちの攻撃で中破してしまい、大破寸前まで追い詰められてしまった。

「……だ、だめ、もうここまでか。」

「さあ、ここまでだよ。秘密を知られたからには……」

そのとき、上空からのぞみ、芳香、リネットが機関銃や自動小銃で駆逐イ級型と二級型を中破させた。

「な、なに奴？」

「助けに来たよ！」

のぞみたちに助けられた青葉はほっとした。そして島雪たちが到着、伊勢と菊月、奈半利の砲撃で駆逐口級型と駆逐八級型は撃破された。

「まにあったね。あ、のんちゃん！」

「お久しぶり、靖子ちゃん！」

久しぶりの再会に喜ぶ島雪たちではあったが、戦いの途中である。

「ちよつとみんな！敵は残ってるのよ。感動の再会は後にして！」

「はい。」

突然、重巡紅波が連装砲を火をふかせた。おまけに軽巡へ級型も連装砲を装備しており、島雪たちはやや苦戦していた。

「ふはははは、どうだ！私の実力は！軽巡も単装砲じゃないんだよ！」

島雪たちはなんとか接近戦に持ち込みたかったが、波状攻撃で手も足もでなかった。その時、一発の連装砲から発射された砲弾が軽巡へ級型に直撃、撃破した。

「な、なに！」

「間に合ったようね。最上。」

「そうだね、三隈。」

そう、新たな重巡、三隈が仲間入りしたのだ。ほかに島風、多摩、白露、大淀も救援に駆けつけていた。

「島雪たち、力を合わせて頑張るにゃ！」

「よっしゃあ！ありがとう。」

「おのれ！こうなったらやぶれかぶれだ！」

紅波は攻撃を再開し、三隈たちを攻撃しようとしたが……。

「そうはいかないよ！」

のぞみのグレネードランチャーで連装砲が破壊された。さらに紅波は魚雷で攻撃しようとしたがそれかわされた。そして蒼龍と祥鳳の爆撃機、さらに島雪の刀で撃破された。残りの駆逐艦も大淀たちの攻撃で撃破された。そして、青葉は伊勢と最上に抱えられ、鎮守府への帰路についた。

「間に合つてよかつたね。衣笠さん心配してたよ。」

「ねえ、島雪さん、あのお空を飛んでる子、お友達？」

「うん、きつと一緒に戦うことになるよ。それより青葉さん、急いで手当しないと。」

「そうだね、迷惑かけてごめんね。」

青葉は泣きながらあやまつた。一方、青葉を倒し損ねた闇の提督は悔しがっていた。

「おのれえー！またしても！おまけにあいつ、おれの鎮守府のこといいやがつて！」

「提督、限定もののこのカップ麺、いけますね。」

「はい、これはさすがにうまいであります！」

秘書艦と部下たちが勝手に限定もののカップ麺を食べてしまい、もはや一つもなかった。

「うおー！泣きつ面にハチとはこのことかあー！」

鎮守府では、まだ傷は完治してはいないが元気になった青葉が新聞を配っていた。そこには新しく入った重巡三隈、のぞみのことが書いてあった。さらに、島雪たちのことも書いてあった。

「青葉さん、誤解を招くような記事かいてほしくないなあ。」

「けど面白い子ね、青葉つて。」

「・・・まあ、無事でよかつたけどね。大事な仲間だし。」

島雪とのぞみは2人で甘味処へいった。無事青葉を救出できて、ほっとする島雪だった。提督室では、青葉から話を聞いた郡津提督が金剛と大淀と陸奥、長門と一緒に闇の鎮守府と提督のことで話し合っていた。

「闇の鎮守府に闇の提督……ですか。」

「噂では聞いたことがあります。なんでも深海棲艦をつくることができるとか。」

「しかもオ리지ナルだからな。」

「リンディ提督にも報告しなきゃ。」

ようやく判明した敵の正体・闇の鎮守府、闇の提督、その正体とは？郡津提督たちはもうすこし調査することにした。

## 島雪と潜水艦の伊58と伊168

鎮守府では、新しい仲間に加え、最上型重巡洋艦の三隈が仲間入りしてますます賑やかになった。とくに最上は、三隈とあえて喜んでいた。そんな鎮守府でも潜水艦の艦娘はいた。といつても2人だけだった。ゴーヤと呼ばれる伊58、イムヤと呼ばれる伊168であった。島雪たちも、なかなかお会いできない潜水艦たちであった。郡津提督は、7人を案内することにした。

「潜水艦……、ですか？」

「そうよ。うちの鎮守府には2人いるのよ。」

「そーいやあたしたちがここにはいつてから1回もあつてない。朝礼のとき以外は。」

そー、島雪たちは朝礼以外はまだ1回もあつていなかったのだ。そして、のぞみの重巡の時の名前も未定ではあつたが、青葉型になることは決定していた。

「のんちゃん、あの闇の鎮守府のことは？」

「ああ、もうリンデイさんには報告しておいたよ。」

「はやっ！もう連絡したんや！」

島雪はのぞみの対応の早さに驚いた。のぞみの艦娘のときの服装は衣笠さんと同じ

タイプではあるが、少々仕様が異なっていた。郡津提督はあと2人重巡をお迎えの予定らしい。しかももう服装は決定済みとのこと。

「提督、あと2人重巡をお迎えということですが、誰がくるんですか？ボク気になります。」

「それは内緒よ。いづれわかるわ。」

7人は気になって仕方がなかった。そして、潜水艦がいるお部屋についた。

「着いたわ、ここよ。」

そこには、伊168、伊58の2人がいた。お部屋といっても、待機するための専用のお部屋だが。潜水艦たちは、ここで準備や着替えなどを済ませたり、待機したりしているのだ。ただし、入渠や手当、入浴や食事などはみんなと一緒に、お部屋も個室になっているのだ。もちろん、休日もそうだが。

「こんにちは、私は伊168、イムヤって呼んでいいわよ。」

「あたしは伊58、ゴーヤって呼んでね。野菜じゃないでち。」

7人もきちんと挨拶した。潜水艦の2人は、島雪たち7人を珍しそうに見つめていた。

「この鎮守府はいい所でち。ちゃんと休みもあるし。休憩ありの任務もあるし。ところで、提督からきいたけど、あなたたちはほかの世界からきたでちか？」

「そうよ。あたしたちは別の世界から来たのよ。ここでは艦娘としてここにいるの。」

のぞみは、そう伊58（以下ゴーヤ）にそう話した。そんな中、闇の鎮守府では、少内（すくない）提督と、別の闇の鎮守府の提督・賀千谷（がちや）提督が新しくできた潜水艦に乗っていた。潜水艦の名前はまだ決まっていなかった。

「提督、潜水艦の名前は？」

「そうだな・・・、よし！この船の名前はわかりません号にしよう！」

「ぶっ！」

賀千谷提督は思わず飲んでいた茶を嘔き出してしまった。即行である。今回は秘書艦はお留守番である。

「それで、今回はどんな奴を投入するんだ？少内提督。」

「駆逐艦闇火（やみび）を投入する。見た目は陽炎型にってるけどな。」

装備は単装砲、3連装魚雷、7ミリ機銃だが、もうひとつある装備も取り付けていた。郡津提督の鎮守府では、島雪たちが南西諸島沖へ行くところだった。行く人は軽巡島雪、駆逐艦は陽炎（かげろう）、与謝野（笛吹）、ゴーヤ、伊168（以下イムヤ）と行くことになった。さらに郡津提督から新人の艦娘の連絡が。

「初めまして、瑞鳳（ずいほう）です。よろしくお願いします。」

この6人で南西諸島沖に向かうことになった。この瑞鳳は、隼鷹や龍驤とおなじ軽空

母だ。6人そろったところで南西諸島沖に向かった。そこにはあの潜水艦わかりません号が海底にいた。

「少内提督のところは資材が不足していると聞いたが、よくこんなものつくる費用があつたな。」

「・・・ん、まあな。」

一方そのころ、島雪たちは新しく入ってきた瑞鳳と会話していた。

「瑞鳳さんも矢で飛行機を飛ばすんですか？加賀さんみたいに。」

「そうよ。あたしだってちゃんと飛行機飛ばせるんだから。」

島雪は気になっていたことを聞いた。

「瑞鳳さん、艦娘さんたちの飛行機プロペラでしょ？ジェット戦闘機は使わないんですか？」

「ん、まあ、本で見たことはあるけど、使ったことないわね。」

まあ、この人の言う通り、加賀さんや赤城さんとかはプロペラの戦闘機を使うらしい。ジェット戦闘機や戦闘ヘリを飛ばす艦娘はいないらしい。そのとき、ゴーヤとイムヤが4人を止めた。

「待って！この海底に潜水艦がいる！」

「な、何ですって!?調べてみる。」



与謝野（笛吹）は空間ディスプレイを出し、海底を調べてみた。すると、そこにはあのわかりません号が海底に潜んでいた。同時にわかりません号でも6人を乗っている乗組員が発見した。

「提督！あの艦娘たちが海上にいます！」

「どうやら見つかったようだな。よし！重巡り級たちを呼べ！」

そこへ重巡り級が襲いかかってきた。ほかに閩の鎮守府の軽巡閩火、駆逐イ級型2隻、ロ級型、ハ級型も来た。島雪たちも潜水艦たちと瑞鳳とともに戦闘態勢に入った。初めて重巡り級と対峙した・・・が、そのとき電話が鳴った。

「イムヤ！またあんたスマホ持ってきたの？」

「違うわよ！あたしのじゃないわよ！」

「じゃあ陽炎？」

陽炎もスマホをもっているが、もちろん違う。むろん島雪、与謝野（笛吹）、瑞鳳のものでもない。

「あ、あたしだ。もしもし。あ、はい、はい、はい、え！バーゲンセール！そのあとあのうまいスイーツのお店があるって！いいよ、一緒に行こう！ごめーん、あたし用事できちゃった。だからあとはよろしくね！じゃあね！」

重巡り級はそのまま去っていった。それをみた少内提督は

「あいつをバイトとして雇ったのが間違いだったか。また探さなければ。」

「それよりどうする?」

「決まっている! 攻撃開始だ! 闇火!」

闇火たちが攻撃を開始した。

「島雪、与謝野(笛吹)、瑞鳳さん、よく見てて、あたしたち潜水艦の実力を!」

駆逐艦たちが島雪たちめがけて単装砲や連装砲などで攻撃してきた。しかし、海底のゴーヤたちは駆逐イ級2隻にターゲットロック! 一人ずつ魚雷を発射し、2隻とも撃破した。瑞鳳も

「あたしも負けてられないわ!」

戦闘機を飛ばし、口級とハ級を撃破した。島雪たちはただただ驚くばかりだった。これなら正規空母の人達と組んでもいいと思った。

「ふ、なかなかやるな。だが、私はこれまでの作られたものとはわけが違う!」

島雪はピンときた。対潜水艦のための武器があるのではないかと! 急いで回線を開いた。しかし、その間にも攻撃は止むことはなかった。

「ゴーヤちゃんたち、よけて!」

「もう遅い!」

闇火は爆雷投射機を使用していた。そう、郡津提督の鎮守府でも採用していなかった

ものだ。ゴーヤたちは爆雷投射機の前では防戦一方だった。

「ああ！だめだあ！やられたでちい！」

ゴーヤが大破してしまった。イムヤも中破してしまいとうとう追い詰められてしまった。島雪たちもゴーヤたちをたすけようとするが、魚雷と連装砲のダブル攻撃の前には歯が立たなかつた。与謝野（笛吹）は、あの軽巡を潜水艦で倒せないかと思った。と、その時、どこからか魚雷が闇火に向かつてきて、中破させた。

「あの・・・、お待たせしました。伊13です・・・。」

新しい潜水艦伊13がやつと到着した。

「伊13!？」

「ヒトミと呼んでください。」

「あ、はい。あ、これだね！対艦ミサイル！」

ようやくディスプレイでそれを知った島雪は、少内提督の潜水艦をターゲットロツク。

「ようしー！」

対艦ミサイルを発射、ミサイルは提督の潜水艦に当たった。

「うわあ！被弾しました！」

「やむを得ん、この海域から直ちに離脱する!!」

すぐにわかりません号は海域から離脱した。

「よおーし！この陽炎と与謝野（笛吹）がとどめをさすわよ！」

「ok！」

「待つて！とどめは私たちがさすわ！」

潜水艦たちがとどめをさすことになった。島雪たちも任せることにした。

「ゴージャたちは、新しく来たヒトミとともに3人で魚雷を発射、見事闇火に命中した。

「ぎやあー！やっぱ潜水艦は強いわあー！」

こうして、闇火は撃破された。これで郡津提督の潜水艦は3人になった。郡津提督はあと2人か3人は欲しいと考えていた。一方そのころ、わかりません号では……。

「あーあ、ずぶ濡れだあ。賀千谷提督、資材少しいから回してくれ。」

「おまえ、やっぱ資材使いすぎだなあ。無駄使いの癖を直せよ」

そして、島雪たち6人は帰ってきた。郡津提督と大淀、霧島が待つていた。

「お疲れ様！」

「これ、すごいですね。対潜ミサイルって。」

「あとで夕張さんにお礼を言うのよ。」

「はあーい！」

島雪、与謝野（笛吹）、瑞鳳は潜水艦たちと別れ、食堂に向かっていた。

「あの子たち、心強い戦力になるわね。」

「うん、楽しみだね。」

「あたしたちにも対潜ミサイルつけるよう夕張さんに言いなさいよ。」

「わかったわよ。」

島雪は、与謝野（笛吹）にそう約束した。

## 島雪と女装子提督

「ぎやー！」

駆逐イ級2隻の艦隊がとある艦娘の艦隊に倒された。そこには夕雲型駆逐艦・巻雲、霞、軽巡鬼怒、さらに・・・ある艦娘がそこにいた。

「やりましたね！司令官様」

「ぼくの手にかかればこの通りだよ。」

そう、この艦娘こそが、とある鎮守府の提督であった。先述の3人の艦娘は、その所属艦である。

「提督、引き揚げましょう。」

「わかった。みんな退却！」

提督は自分の所属する護衛艦と艦娘たちとともに引き上げた。同じころ、島雪は秋雲、鈴鹿、青葉、時雨とともにその提督のところへ向かっていた。もちろん、郡津提督はミサイル艇に乗っていた。

「あとどれくらいですか？」

「もうすこしよ。」

「どんな人だろ？その提督って人は。」

「それは見てのお楽しみ、お！合流予定の子が来たわ。」

そこへこの日合流する夕雲型が来た。みたら秋雲と同じ制服を着た艦娘だった。

「あ、あなたは!?!」

「私は夕雲型駆逐艦、風雲（かざぐも）です。よろしくね。」

みんな風雲に挨拶した。

「さあ、行くわよ、もう少しだから。」

そのころ、女装子提督の鎮守府では、女装子提督が寝起きの姿できた。

「提督、岡山提督、もうすぐお客さんだよ。早く着替えて」

「ok!」

女装子提督の名前は、岡山泰希提督である。川内（岡山）と呼ばれ、服に着替えた。

「まだ朝ご飯まだなのに・・・。」

「あとあと。」

おなががすいているのに後回しにされ、少々不機嫌であった。そして、提督の正装である白い服に着替えた岡山提督は、川内（岡山）といっしょに港にむかった。そして、郡津提督一行がご到着となった。

「こんにちは、郡津提督」

「こんにちは、岡山提督。元気そうね。」

島雪たちは、この提督に会うのは初めてだった。ほかに、岡山提督所属の巻雲、比叡、叢雲、夕雲、清霜

も一緒だった。

「あら、また新しい夕雲型入ったの?」

「う、うん、巻雲ちゃんだよ。ほら、ご挨拶。」

「はじめまして!巻雲でえーす!」

島雪と秋雲は、この鎮守府は夕雲型が目立っていると感じた。そして、風雲も初対面なので挨拶した。

「風雲です、よろしくお願いします。」

「よろしく願います。」

その時、岡山提督のおなかになった。

「あらあら、ご飯まだだったの?」

「とんでもないとこお見せしてごめんなさい。」

みんなは大笑いだった。岡山提督は、朝ご飯食べてもいいかと川内(岡山)に聞いた。

o k

が出たので、間宮さんの食堂へ向かった。間宮さんの食堂は各鎮守府には必ずあるの



だ。当然、修理するための工場、病院もある。そして、甘味処もあるのだ。この岡山提督の鎮守府では、イベントもやっていて、地域住民の親睦も深めているのだ。郡津提督の鎮守府でも、イベントはしているが。

「変わった提督さんですね。」

「まあ、そそつかしいところはあるけどね。けど、ただの提督さんじゃないわよ。」

「どう違うの?」

「いずれわかるわよ。」

何のことだか、島雪と鈴鹿にはわからなかった。

「時雨ちゃん、何のことだか、わかるかな?」

「出撃の時になったらわかるよ。」

やはり、その時が来るまでわからなかった。一方、少内提督の鎮守府では、残った資材をすべて投入すべく、準備をしていた。総攻撃をかけるつもりだ。はじめての戦艦と、軽空母を投入すべく、建造中だった。

「ふふふ、この2隻の艦が完成したらあの艦娘たちも目じゃないぞ。」

「提督、名前は?」

「決まっている、戦艦は闇光（やみびかり）、軽空母は赤鷹（せきよう）だ。もうここまできたら残った資材をすべてつぎ込んで臨むまでよ!」

「提督、大提督も失敗続きで、もう猶予はないものと思えと連絡が……。」

「分かってる。だから決戦に臨むのだ。それで、やつらの動きは？」

「郡津提督は、あの女装子提督とやらの鎮守府にいてますが。」

それを聞いた少内提督は、スタンバイしていた艦娘・重巡黒菊に出撃を命じた。ほかに駆逐ハ級2隻、人型駆逐a級2隻、人型軽巡1隻も向かわせた。その様子を偶然見ていた賀千谷提督。

「うーん、どうやらあの提督もいよいよ追い詰められてるってことか。よし、ここは増援をおくつてやるか。回線を。」

「はい。提督。」

賀千谷提督は、少内提督に回線を開いた。増援のことについてだった。彼はそれを承諾した。黒菊たちは、郡津提督を倒すために向かっていった。

「黒菊、そこらの船を襲うのだ。そうすれば奴らはくるはずだ。」

「わかりました。ん？あそこに貨物船が。」

「よし！作戦開始だ！」

そのころ、女装子提督の鎮守府では、朝ご飯を食べ終えた女装子提督が郡津提督たちを鎮守府内を案内していた。護衛艦たんご、したら、ミサイル艇2隻が係留されていた。女装子提督は最新型護衛艦ゆすはら、あいなんも見せた。さらにあと2隻追加予定だと

いう。

「あと補給艦、ヘリ搭載の護衛艦もいかなあ。」

本当に、この女裝子提督は護衛艦がすきである。そのとき、緊急入電が入った。

「提督へこの付近を航行中の貨物船が救難信号をだしています。直ちに出勤してください。」

「わかった、すぐに用意していくから。」

そのとき、郡津提督は、先行して救助に行くことを提案した。

「わかった。お願いね。僕もできるだけ早く出撃するから。」

こうして、郡津提督たちが先に行くことになった。黒菊たちは貨物船を襲っていた。

「いま船に積んでる荷物全部こっちに渡してもらおうか？」

「艦長、まだ救援は来ないんですか？」

「まだだ、まだ来ない……ん！あれは！」

ちょうど郡津提督と島雪たちが到着した。

「待っていたぞ、お前たち。私は重巡黒菊だ。」

「黒菊って、菊月ちゃんのこと？」

「菊月？誰だそいつは？知らんぞそいつは。」

知ってると思ひ、質問はしたが、知らないようだった。

「島雪、なに聞いているの？早く片付けるわよ。」

「みなさん、早く逃げてください！」

郡津提督は青葉と風雲を貨物船の護衛にまわし、貨物船を付近の鎮守府に避難させた。

「まあ、いいだろう、私たちはおびき寄せるためにやっただけだしな。郡津提督に向けて攻撃開始！」

黒菊の号令で戦いの火ぶたはおろされた。

「雨は必ずやむものさ！」

時雨は連装砲2発発射して駆逐八級を撃破、秋雲も連装砲で八級を撃破した。

「やるじゃん秋雲ちゃん。ん！こつちも来たか！」

島雪も砲弾の弾を真つ二つ！人型駆逐艦a級を撃破した。鈴鹿もa級をミサイルで撃破した。

「時雨ちゃん、あれをやろうか？」

「いいね、やろう！」

人型軽巡が時雨に襲いかかった。しかし、時雨はゆうゆうとかわした。そして鈴鹿とのコンビネーション攻撃でみごと撃破した。

「あれがコンビネーション攻撃か。」

「コンビニ姉さん？」

「コンビネーション攻撃よ！」

島雪は秋雲に突っ込まれた。聞き間違えただけなのだが。ついに重巡黒菊だけがおこった。が、今回はいつもと違った。そこへ賀千谷提督の駆逐艦が来た。

「おい、苦戦してるな。応援をよこしてやろう！」

「あ、お願いします。」

賀千谷提督は人型駆逐艦b型2隻、c型2隻、人型軽巡2隻の計6隻を応援によこした。

「よし、攻撃開始！」

「増援をだしたわね！なら、こっちも増援ね！頼んだわよ！」

「はい！」

郡津提督は岡山提督に応援を要請した。その応援要請を受けた。ちようど準備がわったところだった。

「ようし！、準備完了！行くよ。」

「はい！」

岡山提督は、自分の所属の加賀、龍驤、皐月、榛名、天龍を引き連れて出撃した。

そのころ、郡津提督と島雪たちは、7隻の攻撃に苦戦していた。それを見ていた深海

棲艦がそこにいた。

「どうする？あたしたちも行くか？」

「いいじゃん、あいつらに任せよう。あたしたちなんの命令も受けてないし。それより、限定スイーツ食べに行こ！」

「うん。」

・・・結局行ってしまった。そのころ、岡山提督は急いで郡津提督のいる海域に急いでいた。

「榛名さん、偵察機でどこにいるか調べて。」

「はい、提督。」

榛名（岡山）が偵察機をとばした。そして、すぐ付近に郡津提督が戦っているのが見えた。間違いない！そこだ。

「提督、すぐそこです。」

「よし、今から行くぞ！みんな、油断はだめだよ！」

「はい！」

そのころ、郡津提督たちは重巡と増援に苦戦していた。時雨は直撃を受け、大破に近い状態だった。

「だめだよ。どこみてるの。」

「・・・時雨ちゃん、そんなこと言ってる場合じゃないよ。」

そこへ黒菊が発射したミサイルが飛んできて、鈴鹿まで直撃を受け、大破してしまつた。

「時雨ちゃん、ぼくもやられちゃつた。パンツ丸出しだよ。恥ずかしいよ。」

「・・・鈴鹿、君なにやつてるの？人のこと言えないよ。」

時雨はあきれ顔だつた。秋雲も大破していて、反撃不可能な状態だつた。島雪も中破していた。

「島雪い、あたしこんなみつともないかつこうやだよお。」

「でもやるしかないよ。・・・でも自動小銃も弾切れだし。ミサイル艇のほうも弾切れだし。」

もはや全員戦う力はわずかしかなかつた。

「とどめを刺しましょう。提督。総攻撃を。」

「よし、いくぞ！総攻撃、開始！」

そこへ、加賀（岡山）、龍驤（岡山）の飛ばした戦闘機が人型駆逐艦4隻を攻撃、2隻は撃破、残る2隻は大破した。

「あの戦闘機は？」

「ぼくたちの戦闘機じゃない・・・。」

さらに榛名（岡山）の主砲で軽巡が撃破、皐月（岡山）と天龍（岡山）の攻撃で大破した駆逐艦2隻にとどめをさした。

「お待たせ！郡津提督、助けに来たよ。」

さらに岡山提督は自動小銃とミサイルで残りの軽巡1隻を撃破した。

「秋雲ちゃん、鈴鹿ちゃん、時雨ちゃん、あれが……。」

「提督が言っていた……。」

そう、岡山提督は夕雲型駆逐艦・川霧となつて救援にきたのだ。郡津提督がいつていた、ただの提督ではないというのは、このことだったのだ。自動小銃、速射対応連装砲、機関砲、刀剣、対艦ミサイル、ハンドガン、ミサイルランチャーで武装していた。

「さあ、行くよ！」

賀千谷提督と黒菊はまさか岡山提督が艦娘だったとは、驚くしかなかった。

「くつ、あとは頼んだぞ黒菊！退却だ！」

賀千谷提督は急いで退却した。

「こうなつたらあの艦娘だけでも！」

しかし、難なく黒菊の砲撃をかわし、榛名（岡山）のサポートを受け、みごと刀と連装砲で黒菊を撃破した。そして、島雪たちと郡津提督を鎮守府へ送り届けるべく、郡津提督の鎮守府へ向かった。



「ありがとうございます。岡山提督。」

「いいよ。これくらいは。それにしてもかわいいねきみ。みんな傷の方は大丈夫？」

「大丈夫だよ。でもかわいいなんて、てれるよ。」

島雪と岡山提督は楽しそうに話していた。

「秋雲、大丈夫かい？」

「うん、もうすぐだからね。ん？提督、いや、川霧ちゃんかな？風でパンツ見えてるよ。」

「ん？こらあ！はずかしいよ！」

「あははは、かわいい。」

岡山提督は秋雲に照れながら言った。みんなはどつと笑った。

## 島雪と久々のウィッチーズ基地（編集集中）

晴れたある日、島雪は千歳と千代田と一緒にウィッチーズ基地へと向かっていた。なにしろ、郡津提督と同行したときは、うれしいはずの再会で喜ばなかったのだから。でも今回は休みなのでウィッチーズ基地に遊びに行くことになったのだ。芳佳たちの基地で遊べることになってすごく楽しみにしていた。さて、千歳と千代田は水上機母艦である。もちろん姉妹である。

「ついたらお友達紹介してあげるよ！」

「それは楽しみね。」

「どんなお友達だろう？」

もちろん、来てからのお楽しみである。その様子を見ていた少内提督は駆逐艦に乗って指揮をとっていた。失態続きだった少内提督はもはや追い詰められ、最後の戦いをもうとしていた。駆逐艦30隻、軽巡10隻、重巡5隻という構成であった。もちろん、人型も入っている。そして、戦艦闇光（やみびかり）、軽空母・赤鷹（せきよう）もいる。もはや負けられないのである。

「ふふふ、今日は総力戦で挑むぞ。資材もすべてつぎ込んだからな。」

「大丈夫なんですか？この戦力で。」

「ああ、総力戦だからな。賀千谷提督の力は借りないぞ！なにしろありつたけの駆逐艦とか軽巡とか出してるからな。」

そのころ、ウィッチーズ基地についた島雪たちは芳佳たちと再会を果たした。

「靖子ちゃ・・・じゃなくて島雪ちゃん、こんにちは！」

「こんにちは芳佳ちゃん！」

「久しぶりだな島雪。また会えてうれしいぞ。」

「こんにちは、島雪ちゃん！」

なんと！岡山提督も駆逐艦川霧として来ていたのだ！この日は日向、島風、足柄、鬼怒（いずれも岡山提督所属）も来ていた。

「岡山提督がなぜここに？」

「ぼくはこの坂本さんと知り合いなんだ。もちろん、ネウロイの情報も共有してるんだよ。」

実は、岡山提督の鎮守府とウィッチーズ基地は連携してネウロイや深海棲艦の対策・撃破とかに力を入れていた。最も、ネウロイはこの所姿を見せてはいないが。

「初めまして、千歳です。」

「千代田です。よろしくお願ひします。」

千代田と千歳は、坂本少佐に挨拶した。もちろん、初対面である。そのとき、島雪は何かを思い出した。

「ねえ、芳香ちゃん、あたしのストライカーユニットある？」

「あるけど？あ、島雪ちゃんもしかして・・・。」

「そう、空を飛びたくなつたの！」

「ははは、ちゃんと用意してあるぞ、こつちへ来い。」

島雪は、坂本少佐に案内されてドックへ向かった。千代田たちも案内されていった。そして、島雪は服を着替えて、みんなに披露した。ネクタイに紺色の制服、それにストッキングも着けていた。

「どう、かっこいい？！」

「かっこいいね。」

岡山提督も、島雪のストライカーユニットを装備した姿を見るのは初めてだった。これから島雪は、芳佳とリネット、そしてルツキーニと一緒に空中散歩することになった。そして、4人は空へと飛び立った。

「坂本さん、なんであの子あのストライカーユニットで空を飛べるんです？」

「ああ、靖子（島雪）は宮藤達とは異なる仕様のものを使ってるからな。なんなら、岡山提督のも作るよう頼んでもいいんだぞ？」

「考えておきます。」

そのころ、新入りの駆逐艦・山雲を連れて涼風と鈴鹿は15分の遠征に出かけていた。郡津提督の鎮守府では、新しく入った艦娘はみんな、戦艦、駆逐艦、軽巡、重巡、潜水艦などの区別なく15分の遠征が行われている。明石も着任したとき、15分の演習に出かけているのだ。その際は2隻の駆逐艦が随伴することになっている。

「なんかあなたたちのお名前似てるわねえー。」

「まあ、似てると言えはいてるな。」

「間違えないでね。って、あれは？島雪ちゃん？」

「何だい？友達かい？」

涼風が空を飛んでいる島雪たちを見つけた。もちろん島雪たちである。

「あいつ、あんなふう空を飛べるんだ。」

そのとき、島雪が鈴鹿を見つけた。

「鈴鹿ちゃん、あなたもよつといで！」

「うん、長門さんに連絡入れるから……ん!?あれは？」

遠くに、少内提督の艦隊がいるのが見えた。これは大変だと思い、全員ウィッチーズ基地に避難した。もちろん、長門さんにも連絡を入れた。ここでいう長門さんとは、戦艦のことである。もちろん、坂本少佐と岡山提督もそれに気づいた。ペリー又は双眼鏡

で遠くの様子を見ていた。

「島雪ちゃん、ぼくも手伝うよ。今日は航空戦艦の日向さんと軽巡の鬼怒さんいてるから。」

「みなさん、軽巡鬼怒です！よろしく。」

軽巡鬼怒はみんなに挨拶した。もちろん、駆逐艦山雲も挨拶した。

「駆逐艦山雲でえーす！よろしくお願いしまあーす！」

「おい！せっかくだが挨拶は後にしろ！すぐに郡津提督に連絡しろ！」

坂本少佐たちは、少内提督の艦隊を迎え撃つことにした。少内提督は威嚇射撃を命じた。

「よし、あの基地に威嚇射撃だ。そののち、攻撃開始だ！」

「はい、提督。この戦艦閻光が目には物を見せてあげます！」

閻光は威嚇射撃を行い、一気に攻撃を開始した。すでに坂本少佐たちは臨戦態勢を整えていた。

「よし、こちらも攻撃開始だ！気を抜くなよ。」

「はい！坂本少佐！みんなもいい？」

「はい！」

島雪たちも攻撃を開始した。航空戦艦になったばかりの日向（岡山）は瑞雲を飛ばし、

駆逐艦2隻撃破、島雪、千歳、千代田も駆逐艦2隻を撃破した。鈴鹿と涼風も駆逐艦2隻撃破した。芳佳とリネットは軽巡1隻撃破、坂本少佐も日本刀で軽巡1隻撃破した。

「これだけの数用意できたね。岡山さん。」

「うん、どんどんいくよ！足柄さんたちもお願いします！」

「分かりました提督！この足柄にお任せを！いくわよ！島風さん、鬼怒さん！」

「あたしも手伝うよ！」

島風（岡山）の素早い攻撃、鬼怒（岡山）の砲撃で重巡を中破させ、とどめは足柄と島雪でとどめをさした。サーニヤもミサイルランチャーで人型の軽巡を1隻撃破した。

「おい鈴鹿、まだ来ないのかよ？提督は？」

「もう少しの辛抱だよ。涼風ちゃん。あ、来た！」

軽巡木津と薄野、吹雪と睦月が来た。

「待たせたな、みんな。」

「提督は？」

「今準備に手間取ってるって。あとの2人も来るってよ。」

「さあ、攻撃開始するわよ！」

木津はミサイルランチャーで人型の駆逐2隻を撃破した。吹雪と睦月も力を合わせて軽巡1隻を撃破、薄野も駆逐2隻を一気に撃つした。

「ううむ、まさかこれほどとは。16隻も沈められるとは。」

「提督、もう駆逐艦半分になりました。軽巡も……。」

「こうなったら軽空母と戦艦にかけろか。」

結局、すべての駆逐艦、軽巡、重巡は撃沈されてしまった。ついに戦艦閻光、軽空母赤鷹の出番が回ってきた。閻光は扶桑形をモチーフにしており、赤鷹は飛鷹型をモデルにしており、30機も艦載機を積める性能を持っていた。その時、艦載機10機が島雪たちのほうに飛んできた。

「な、何なのあれは!?!あたしあれ怖いのよおー!」

「島雪ちゃんどうしたの?」

そう、彼女は1話か2話あたりで艦載機に襲われてからその艦載機が怖くなっていた。た。

「ほう、艦載機が怖いのか。よし、全部の艦載機を出せ!」

残りの艦載機も飛び出した。さらに戦艦閻光も攻撃を開始した。その戦艦には少内提督が乗り込んでいた。その提督にとっては初の操縦できるタイプのものであった。

「ふふふ、38センチ連装砲くらえ!」

突然連装砲から砲弾が発射され、砲弾に当たった大きな岩は跡形もなくなった。

「(、これは……)」



「なんて威力だ。」

赤鷹の艦載機の攻撃と戦艦闇光の攻撃で、島雪たちは防戦一方だった。芳香たちも同じだった。

「足柄さん、郡津提督に救援は？」

「出しました。少々遅れるとのことで……きやー！」

艦載機の攻撃で足柄（岡山）が中破した。

「大丈夫？」

「な、なんとか……」

続いて、山雲や千代田まで中破してしまった。

「このままでは……。そうだ！」

思いついた島雪は、ウィッチーズ基地へ向かった。

「ん？一人逃げたか？まあいい、攻撃続行だ！」

「わかりました」

基地に入った島雪は自分の艦装を外しストライカーパックを装備しようとした。

「お願いします！あたしにあの装備を使わせてください！」

「ですが、坂本少佐の許可がないと。」

「使わせてやれ。構わん。彼女なら敵を倒せる。」

「わかりました。」

そして、ストライカーパックを装備した島雪はマシンガンをもって出撃した。

「あ、芳香ちゃん、あれ」

「あ、靖子ちゃん！え？ストライカーパック!?」

それを見た少内提督は

「何だあれは!?!とにかくあれも撃ち落とせ!」

と命令し、赤鷹の艦載機10機が島雪めがけて飛んできた。しかし、マシンガンで1

0機すべてを撃墜した。

「すごい！提督、あの子艦載機怖がつてたはずじゃ。」

「うん、全部撃ち落としちゃった。」

「さすがはやるなあ!」

そしてついに残りの艦載機20機すべて撃墜された。

## ともかと軽巡大井さん、そして魔女出現（編集集中）

ある小島に、黒髪の少女がちよこんと立っていた。

「ここにも魔女がいるの？ だったら放ってはいけないわ。」

そこへ、30分の遠征に来ていた鈴鹿、風雲、如月、菊月の4人が来た。

「やっど休めるな。」

「ええ、今日もとってもいいお天気ね。」

「さ、ジュース飲むか。」

「うん！」

自販機に向かい、人数分のジュースを買い、休憩に入った。4人がくつろいでいると、鈴鹿は黒髪の少女を見つけた。

「あれ？ あの子、どこかで見たような？ 朝潮ちゃんじゃなさそうだし。」

「どうしたんだ？ 鈴鹿。」

「何でもない。」

「声かけてみたらどうだ？」

すると、少女も鈴鹿たちの方を振り向いた。少女もまた、見覚えのある顔なのか、鈴

鹿を見て少し驚いた。

「たしか、あの女の子は、ゆうきさん!?でもなんでここに?」

「たしかあの子は、ほむら、ちゃん!」

どうやってここへ来たのか?なぜここにいるのか?鈴鹿にはわからなかった。

「誰だよあれは?」

「ぼくのお友達だよ。紹介するねって、あれ!?いない!」

いつのまにか少女はいなくなっていた。どこへ行ったのだろうか?

「どこにもいないじゃないか。」

「鈴鹿さん、疲れてるんじゃないの?」

「早く鎮守府に戻りましょう。」

結局、鈴鹿はほむらを見失ってしまい、鎮守府へ戻ることになった。その鎮守府に伊13（以下ヒトミ）が着任して潜水艦は3人になった。鎮守府はますます賑やかになった。そして、さらに新しい艦娘、弥生や雪風、鬼怒、夕雲も加わり、ますます賑やかになった。

「伊13です、ヒトミと呼んでください。」

「軽巡鬼怒です、よろしくお願いします。」

「幸運の駆逐艦、雪風です。よろしくお願いします。」

「駆逐艦、弥生です。よろしく。」

「夕雲型駆逐艦、夕雲です。よろしく。」

とくにそれを見た島雪、秋雲、風雲、鈴鹿は大興奮だった。なにしろ新しい仲間が来たのだから。

「あなたが島雪なの？風雲から聞いたわよ。秋雲さんと大の仲良しさんだそうで。」

「あ、はい！よろしくお願いします！」

島雪は相当緊張気味だった。あとでイラストも見せてほしいともいわれた。もちろん、鈴鹿も緊張気味だった。鬼怒という新しい仲間が来たのだから。自己紹介が終わった後、鈴鹿は島雪を部屋に呼び出した。もちろん、ほむらのことであつた。

「え？ほむらちゃんか？この艦これの世界に？」

「そうなんだ。あれはたしかにほむらちゃんだった。」

「だとしたらどうやってこの世界に来たの？」

「それはわからないでもこの世界に来てたのは事実だし。」

そのことを聞いた島雪は薄野たちにも話すことにした。もちろん、薄野たちはそのことをリンディ提督や郡津提督、坂本少佐に報告することにした。ほむらが来たつていうことは、かつてまどかたちが倒した魔女もこの世界にいるということなのか？彼女たちにとって謎は深まるばかりだった。一方、賀千谷提督は、新しい駆逐艦の開発に力を入

れていた。少内提督が捕まり、提督の座を追われてからは、郡津提督、岡山提督たちの担当になった。

「少内提督は資材の無駄遣いをしおって。だが、今回開発した雷巡り級型は、これまでに通里にはいかなぞ。夜戦に強い装備を使ってるからな。」

今まで出てこなかった雷巡が賀千谷提督によって開発され、その日のうちに完成した。ほかに輸送ワ級型も2隻完成させていた。雷巡の名前は闇霧である。

「よし！今夜から貨物船襲撃作戦を開始する。雷巡闇霧を筆頭に駆逐艦3隻、輸送艦2隻で作戦に当たる！用意はいいな！」

「わかりました！」

その夜、岡山提督は新しく入ってきた由良、卯月、春雨、早霜、清霜を連れて15分の遠征に出ている。駆逐艦川霧として。その時、ほむらを目撃した。

「何なの？あの子。黒い髪の毛？あの服かわいいね。」

「どうかしましたか？」

「なあに、あの人、女の子を引き連れて……。まあいいわ。帰りましょう。」

しばらくして姿を消した。岡山提督はあれが誰なのかはわからなかった。一応翌日報告することにした。そのとき、爆発音がした。

「な、何なの今の爆発音は？」

「提督さん、大変です！貨物船が！」

由良が貨物船が燃えてるのを発見した。急いで現場に急行すると雷巡閤霧たちが貨物船を攻撃していた。岡山提督が連装砲で閤霧を攻撃した。

「……邪魔が入ったか。まあいい、少なめだが物資は手に入れた。引き上げだ！」

閤霧たちが退却すると、岡山提督は早霜にたのんでに消防艇、救助艇の出勤を要請した。こここのところ貨物船が襲われてるといふ事件が起こっていた。もちろん、郡津提督たちや、坂本少佐たちにもその情報は入っていた。そして、大本営より夜間のパトロールを強化するように命令があった。翌日、島雪たちは岡山提督と電話で会話していた。

「え？岡山さんも？あの女の子を？」

「そうなの。名前はわからないけど。名前はなんていうかわかる？」

「きつとほむらちやんだよ！」

「ほむらちやん？」

岡山提督も初めて知った。みたこともない女の子の名前を。なにしろ、別の世界の住人なので、なおさらである。そのとき、不知火が島雪たちの部屋にきた。

「みなさん、提督がお呼びです。全員講堂へ来てください。皆さんお待ちです。」

「わかった！今行くから。」

「それと、お友達も来てます。」

「お友達？」

「それは来てからののお楽しみです。」

島雪たちはとにかく、講堂へ集まることにした。講堂では、交戦したことがある鎮守府からデータがほかの各鎮守府に届いていた。あの闇霧のことである。そして、郡津提督は艦娘たちに説明を始めた。

「このところ、この海域で貨物船の被害が相次いでいます。そこで、当鎮守府は、岡山提督、伊達一提督、リンデイ提督、ウィッチーズ基地、さらに海上保安庁、海上自衛隊、周辺の鎮守府と連携してパトロールの強化をいたします。」

島雪たちは初めて知った。この世界にも海上自衛隊、海上保安庁があるんだなど。

「さらに、今後のこともあるので、この子たちにも協力してもらおうことになりました。いらっしやい。」

それを見て、島雪たちは驚いた。なんと、なのはたちだった。

「あ、なのはちゃん!?!それにフェイトちゃんやシグナムさんも?！」

「はやてちゃんもいてるよ。それにヴィータちゃんも」

「シヤマルさんも。これは一体!?!」

郡津提督は、それについて説明をした。

「この人達にも手伝ってもらおうことにしました。」



「よろしくね、靖子ちゃん。」

しかし、ここでは靖子は軽巡島雪、駆逐艦では潮風である。あとで説明しないといけないと思った。同じころ、岡山提督の鎮守府でも、時空管理局と連絡できる装置を設置する作業が行われていた。もちろんクロノとエイミイたちも一緒だった。

「ごめんなさいね。あなたたちにも協力を要請することになってしまつて。」

「いいえ、大丈夫ですよ。我々の仕事ですから。あ、リンディ提督。これお渡ししないと。」

岡山提督はこの前倒した軽空母赤鷹、戦艦闇光、重巡黒菊などのデータをリンディ提督に渡した。

「ありがとう。エイミイ、そつちは作業終わったの?」

「はい、設置完了しました。」

そして、岡山提督の基地の担当オペレーターはエミーナになった。管理局に入って2年目だが、コンピューターの技術はお手の物だった。

「エミーナ、異常はない?」

「はい、ないです。?大変です!南西諸島近海でコンテナ船が襲撃を受けています。」

「なんだつて?すぐに郡津提督に連絡を!」

「この知らせは郡津提督の鎮守府にも届いた。」

「どうしたの大淀さん！」

「大変です！ 深海棲艦が出現しました。コンテナ船が攻撃を受けてます。ウィッチーズ隊からの連絡です」

「何ですって？ すぐ出動を！」

島雪、鈴鹿、叢雲、摩耶、赤城、比叡が出動、なのは、フェイトも出動した。なのはと会ったその日にいろいろとお話したかったのにと島雪は思った。しかし、そうも言っていない。現場に着くと、重巡闇霧がいた。装備は20.3cm連装砲、機銃、3連装魚雷である。ほかに駆逐艦6隻、軽巡2隻、輸送艦2隻だった。それに空母ヲ級1隻が来ていた。そのとき、対面するな否や、突然挨拶を شدした。

「私は空母ヲ級です。以後、お見知りおきを。」

「あ、こちらこそ。よろしくお願いします。」

全員挨拶を終えた後、空母ヲ級は突然帰ろうとした。

「賀千谷提督、これでよろしいですね。お先に失礼します。」

「おい！ 戦闘はどうした戦闘は！」

「用事がありますので失礼します。」

そう言うのと、通信を切って帰ってしまった。